

北方民族博物館調査報告

湧別町川西遺跡

—北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査—

1995



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

例 言

- 1 本書は、北海道立北方民族博物館が調査研究事業の一環で、1991（平成3）年度から1993（平成5）年度にかけて実施した湧別町川西遺跡での発掘調査の報告である。
- 2 発見された動物遺体、炭化種子の同定、銚先の付着物の分析については以下のかたがたにお願いし玉稿を賜った。
動物遺存体：西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館助教授）
炭化種子：吉崎昌一氏（北海道大学教授）
銚先の付着物：小林幸雄氏（北海道開拓記念館学芸員）
- 3 骨角器の素材同定には西本氏と佐藤孝雄氏（常葉学園富士短期大学講師）をお願いした。
- 4 上記2以外の本文の執筆と本書の編集は、調査担当者である本館主任学芸員青柳文吉がおこなった。
- 5 出土遺物は、当分のあいだ北方民族博物館が保管し、随時展示にも使用する予定である。

謝 辞

- 調査のきっかけを作ってくださった米村哲英氏、地元湧別町教育委員会と遠軽町考古学同好会に感謝します。
- 発掘にご理解くださった土地所有者伊藤務氏とご家族に感謝します。
- ご多忙のところ分析・同定をお引き受けくださった西本豊弘、吉崎昌一、小林幸雄、佐藤孝雄の各氏のご厚意に心から感謝します。また炭化種実の選別を指導して下さり、その同定作業に当たられた椿坂恭代氏（北海道大学埋蔵文化財調査室）に感謝します。
- 当館の発掘調査にご理解と数々のご助言をくださった北海道教育庁種市幸生氏と網走管内埋蔵文化財懇話会のメンバー、とくに紋別市立郷土博物館佐藤和利氏、常呂町教育委員会武田修氏に感謝します。

目 次

例言

第1 道東におけるオホーツク文化の 遺跡調査と北方民族博物館	1
第2 川西遺跡の調査	3
1 調査に至るまで	3
2 遺跡の立地	5
3 川西遺跡周辺の遺跡	6
4 昭和35年の川西遺跡の発掘について	9
5 北方民族博物館による調査	11
(1) 概要	13
(2) 平成3（1991）年度の調査	13
1) 3号竪穴	13
(3) 平成4（1992）年度の調査	21
1) 2号竪穴	21
2) 4号竪穴	31
3) 6号竪穴	33
4) 7号竪穴	34
(4) 平成5（1993）年度の調査	36
1) 8号竪穴	36
2) 1号竪穴	41
3) 9号竪穴	41
4) 10号竪穴	45
(5) 分析と同定	49
銚先端部に残された赤色系付着物	49
川西遺跡出土の動物遺体	59
川西遺跡出土の植物種子	69
(6) 小結	77
1) 遺構	77
2) 遺物	79
(7) 普及事業	81

第1 道東におけるオホーツク文化の遺跡調査と 北方民族博物館

第二次大戦の敗戦以後、オホーツク文化が改めて脚光を浴びるきっかけを作ったのは、道東・網走市にある国指定史跡モヨロ貝塚の発掘調査であった。東亜考古学会、北見郷土博物館（現網走市立郷土博物館）共催のもとに東京大学、北海道大学その他のメンバーで構成された合同調査団の本格的な発掘が行なわれたのは1947（昭和22）、48年のことである^{注1)}。貝塚、墳墓、竪穴住居、そしてそれらに伴った様々な出土遺物など、モヨロ貝塚はオホーツク文化研究のための膨大なデータを提供した。

オホーツク文化研究の画期となったこの発掘調査からすでに半世紀が過ぎようとしている。この間、道東では大学や教育委員会、考古学研究者などが中心になってオホーツク文化遺跡の発掘調査が進められてきた。東京大学文学部が常呂町や斜里町、羅臼町で、東京教育大学が根室市で、北海道開拓記念館が網走市でそれぞれ研究を目的にした調査を行なっている^{注2)}。

また遺跡の活用を目的とした発掘調査も、標津町カリカリウス遺跡で行なわれている^{注3)}。一方、近年の土木工事に伴う行政機関による発掘調査の対象としてはオホーツク文化遺跡も例外ではなく、本格調査の対象となるケースが多くなってきた。常呂町常呂川河口遺跡、栄浦第二遺跡、斜里町須藤遺跡、羅臼町松法川北岸遺跡などがそれである^{注4)}。大学などが行なってきた発掘を「点」の発掘とするならば、いわゆる土木工事に伴うそれは「面」の調査である。オホーツク文化遺跡が面として把握される例が多くなってきたことによって、北海道の東部におけるオホーツク文化研究がさらに深まりつつある。

網走市立郷土博物館の館長を務め、モヨロ貝塚を守りながら調査をつづけて来た米村喜男衛氏は、83歳のとき、講演に使用するために作った講演要旨の中に、モヨロ貝塚の思い出を綴るとともに、将来、「北方民族博物館」をモヨロ貝塚のある網走市に建設することを夢に描いていたことを記している^{注5)}。その後、地元の誘致活動が実を結んで米村氏が待望した北方民族博物館が、北海道立の博物館という社会教育機関として誕生したのは1991（平成3）年のことである。

この博物館を設置するに当たっての基本理念や具体的な建設構想の作成などにおいて、課題の一つとされたのは、北海道と北方地域の文化交流を歴史の中に見ることができる具体的な例としての「オホーツク文化」をどのように取り上げるかということであった。

幸いなことに、網走市からモヨロ貝塚の出土遺物を中心とするオホーツク文化関連遺物がアイヌ、ウイльтаなどの民族資料とともに、新たに設置される道立の博物館に寄贈されることになったことから、オホーツク文化の展示コーナーを設けることが可能となった。

開館時以来から北方民族博物館では調査研究や展示、教育普及などといった博物館事業の中にも、オホーツク文化をはじめとする先史文化をその対象として位置づけて来ている。

モヨロ貝塚の存在がきっかけとなって誕生したともいえる北方民族博物館では、当面道東のオホーツク文化遺跡の調査研究を実施することによって、博物館の諸事業にこの成果を反映させることとした。

注)

- 1 東京大学文学部考古学研究室編 1972 『常呂』本文編 東京大学文学部
- 2 東京大学文学部考古学研究室編 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下巻)』
東京大学文学部
東京大学文学部考古学研究室編 1972 『常呂』本文編 東京大学文学部
- 八幡一郎他 1974 『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部考古学研究報告Ⅳ 東京教育大学文学部
- 野村崇他 1982 『二ツ岩』北海道開拓記念館研究報告第7号 北海道開拓記念館
- 3 楢田光明他 1982 『史跡標津遺跡群伊茶仁カリカリウス遺跡発掘調査報告書』標津町教育委員会
- 4 金盛典夫他 1981 『斜里町文化財調査報告Ⅰ』斜里町教育委員会
武田修 1990 『TK-73遺跡』常呂町教育委員会
涌坂周一他 1984 『松法川北岸遺跡』羅臼町文化財報告8 羅臼町教育委員会
- 5 米村喜男衛 1985 『モヨロ悠遠』私家版

第2 川西遺跡の調査

1 調査に至るまで

平成3年2月、北方民族博物館の常設展が供用開始した。これとともに平成3年度からは博物館活動の一つとして先史文化の調査研究事業を行なうことになった。当面はオホーツク文化の遺跡発掘を実施し、基礎的な資料を得るとともに、展示資料の充実を目指すことに主眼をおいた。

調査地の選定にあたっては、いくつかの条件を設定した。

①北海道東部におけるオホーツク文化の状況を把握するための基礎的なデータを得るために保存状況の良い遺跡であること。

②とくに北海道東部、この地域に顕著ないわゆる「ソーメン文」とよばれている貼付浮文の土器を伴う集落遺跡がオホーツク海沿岸地域でどのように展開するのかを解明すること。

④数年の継続調査ができること。

おおよそ以上のことを前提にして、さらに博物館としての収蔵資料・展示資料の充実も含めて調査地点の選定をおこなった。

選定段階では、網走市専門委員の米村哲英氏から助言をいただくことができた。候補にのぼったうちで、保存状態が比較的良好と思われ、そして、当館の目的を達成できる遺跡としてあげられたのが網走管内湧別町所在の川西遺跡であった(図1)。

川西遺跡は当時網走市立郷土博物館館長であった米村喜男衛氏とオホーツク文化研究会の手によって、1960(昭和35)年に一部発掘調査がなされている。成果については概報が出版されている^{注1)}。この時の調査については後述するが、オホーツク文化期の貼付浮文土器を伴う集落跡と擦文時代の集落跡が重複することは概報からとらえられるものの、その実態はほとんど分からないというのが現状であった。常呂町以西では、貼付浮文を伴う集落跡の本格的な調査例はなかったので、この川西遺跡の発掘成果は、北海道のオホーツク文化の研究にとって重要な位置を占めるものと考え、取り組むこととした。

しかしこの川西遺跡は個人の所有地内にあり、しかも牛馬の放牧地として利用されている場所でもあった。土地所有者は、この地で長年営農されてきた伊藤務・照子夫妻である。伊藤夫妻は、われわれの土地の立入りを伴う調査の申出に対し、快く許可くださった。しかも継続調査とすることにもご理解を示された。後述するような成果が得られたのもひとえに伊藤夫妻とご家族のご協力とご理解の賜物である。

また地元の文化財保護に専念されている湧別町教育委員会においても、当館の調査の目的を理解していただき土地所有者にもその旨を説明され、あるいは発掘補助員を紹介して下さるなど多大なご協力を賜った。このようにして、この地域に産声を上げたばかりの北方民族博物館に対する理解の輪が大きく広がるなかで発掘調査が可能になったのだった。

注1) 米村喜男衛 1981 「北海道紋別郡湧別町川西遺跡」『北方郷土・民族誌』1 北海道出版企画センター

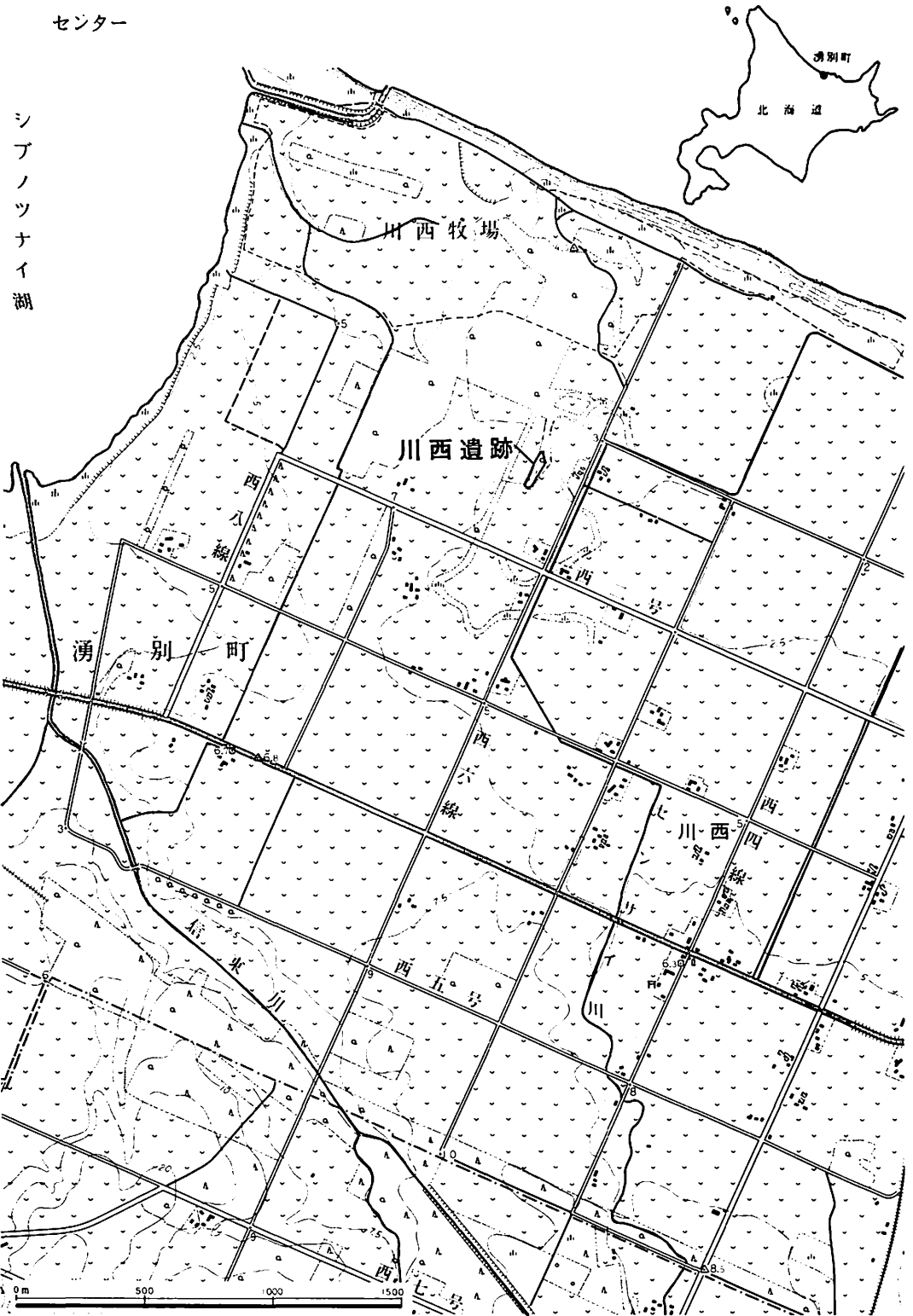


図1 遺跡位置 (国土地理院発行 (平成3年) の2万5千分の1地形図「中湧別」を使用)

2 遺跡の立地

道北の宗谷岬から道東の知床半島まで、弓なりをなすオホーツク海に面した沿岸は比較的単調な海岸線がつづく。段丘が海岸までせまっているところが大部分であるが、河川の河口部を中心にして海岸砂丘が広がり、その内側には海跡湖が形成されているところもある。砂丘上にはいわゆる「原生花園」と呼ばれる海岸草原が広がっており、道東を代表する自然景観のひとつとなっている。

そのオホーツク海沿岸の中央部に流れ下る湧別川は、オホーツク海にそそぐ河川としては、常呂町に河口をもつ常呂川に次ぐ大きさの河川で、流長88km、流域面積1,610km²である。この湧別川は大雪山系の天狗岳、チトカニウシ山付近に源を発し、途中いくつかの河川を併せながらオホーツク海に達している。とくに生田原川との合流点から下流域は、遠軽町、上湧別町、湧別町に及ぶ広い平野部を擁している。

湧別町川西地区に所在する川西遺跡は、海岸線から直線距離にして1.2kmほど内陸に入った、湧別川の支流センサイ川に面した標高約6mの段丘縁辺に位置している。このセンサイ川は上湧別町旭地区で湧別川本流からの枝流となって湧別町川西地区を蛇行しながら流れ下り、湧別川河口近くで再び本流に合流する。現在、センサイ川はショート・カットされるなどして大部分が旧河川となっており、各所に点在する河跡沼及び湿地として川の名残を止めている程度である（図1と図2のセンサイ川の流路の変化を比較参照していただきたい）。

1857、8（安政4、5）年、当時蝦夷地とよばれていた北海道をあるいた幕末の探検家松浦武四郎は、湧別川本流をさかのぼる途中、目にした川西地区のことを「西部由宇辺都誌」に次のように記している^{注2)}。

「トイペツ」（解説者注：せんさい川）

「比処右の方川巾七八間、遅流にして谷地様に兩岸なりてふかし。惣（そうじ）て蘆荻叢（むらがる）也。比上の処はセタニウシといへる処にして、鹿梨の原にして浜通り也。其トイヘツまま入るや三四丁にして一つの沼有。廻り七八丁、桃花魚・鯨・雜喉多しと聞り。其名義本名はトヨヘツのよし也。昔し鮭漁の時腹を投ぜしによって号るとかや。上に沼有。よつてなづくとも。比川口より本川は左りの方針位西南に向ひて右のかたには少しツ、山を見懸り。また、川も少し水勢早くなりて兩岸樹木多く有り」。

鬱蒼とした森林、湿地であった地域を農地に変えるべく、本格的な本州人の入植が開始されるのは明治時代後半以降からである。「明治27年、高知県人によって原始林地帯の川西に第一歩が印された」と、川西開基100年記念誌に記されている^{注3)}。現在、川西地区は畑作、酪農を中心とした豊かな農村地帯を形成している。川西遺跡をのせるこの低位段丘面は、遺跡が多くみとめられる場所でもあり、縄文時代から今日まで、連続として人間の営みが続いてきている。

注

1) 松浦武四郎（秋葉実解説）1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』中 北海道出版企画センター

2) 川西開基100年記念事業実行委員会編 1993『川西開基100年記念誌・愛のふる郷』

3 川西遺跡周辺の遺跡

川西遺跡を含む湧別町内及び周辺市町の先史時代遺跡については、大場利夫氏が『湧別町史』のなかで詳しくまとめている^{注1)}。大場氏が指摘するように、湧別町とその周辺は「いつも北方大陸より本道に侵入する外来文化の拠点となり、いわば、窓口的役割を演じていた」場所であり、先史時代の人間によって重要な位置付けがなされていたと見ることができる。その重要さの一つの要因として「黒曜石」がある。黒曜石は先史時代人にとって石器の材料として殆ど欠かすことができない岩石である。湧別川は上流にその原産地を擁していることから、流域は黒曜石の一大供給地であった。これまでの考古学的な調査では、旧石器時代からこの地域の黒曜石が使われていることが分かっている。

われわれは川西遺跡の調査中やその前後に、周辺の遺跡の分布調査をおこなってみた。分布調査には遠軽町考古学同好会の吉川文雄、鈴木克己、尾形彰の各氏を煩わせご案内いただいた。ここではいくつかの代表的な遺跡について触れておくことにしたい。

湧別原野のうちでも川西地区は有力な開拓地として見なされていたことから、早くから開墾された。そのことによって消滅した遺跡も多いと思われる。例えばセンサイ川の流域には、川西遺跡のほかにいくつかの遺跡があったという情報もあるが今となってはまったく知る術がない。

①シブノツナイ堅穴群

川西遺跡が位置する低位段丘の西側、海を目の当たりにする段丘端にある。昭和41年に分布調査を実施した大場利夫氏によると、665か所の堅穴の存在が確認されたという^{注2)}。遺跡地は現在は町営の放牧地になっており、疎林のなかに堅穴をしめす窪みがここかしこに分布している。これらは縄文時代から統縄文、擦文時代にかけて形成された遺跡で、多くは擦文時代のものとされている。川西遺跡の擦文時代の集落跡との関連性が注目される。本遺跡は1967（昭和42）年、北海道の指定史跡となっている。

②長野遺跡

シブノツナイ湖の南岸に位置する縄文時代前、中期を主とする遺跡である。櫛目文土器である「シブノツナイ式土器」を出土する標式遺跡である^{注3)}。かつては堅穴を示す窪みがあったとされるが、現況は、一帯が草地になっており確実な位置はとらえることは出来ない。

③丁寧堅穴群

サロマ湖の砂嘴上にあり、湖側に位置する。近くをテイネイ川が流れている。堅穴が30～40か所あったとされるが、現在は林の中に数か所の堅穴の窪みが認められる程度である。擦文文化あるいはオホーツク文化の遺跡と見られている。オホーツク文化の遺跡とすると、湧別町内では川西遺跡とこの丁寧堅穴群の2ヵ所ということになる^{注4)}。

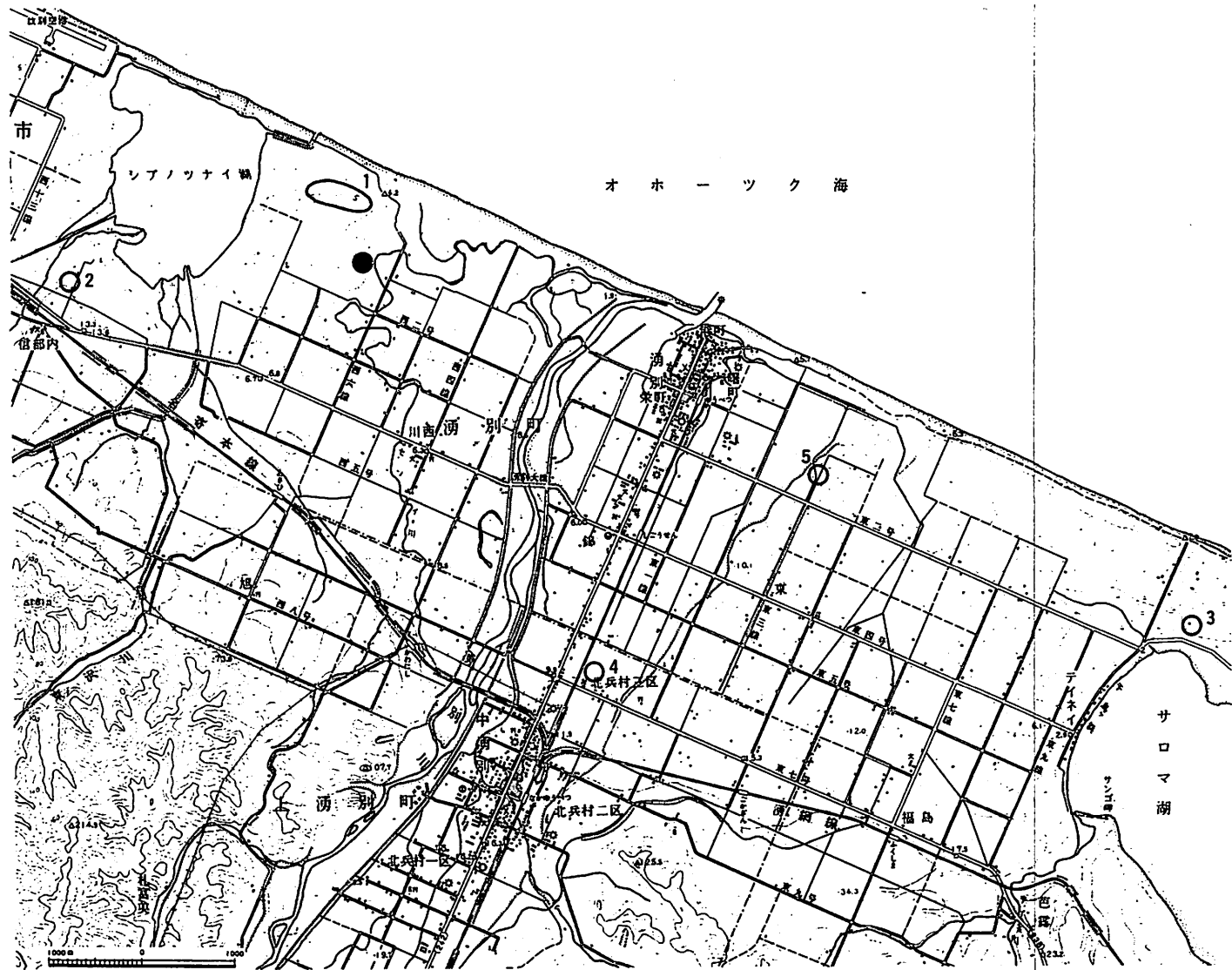


図2 周辺の遺跡（国土地理院発行（昭和51年）の5万分の1地形図「中湧別」を使用）
 ●：川西遺跡，1：シブノツナイ壑穴群，2：長野遺跡，3：丁寧壑穴群，4：5の3遺跡，5：市川遺跡

④ 5 の 3 遺跡

湧別町と上湧別町の行政界付近に位置する。遺跡は本来湧別川に面した低位の段丘端にあったが、現在は削平され耕作地となっているため段丘を示す往時の景観はないが遺物が採集できる。縄文時代後期末から晩期初頭にかけての遺跡である。小型土器、注口土器、耳栓、玉などが採集されていることから墳墓遺跡、とくにこの時期石狩低地帯などでさかんに形成される集団墓の可能性がある(図3)。遠軽町在住の清野忠氏によって採集された遺物は、大場氏によって『湧別町史』に紹介されている^(注5)。



図3 5の3遺跡出土遺物

⑤市川遺跡

湧別川を挟んだ東側、川西遺跡と相対する低位段丘上にある。オホーツク文化が西暦紀元以降の北海道への北方文化の流入の代表としてあげられるとするならば、この市川遺跡は、それ以前の縄文時代における北方文化の流入をしめす遺跡である。「石刃鏃」を伴う遺跡として古くから知られている。学術発掘、緊急発掘が数回にわたって実施され、報告がなされている。現在は耕作地である^(注6)。

注

- 1) 大場利夫1965 「湧別の古代」『湧別町史』湧別町
- 2) 湧別町、同町教育委員会1966 『湧別町シブノツナイ遺跡調査概報』
- 3) 安部三郎1958 「シュブノツナイ式土器(楯目文土器)について」『アイヌモシリ』
- 4、5) 注1に同じ。
- 6) 木村英明1973 『湧別市川遺跡』湧別市川遺跡調査団、湧別町教育委員会
米村哲英1985 『湧別市川Ⅱ遺跡』湧別町

4 昭和35年の川西遺跡の発掘について

米村喜男衛氏による調査概報、「北海道紋別郡湧別町川西遺跡」における川西遺跡とは、現在、北海道指定史跡とされている「シブノツナイ堅穴群」と、われわれが調査した川西遺跡とを合わせたものとされている。米村氏は、それらを土地所有者の姓をとってその前者を川西遺跡の「野津牧場地点」、後者を「伊藤地点」と呼ぶことにした、と概報にはある^(注1)。

米村氏らの調査は3日間で、この間、オホーツク文化期の堅穴を2か所(第1号堅穴、第2号堅穴)、擦文文化期の堅穴1か所(第3号堅穴)を調査している。

第1号堅穴は、平面形が長方形で、南北9.1m、東西7.3m。攪乱を受けているが遺物が豊富にあったことがうかがえ、火災にあった住居跡だったことも炭化材が散乱していることでとらえられている。2号住居跡も火災住居跡だったようである。そして床面からは「熊の丸彫りとシャチ

鯨の胴部より上方の丸彫りが発見された」(図4)とある。

さてオホーツク土器についての記載についてであるが、紛らわしい説明がなされているが、ともかく概報の冒頭の写真にもあるように貼付浮文の土器が大部分を占めていたと思われる。

平成2年、米村氏がかつて館長を務めていた網走市立郷土博物館から収蔵資料目録が刊行されている^{注2)}。ここには川西遺跡の資料として1,200点余りが記載されている。これに関して発掘調査による出土物であるというコメントは目録にはな



図4 川西遺跡出土遺物

いが、巻末掲載の写真図版に示されている資料と、米村氏の概報での記載(たとえば水鳥が貼付されている土器など)とが照合できるものがあること、われわれが調査した堅穴から出土した土器片と同一個体のものが目録図版に示されていることから1960(昭和35)年の調査遺物であることは疑いないようである。目録図版に示されているオホーツク土器は、大半が貼付浮文土器であり、そのほか沈線文土器が数点紹介されている。

遺跡調査からとらえられた事実から、米村氏は概報の随所で、アイヌや北方民族との関係を説いているが、残念ながら遺跡そのものについてはほとんど説明をしていないので詳細についてはとらえられない。

とくに概報には、遺憾ながら遺跡を示す図が掲載されていないことから、当館の今回の調査では、米村氏らが調査した場所を特定することができなかった。このため当時の調査に参加し、概報にも氏名が示されている清野忠氏、地元在住の西川道雄氏に、現地において調査地点を確認ねがったが当時のことは記憶の彼方に消え、あいまいであったし、また当時高校生として参加していた網走市在住の大石克己氏にも確認したが確証はえられなかった。とりあえず、土地所有者の伊藤氏の記憶によって特定することができた当時調査対象となったであろう堅穴を、われわれの調査では1号堅穴、2号堅穴とした。

昭和35年当時は立木が鬱蒼としており、林床にはササが一面にはえていたという。現在は放牧地として利用されていることから、背の低いササがまばらに生え、ところによっては牧草が成育している。とにかく大きく変わったのは、遺跡地ではなくてその周囲である。川西遺跡とは地続きの畑にも堅穴の窪みがあったが、均平化され草地と化している。川西遺跡が林の中に守られているのは、効率化が求められている現代農業にあって、長い間採算を度外視して遺跡保存に協力して下さった伊藤氏の理解があったからに他ならない。

注

- 1) 米村喜男衛1981 「北海道紋別郡湧別町川西遺跡」『北方郷土・民族誌』1 北海道出版企画センター
- 2) 網走市立郷土博物館編1990 『収蔵考古資料目録第4集「オホーツク海沿岸の遺跡」』網走市立郷土博物館

5 北方民族博物館による調査

遺跡の状況を平板を使用して測量したのが図5である。図中の破線で示したように、大小合わせて49か所の竪穴の窪みがとらえられた。その中には竪穴を示す窪みであるのかどうか分からない不確実なものも含まれている。

東側の段丘縁辺は、かつてあったセンサイ川の流水に浸蝕されているため竪穴の一部が削られている。また境界の西側は段丘面が続いているが、土地所有者が異なる。過去に、境界線上、北側の窪みの一部が埋められてしまっていることから平面長方形を呈するものがある。これらを含め本遺跡の北側に集中する竪穴群は、その形態から擦文時代のものと思われる。境界の北西側畑にも僅かにくぼみを示す徴候がいくつかあることから、竪穴はここにも確実に存在する。

本遺跡の南側に集中する竪穴群の多くは、これから報告するようにオホーツク文化期のものである。南東側の段丘裾に位置する同期の竪穴の一部は耕作によって削られている。

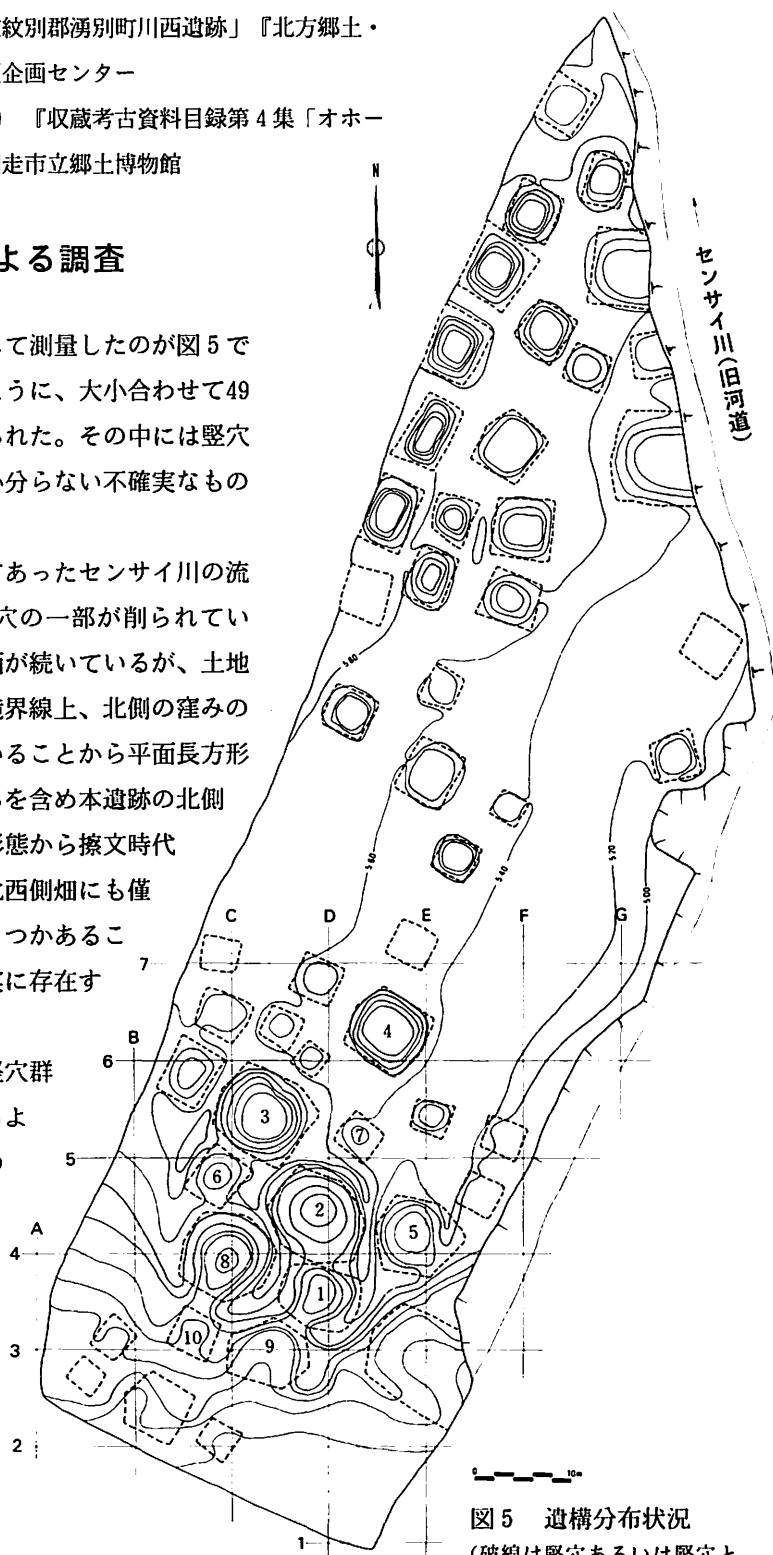


図5 遺構分布状況

(破線は竪穴あるいは竪穴と思われる窪みの位置を示す)

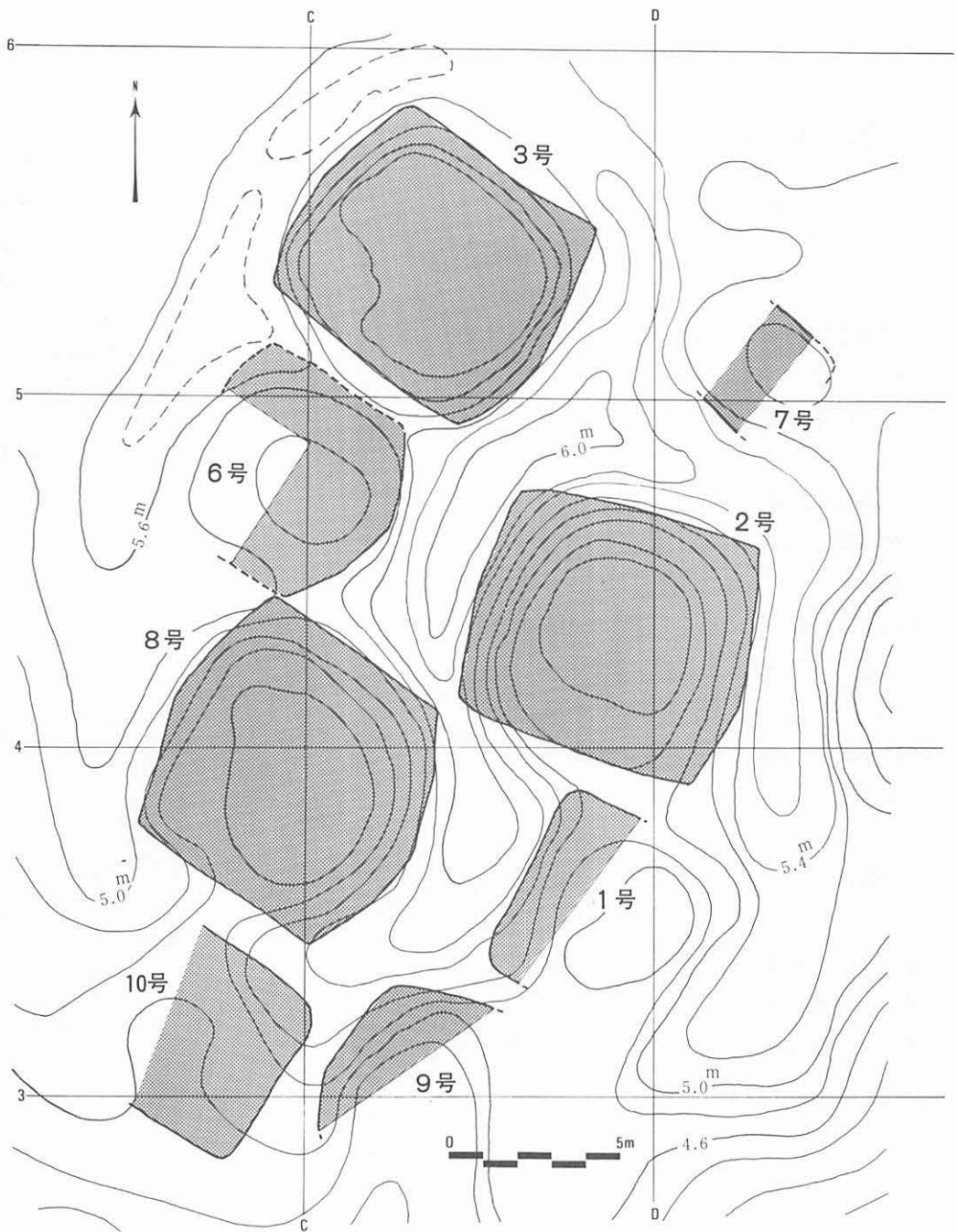


図6 調査遺構位置図（4号竪穴を除く）
等高線は現地表面を示す。網点は調査範囲を示す。

(1) 概要

遺跡地は国土座標Ⅻ系にあり、座標値は、グリッドのDライン(Y=)106,187.81m、5ライン(X=)26,764.99mである。かつて米村氏らが発掘した竪穴を1、2号とし、それ以外のわれわれの調査にかかわる竪穴を3～11号竪穴と名付けた(図5中の数字は竪穴の番号を示している)。

発掘調査は平成3年度から5年度にかけて、3回実施した。いずれの年度も6月から7月にかけての時期に、2～3週間の期間で調査した。

①平成3年度は3号竪穴を全面調査した。オホーツク文化期の竪穴である。

②4年度は2号竪穴と、4号竪穴を全面調査した。さらに2号竪穴との関連をとらえるために6号竪穴の一部調査と、7号竪穴のトレンチによる確認調査を行なった。4号竪穴は時期が不明だったが、それ以外はオホーツク文化の竪穴である。

③5年度はオホーツク文化期の8号竪穴を全面調査した。またこの竪穴との関連をとらえるため1号及び9号、10号竪穴の一部を調査した。いずれもオホーツク文化期の竪穴である。

(2) 平成3(1991)年度の調査

1) 3号竪穴(図版1～6)

調査の経過

密集する大きな窪みのうち北側に位置するのが3号竪穴である。窪み底面の長軸は北西・南東方向で、約6.4mを計る。笹や牧草を刈り払ってゆくと底面に凹凸があることがわかり、部分的に掘り返されていることが予想された。窪み周囲は、さらにその周囲の平坦部よりも盛り上がっていることから竪穴構築時の揚げ土(盛土)であることが明らかである。窪みの底と窪み周囲との比高は最大で1.2mであった。この揚げ土は窪み周辺に満遍なく分布しているわけではなく、北～東～南側で顕著であり、特に南側の盛土は2号竪穴の揚げ土も含まれているとみなされる。一方、南西側は揚げ土を示す盛土がほとんど認められない。このことは僅かな窪みとしてとらえられる6号竪穴との関連があると思われる。

調査は、まず窪み長軸を通るラインと、それに直交するようなラインを設定するところからはじめた。そのことで4分割された場所を、北西側から時計回りに1～4区と名付け、掘り進めることにした。窪み中央付近では15cmほどの覆土を除去すると底面に達する。覆土は壁面に近いところは灰褐色土、黒褐色土、黒土で、中央付近では黒土で構成される。南東壁面付近(3、4区)の底面直上では赤褐色焼土が分布する。また黒土には灰黄色火山灰がレンズ状に認められる。1区、4区の境界付近及び竪穴中央付近では、表土を取り除く時点から、動物骨、土器、黒曜石片、礫などが大量に出土しており、攪乱された跡であることを物語っている。これらは遺物採集が目的の盗掘穴と思われ、攪乱は底面に達するあたりで止まっている。攪乱穴の埋土は黒色土であり、攪乱を見分けることは困難を極めた。

遺 構 (図7、図8)

本竪穴の底面は、旧地表面を50cmほど掘り下げた、非常に強く締まった黄褐色粘土層中にある。長軸は北西から南東方向である。底面の平面は、長軸側の壁が外側に張り出し短軸側の壁はほぼ平行関係にあることから、いくぶん六角形を呈する。長軸、短軸長の最大はそれぞれ約8m、約6.5mである。壁面の立ち上がりは急である。底面の中央には焼土が平面楕円形に認められることから炉跡と判断される。この焼土直上の覆土には焼け焦げた礫、割れた礫があったことから、これらは炉に伴うものであったろうが、規則的な分布を示している状態ではなかった。後世の攪乱により動かされたものと判断される。

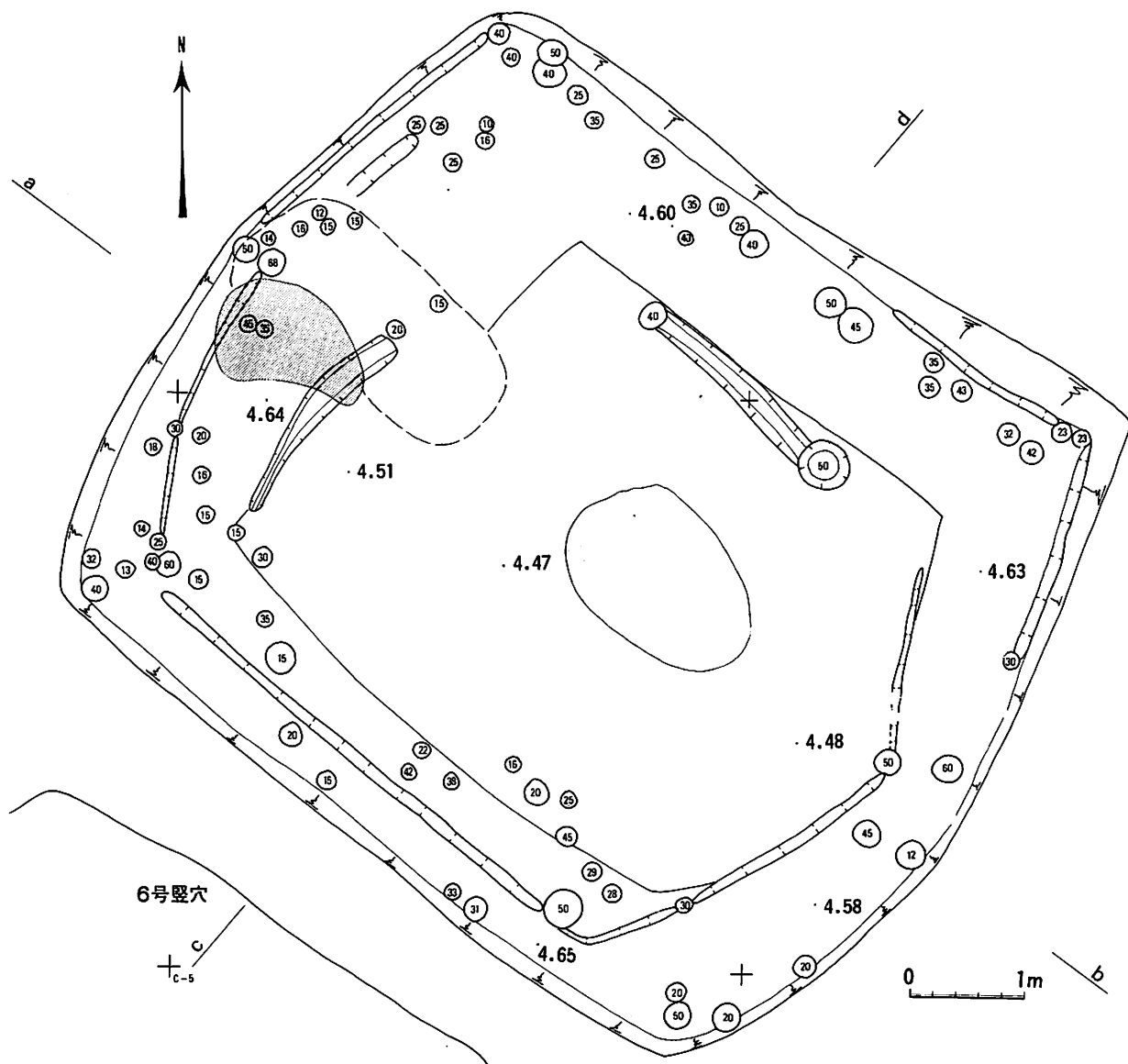


図7 3号竪穴平面図

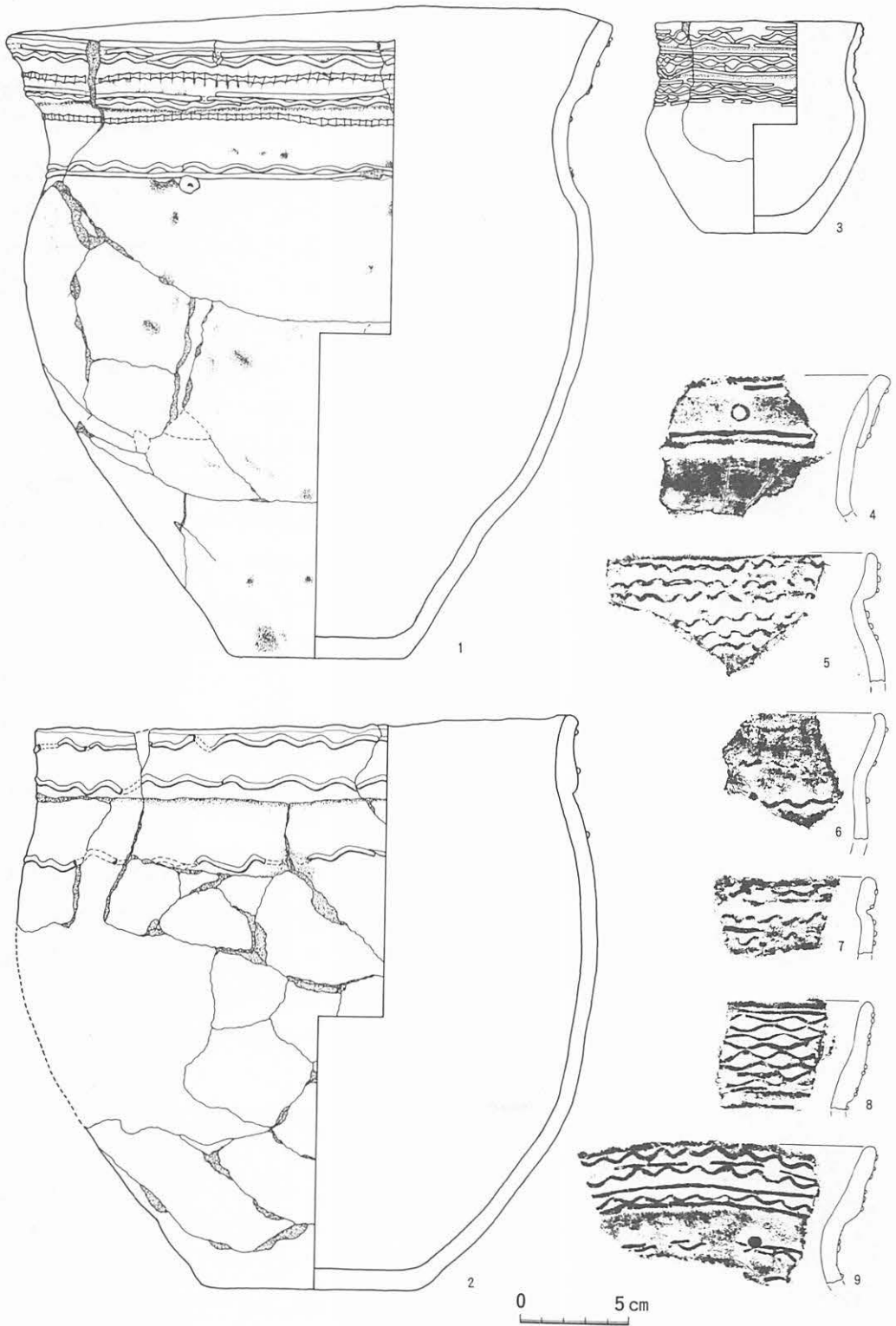


图9 3号竖穴出土遗物

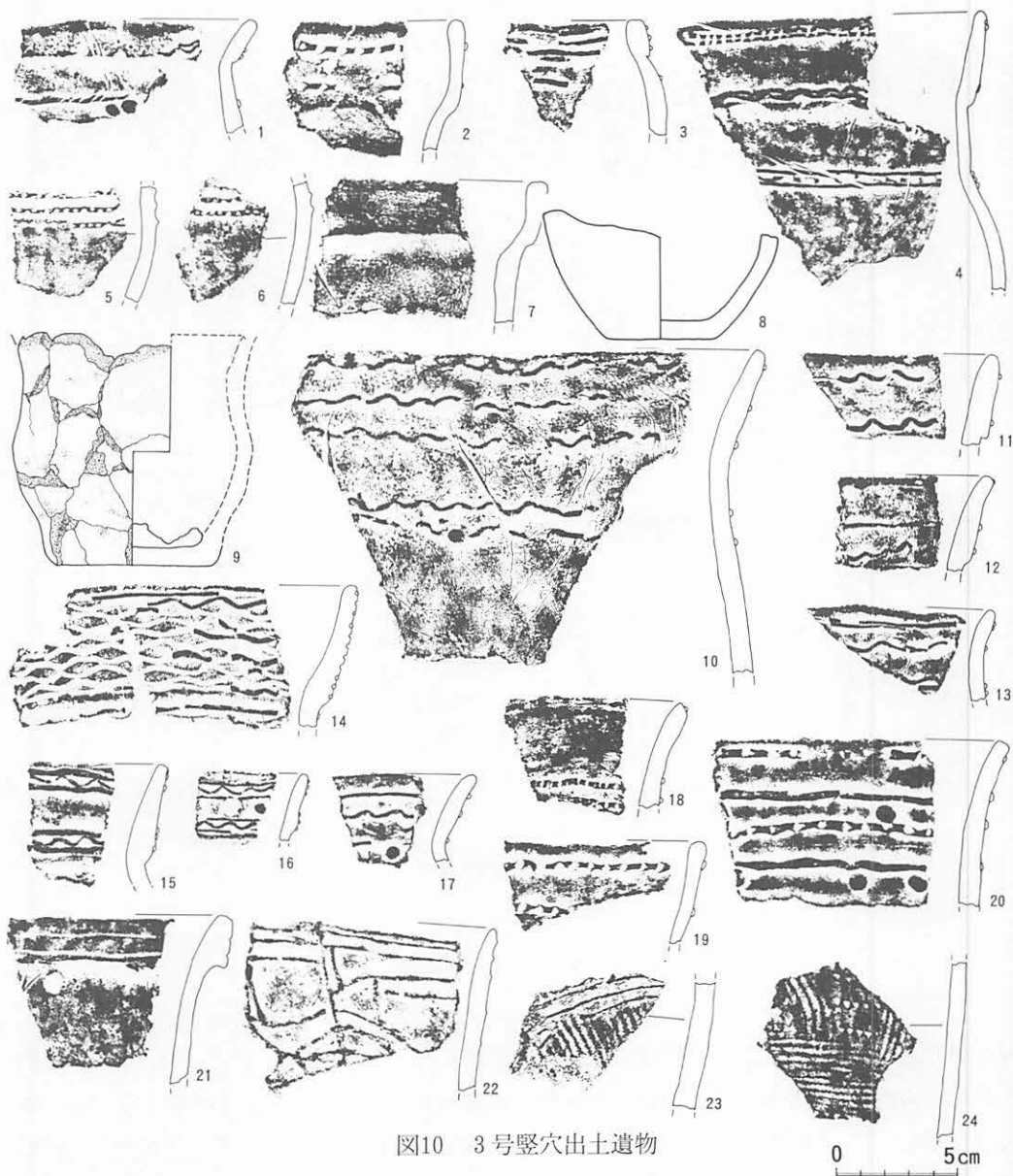


図10 3号竖穴出土遺物

直線と波線の貼付浮文が3単位あり、その間に直線の擬縄貼付文が交互に配される。肥厚帯上の貼付浮文は直線から波線へとつながりの粘土紐で施文している。2は南東壁側の床面から出土した。口縁部には肥厚帯があり、胴部は球形であり。肥厚帯上に2条、その下部に1条の波線貼付浮文がある。粘土紐の太さ2.5mm。粘土紐の進行方向に擦痕がかすかに認められることから、粘土紐を置いていった後、指先で滑らせて押しつけていったことを思わせる。3には2段の肥厚帯がある。そしてその部分には、1mmほどの太さの粘土紐による直線・波線組合せの貼付浮文が3単位巡っている。それぞれの単位は、一繋りの粘土紐で施文されている。内面は磨かれて滑沢があり底部はボウル状である。

4は肥厚帯上に、2本の直線と円形ボタン状貼付浮文がある。5～7は並行するように複数の

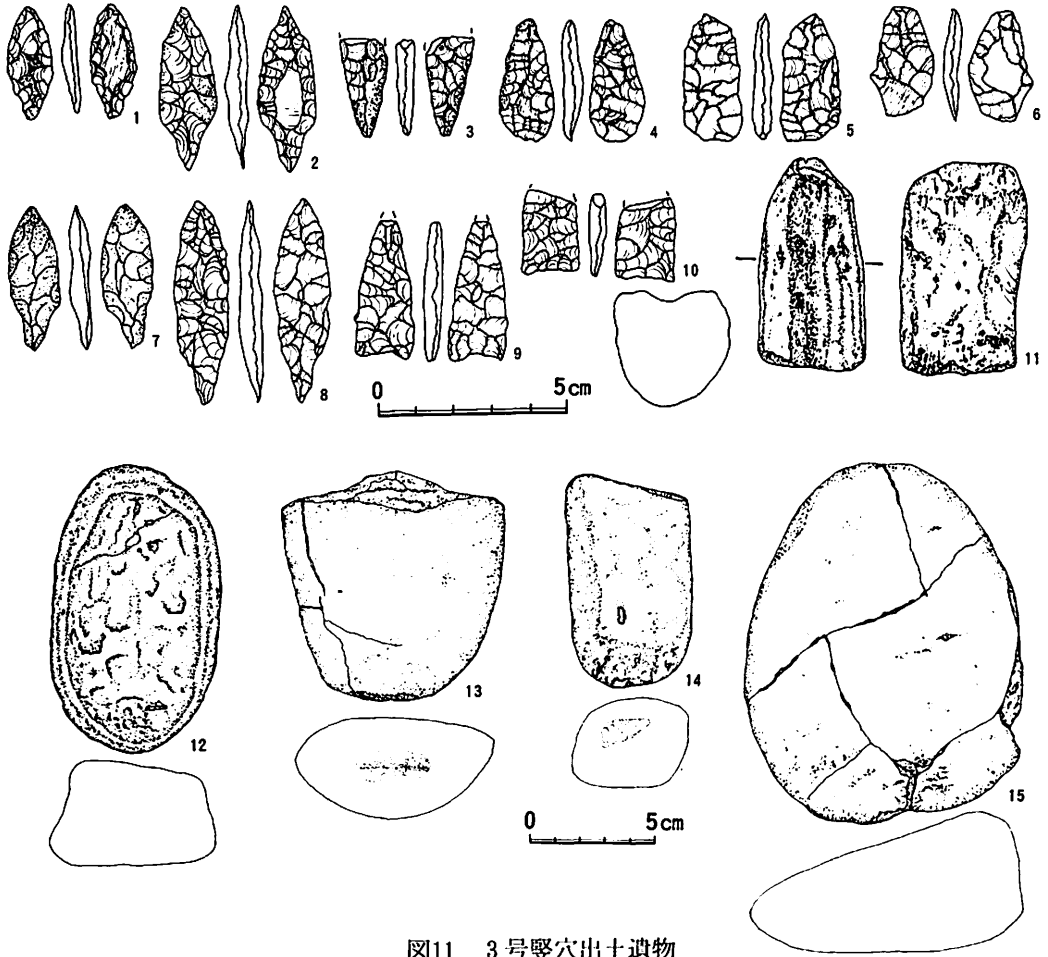


図11 3号竖穴出土遺物

波線貼付浮文が口縁を巡る。8は肥厚した口縁部の破片で、上下に直線貼付浮文を、その間を網目文状に波線貼付浮文を配する。図10-1～6は擬縄貼付文を伴う土器で、粘土紐上を斜めあるいは縦に刻む。刻みは鋭角な工具や、指先のようなものでなされるようである。7は無文土器である。14は図9-8と同一個体と思われる破片だが、これは覆土から得られた。網目文状の浮文が一部剝落しているが、器面に圧痕を残している。11は肥厚帯上に2条の平行する沈線が描かれる。22～24は覆土から出土した続縄文土器である。

石器（図11-1～6、11～15：底面(このうち2と11は骨塚からの出土)。図11-7～10：覆土)

1, 2, 7, 8は基部の作り出しが明瞭な有茎石鏃である。2の身はやや五角形を呈する。3は石鏃の基部の破片であろうか。7は火熱で発泡している。4～6は柳葉形を呈する石鏃。6の剝離は大雑把である。9, 10は無茎石鏃で、いずれも先端部を欠いている。11は軽石製の矢柄研磨器である。ほぼ長方形に整形した軽石の一面に断面U字型の溝が付けられる。13, 14はたたき石。

骨角製品等（図12-1～17：底面。18, 19：覆土。）

図12-1～11は回転式銚先である。すべて火熱によって変形したり、もとの素材の色が失われて白色を呈している。しかも取り上げる時点で粉碎してしまうなど完全な形を保っているものはない。素材は1は鹿角、6、7、9が海獣骨で、これ以外は不明。これらは先端は尖り、体部のほぼ中央付近に銚網を緊縛するための索溝があり、裏側に浅い溝を有するタイプである。3、6の基部端には瘤状の作り出しがある。5の先端は火熱で変形している。大きなタイプでもせいぜい8、9 cmほどであろう。12は逆刺の付いた銚先。長さは9.2 cm、体部に二対の逆刺が付けられ、基部の索孔は小さく、縦長に穿たれている。先端には鍬を装着することを想定して溝が切られているが、途中で放棄されている。溝の幅は狭く金属製の鍬の装着を想定していたと思われる。素材はトナカイ角である。13は鳥骨製の鍬である。14は骨刀で、全長が23.6 cm、先端だけが薄く作り出されている。握りに当たる部分の前後には突起がつけられている。15、16は有孔の円盤で、いずれもマッコウジラの歯製。15は蒸し焼きの状態になったためか黒色に変化している。16は文様のある面が直接火を受けて白色に、裏側は蒸し焼きの状態で黒色化している。ともに同心円状の細い線状の浮き模様で飾られている。それらはほとんど狂いのない同心円であることから、ロクロのような回転台に固定してノミを当てて不要なところを削り落としたと考えられる。径4.6 cm、孔径0.6 cm、厚さ0.5 cm。10は径4.8 cm、孔径0.6 cm、厚さ0.7 cm。17は加工痕のある鹿角で、角座に近いところが鋭利な刃物で削がれている。それ以外に加工は認められない。18はクマ頭部片。首に当たる部分の割れ口から判断すると、クマの丸彫りではなく、道具などに彫り付けられたものであろう。素材は鹿角。19の角片には動物の右脚と思われる浮文がある。素材はトナカイ角である。

放射性炭素法による年代測定結果

3号竪穴底面から検出した炭化材を分析対象として放射性炭素法による年代測定をおこない、次のような結果が得られている。

1, 310 ± 75y B.P. (1, 270 ± 70y B.P.) (N-6251)

半減期5, 730年（カッコ内はリビンの半減期の値5, 568年）に基づく年代で、西暦1950年よりさかのぼる年数。

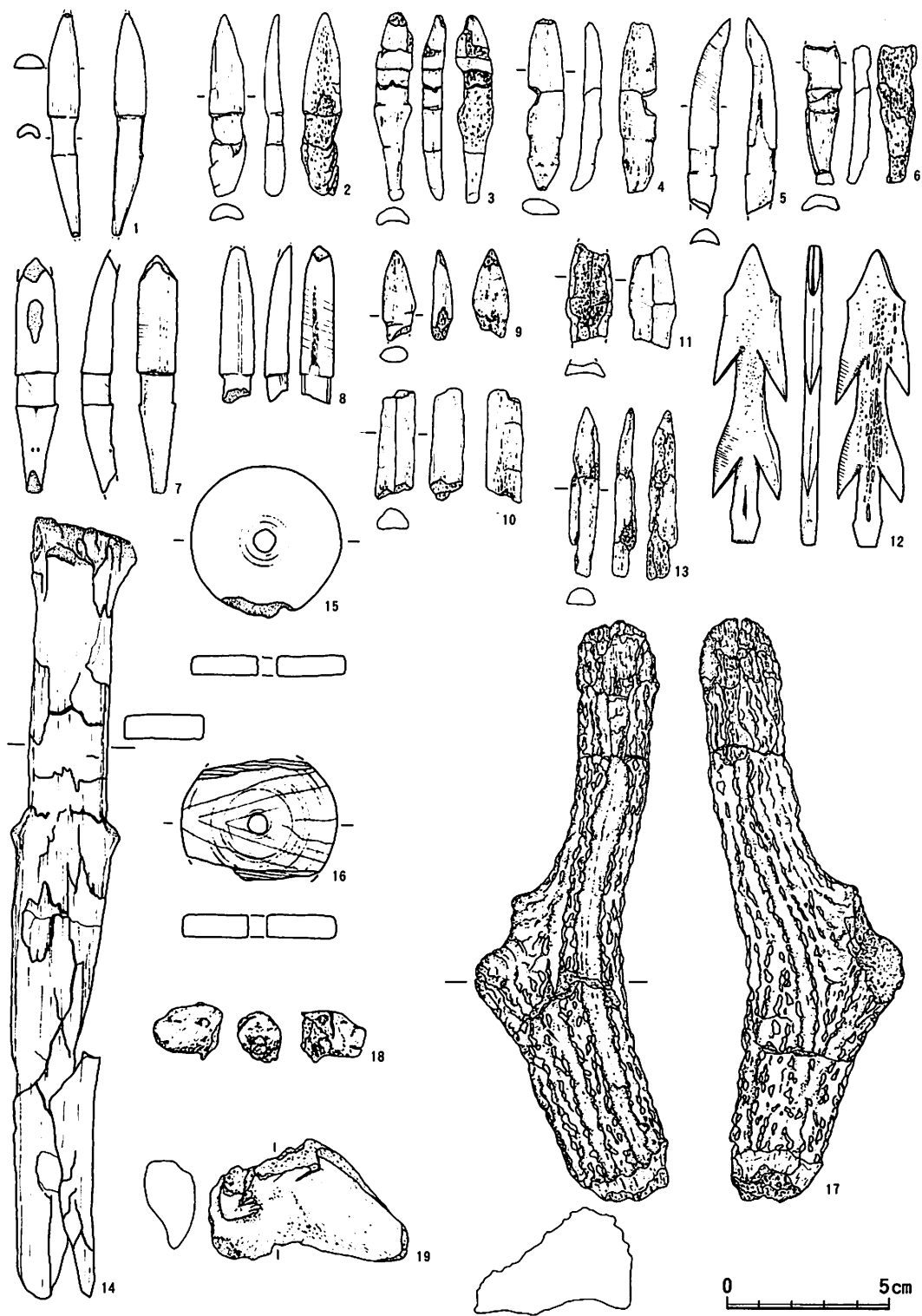


图12 3号竖穴出土遗物

(3) 平成4(1992)年度の調査

1) 2号竪穴(図版7~11)

調査の経過

平成3年度に発掘した3号竪穴の南東方向に隣接して、平面が楕円を呈しかなり規模の大きな、しかも深い窪みがある。土地所有者の伊藤氏によると、この窪みは、昭和35年の米村喜男衛氏らの発掘対象になった竪穴であると記憶しているということであった。伊藤氏の記憶を参考にすると、米村氏の報告(概報)にある「第2号竪穴」に該当すると思われることから、われわれはこれを2号竪穴と呼ぶことにした。

概報によると、米村氏はこの2号竪穴から、クマとオットセイを象ったマッコウクジラの歯製とみられる彫刻品を発見している。この竪穴での調査は一日のみであったことから、竪穴全体を調査しているようではないと思われたので、その状態を確かめるため試掘を行うことにした。その結果、攪乱が及んでいない状態が窪み北側の覆土や底面に認められたことから、過去に調査が及んだ部分を含めてその全体を調査することにした。

調査は、窪みの長軸を通る南東-北西ラインと、それにほぼ直角に交わるラインを設定することから始めた。それによって区画された区域を、北西隅から時計回りに1区~4区とした。竪穴覆土の大部分は黒色土を基本にしており、壁際で僅かにそれに黄褐色土をまじえる程度である。このことから、かつての発掘による攪乱かそうでないかは、底面中央付近の黒色土中では判断できず、壁際でしか判断できなかった。

覆土除去の結果、底面の長軸線から南半の大部分は過去の発掘の対象になったことが分かり、そこでは遺物はほとんど見受けられなかった。しかし幸いに過去の調査では底面をさらに掘り込むことはなかったようで、底面に残された溝と柱穴は攪乱されていない。今回の調査時に、底面から出土した土器と同一体と思われる土器片が網走市立郷土博物館編『収蔵考古資料目録4』に川西遺跡出土品として紹介されていることから、本竪穴はかつて米村氏らによって調査されたものであることはほぼ間違いないと思われる。

この2号竪穴の長軸を通るラインの延長上の北西側には6号竪穴、南東側には5号竪穴がある。また直角に交わるラインの延長上の北東側には7号竪穴がある。このうち本竪穴との関係をとらえるため6号に対しては部分的な調査、7号に対しては試掘調査を行なった。

遺 構(図13)

竪穴底面は、旧地表面を約1mほど掘り下げたところに作られている。平面形は方形に近いが、南東側の壁がやや外側に張り出し、将棋の駒のような形を呈する。底面の規模は、北西側の壁が長さ約6.0m、南東側の壁が長さ約6.8m、そして、竪穴のほぼ中央を通る長軸ラインである北西側~南東側壁間は約7.7mである。

底面の南側半分は、かつての調査によって覆土から底面にかけて掘り返されていたので、遺物はほとんど確認することができなかったが、北半分の壁際はかろうじて攪乱をまぬがれていた。

壁近くの底面直上には一面に焼土がみられたことから、本竪穴は火災にあったものとみられる。北側のコーナーに近いところから、焼土に覆われるように擬縄貼付浮文、貼付浮文が施文されたオホーツク土器が出土した。土器は、火熱をうけているため破片自体が、部分的にかなり変形しているものが多かった。北西壁の中央付近の底面には、動物の骨の集積された場所があった。特定の範囲に集中しているだけで積み重なっているという様子ではなかったが、いわゆる「骨塚」を形成していたものと思われる。覆土中の動物骨の散乱を考えると、その一部は後世にかなりの攪乱をうけたものと思われる。また底面中央付近には炉跡と思われる焼土が、平面が楕円形を呈するようにあった。しかしこれも痕跡程度で、石組みを伴うかどうかなどについてはとらえることが出来なかった。

底面の精査後に明らかになったことは、柱穴と溝、粘土貼りの存在である。主柱穴は70cmほどのものを最深に、50cm程度の深さのものが普通である。その並びには規則性を示すようなところもある。壁際の溝は、東側を除きほぼ全周するようにある。底面には、壁面の溝と相似形を示すように、部分的ではあるが溝が見られる。ところによっては、さらにその内側にも認められている。東側の壁近くでは、溝に接続する小ピットが2個ある。そのうちの1個からは半完形の土器が2個体分出土した。この小ピットにそれぞれ溝が連結しているがこれに伴うものかどうか判断がつかなかった。柱穴と溝との対応関係を考えると、この竪穴の大きさに至るまでには、数回の竪穴の造り替えがあったと判断される。長軸線上にある柱穴の配置はとくにこのことを物語っている。溝および柱穴から推定される竪穴底面上での平面形は、東側が突出した明瞭な五角形を示す。底面のレベルと炉の場所を変えることなく造り替えていったと思われる。骨塚は底面にある溝を覆うようにあったことから、これは一番外側のプランを示す竪穴に伴うものと考えて差支えない。底面の粘土貼りについてであるが、底面東側で部分的に粘土が板状に硬化した部分がとらえられた。何時の時点かわからないが、粘土床が伴った竪穴の時期があって、その後の造り替えでは、それが使われなくなり剥離されたとも考えられる。

遺物

本竪穴の底面及び覆土からは、土器、石器、銚先や有孔円盤のような骨角製品、炭化木製品などが得られている。また周囲の盛土中からも土器、石器などが得られており、これを区別した。

土器（図14-1～5、図15、図16-1～5、図17-11、12：底面。図14-6、図16-6～13、図17-12：覆土。図16-14～27、図17-1～10、13～15：盛土。）

図14-1は北側の壁寄りの底面から出土した。とくに火熱によって土器が両側から内面に押し付けられたように変形しているため復元後の土器口縁は、楕円形である。口縁部には肥厚帯があり、肥厚帯から頸部にかけて直線と波線の貼付浮文が、交互に間隔をおいて施文される。下位の貼付浮文にはボタン状の貼り付けがなされる。2は、円く張った胴部に頸部、口縁部に肥厚帯を持つ土器である。口唇上には径5mmほどの太い粘土紐が載せられている。口縁から頸部にかけて

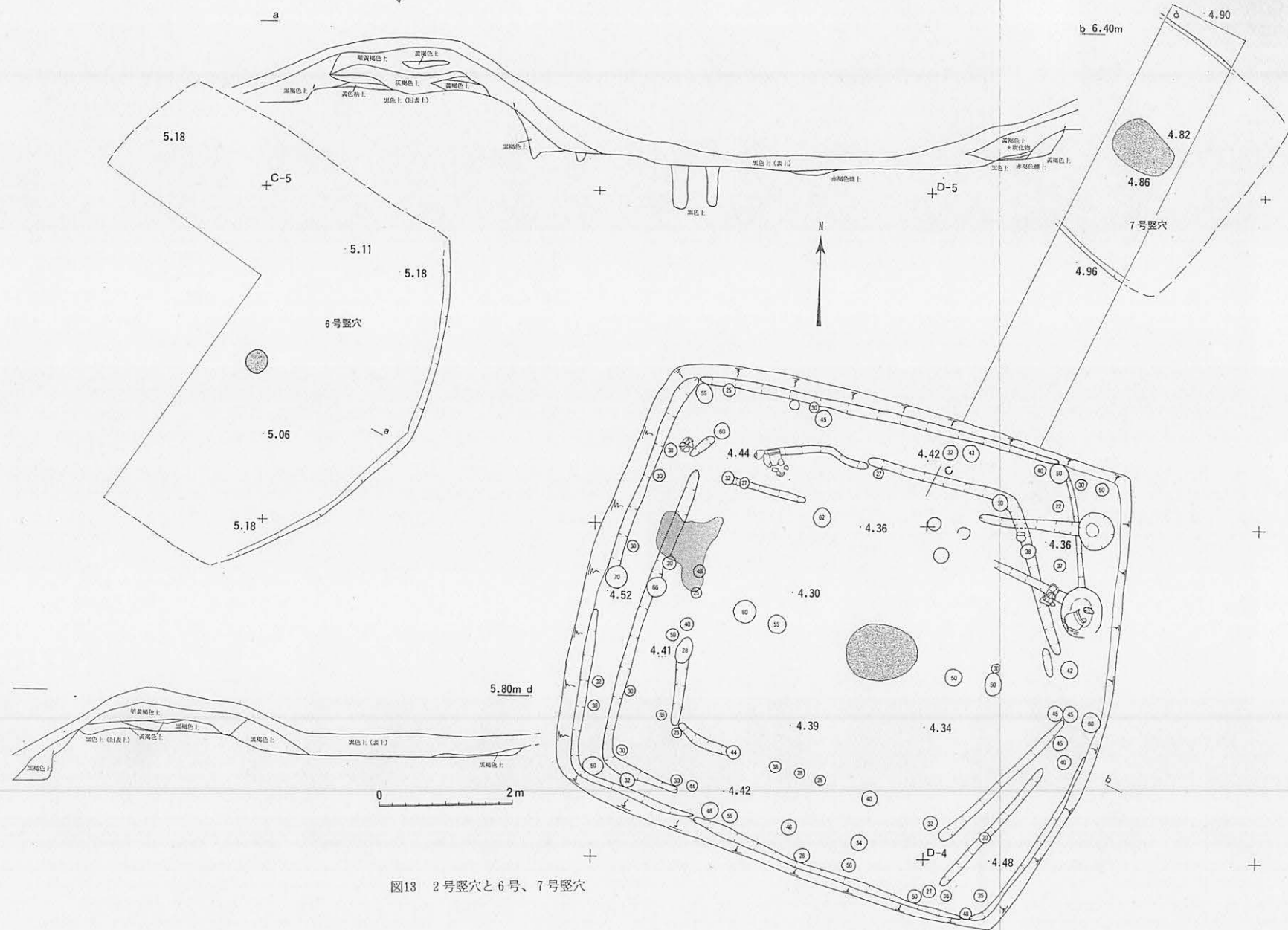


图13 2号竖穴と6号、7号竖穴

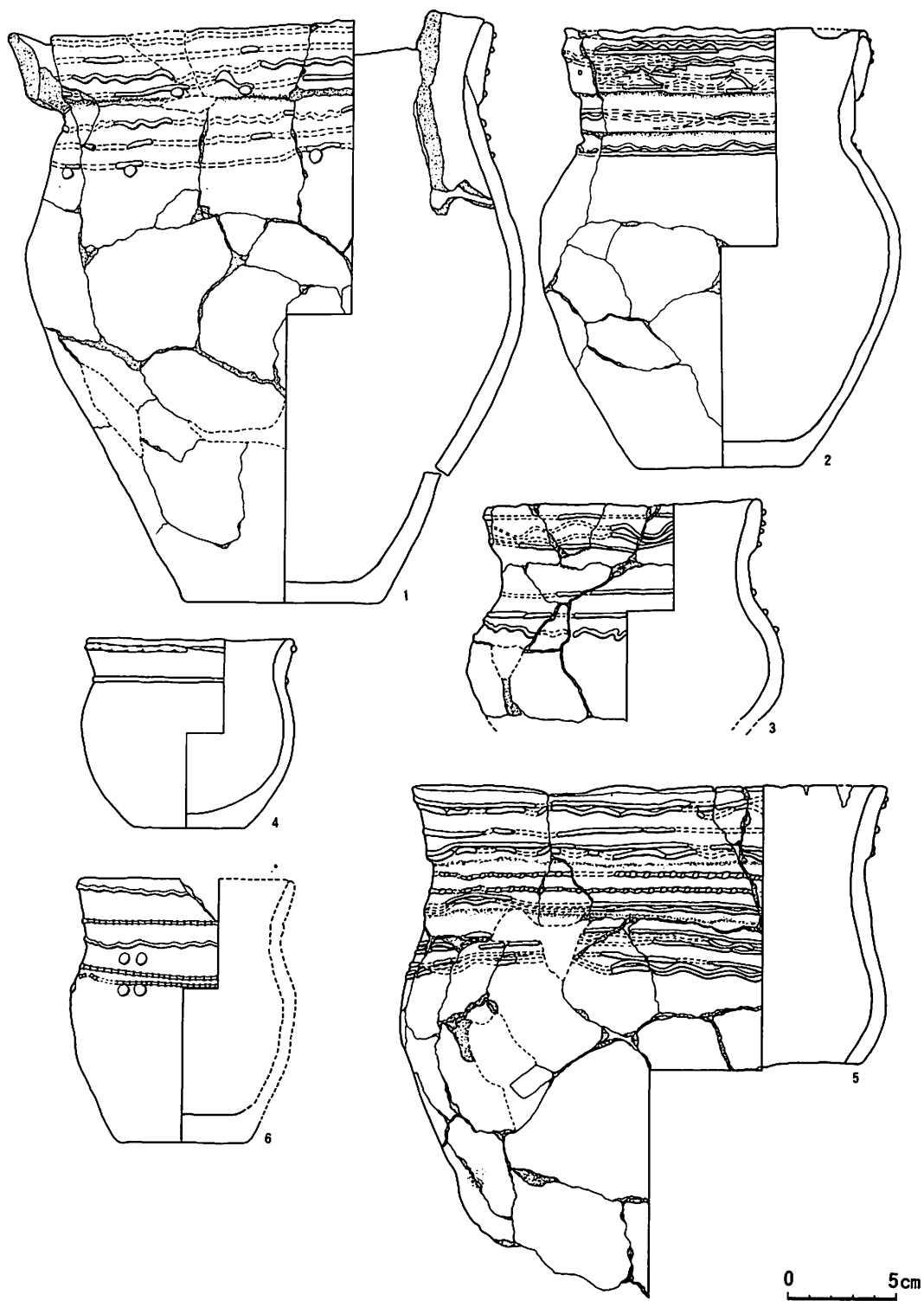


图14 2号竖穴出土土器

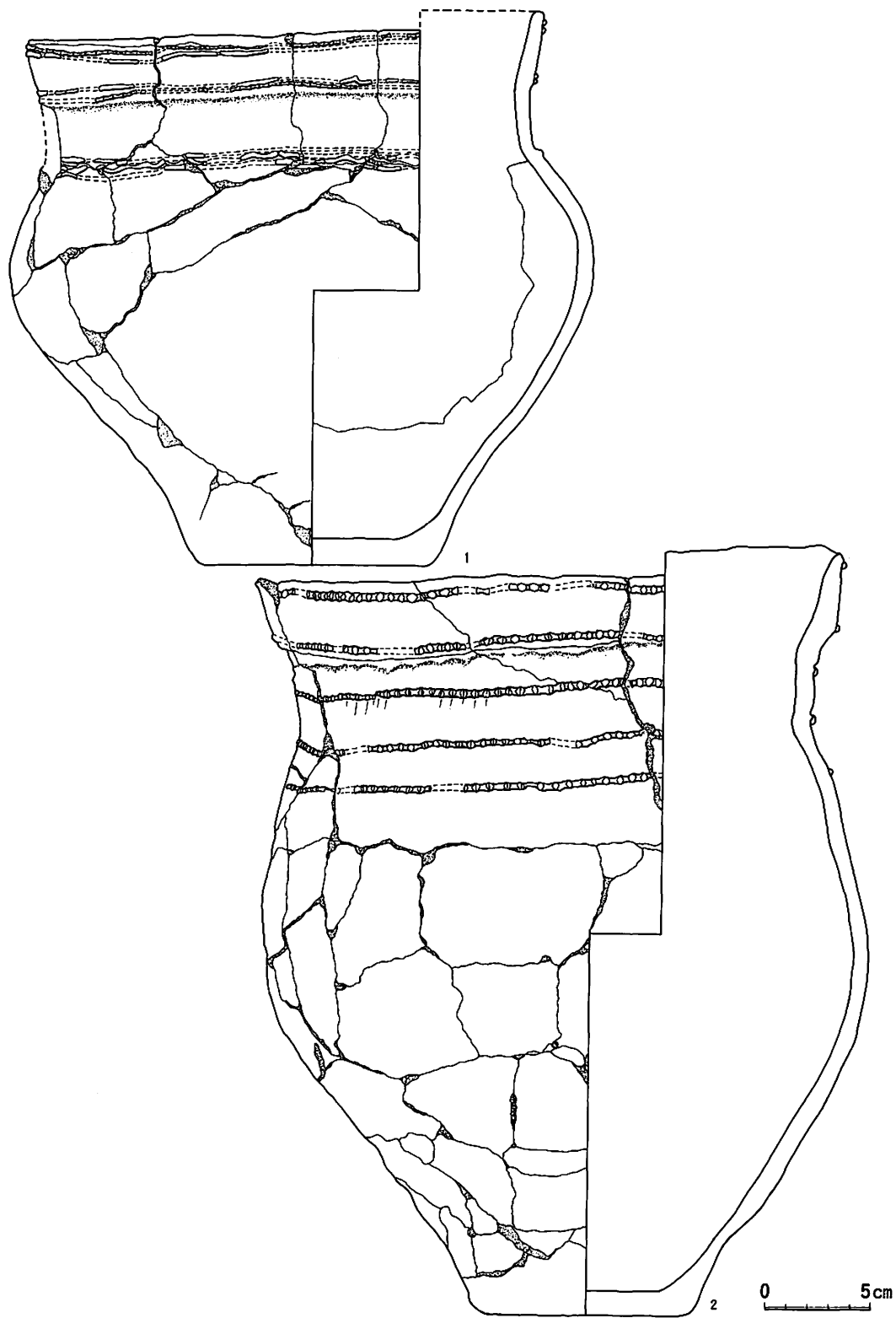


图15 2号竖穴出土土器

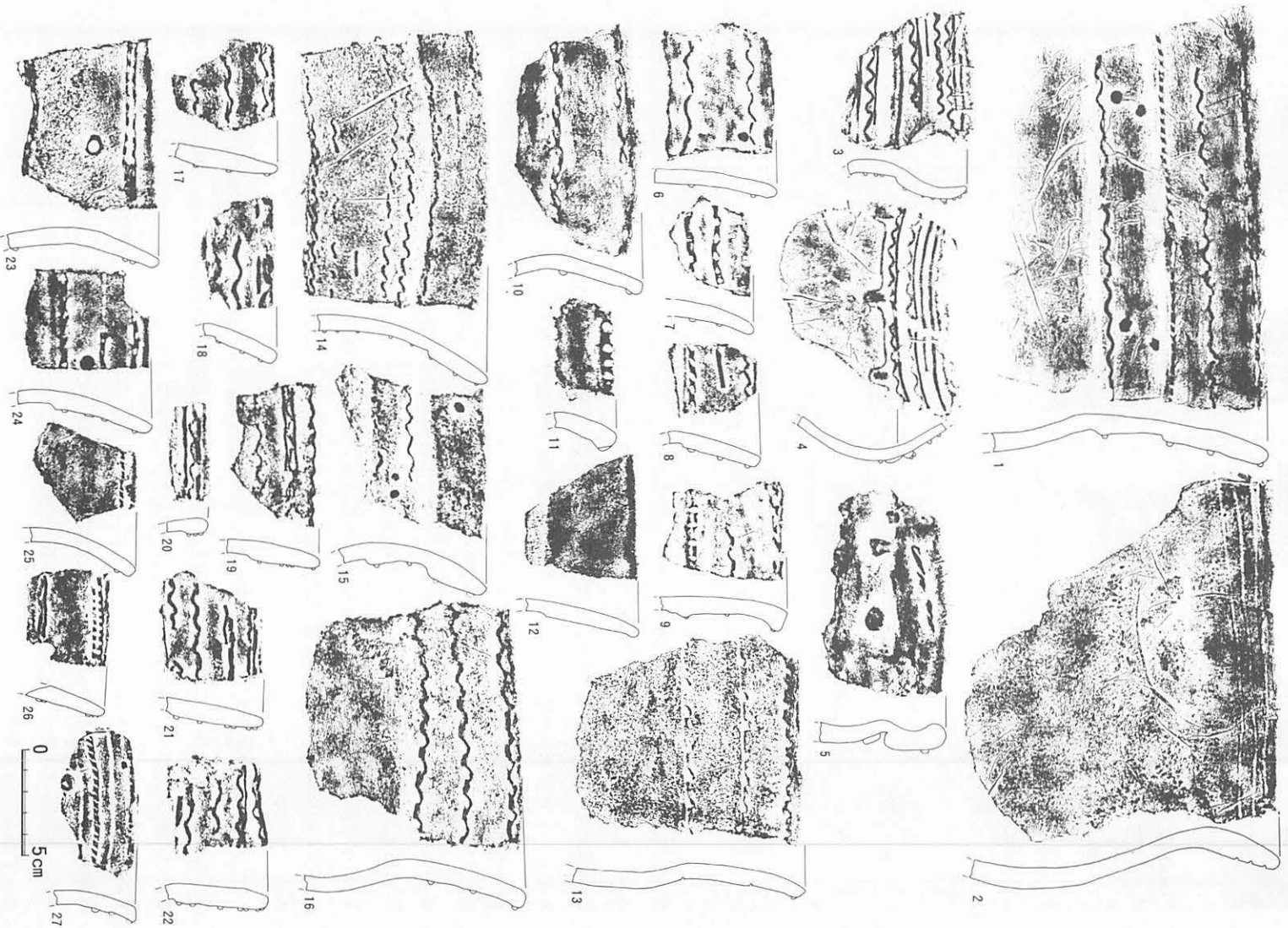


图16 2号竖穴出土土器

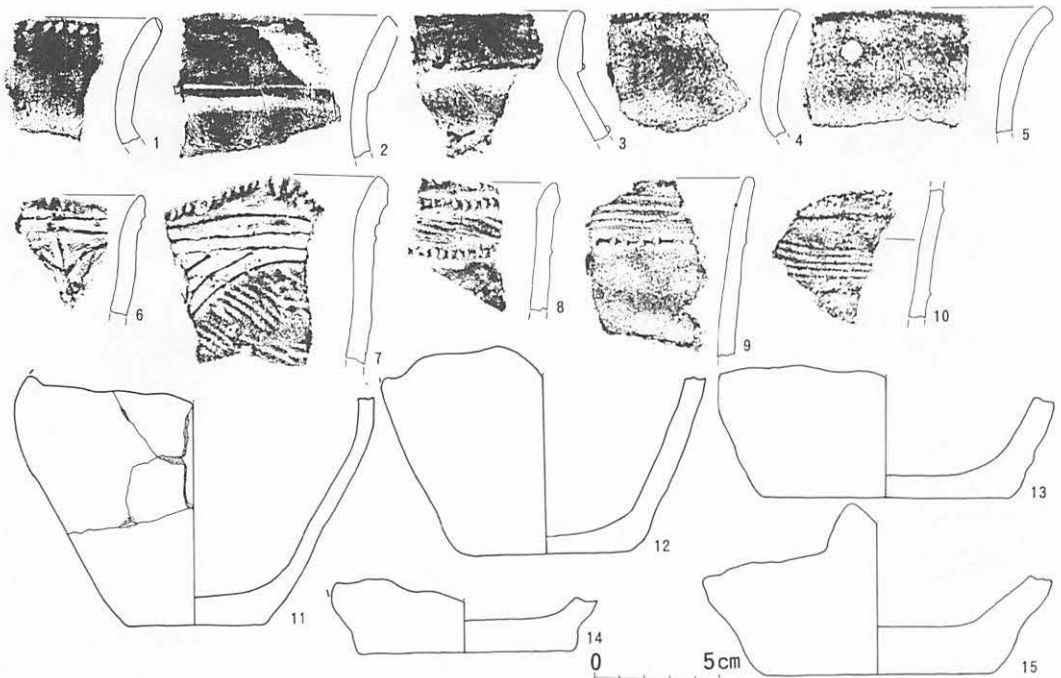


図17 2号竖穴出土土器

は、約2mmの細い直線と波線の粘土紐が交互に密に施文される。貼付された浮文のほとんどは、剥落してしまっているため、全体の文様構成をみることはできない。3は、口縁部に肥厚帯を伴い胴部は強く張り出す。口縁部には直線・波線の貼付浮文がある。波線浮文は並行して二条貼付されるが、施文技術が悪く、繊細さを欠く。頸部には直線と波線の浮文が間隔を置いて貼付される。4は、内外面とも磨きかけられた滑沢のある小型土器で、口縁に肥厚帯を作らない。口唇直下と頸部にそれぞれ一条の貼付浮文がある。口唇直下の貼付浮文は指頭によると思われるが、ほぼ等間隔で押し潰されている。5は、図15-1と共に底面東側の小ピットから出土した。口縁部に肥厚帯が明瞭に認められ、頸部にも僅かな肥厚帯を促えることが出来る。貼付浮文は直線と波線の組み合わせによる。またこれらは基本的には、直線から波線へと一繋りの粘土紐によって施文されていることが促えられる。頸部には二条の擬縄貼付浮文が施文される。強い火熱により破片の一部が発泡している。

図15-1は、底面東側に位置する小ピットから出土したが、全体のおよそ半分を欠く。胴部は強く張り出す。肥厚する口縁部の上端と下端には直線と擬縄貼付浮文の組合せの施文がある。頸部には直線・波線・直線が一単位となった貼付浮文が施文される。2は、高さ30cmを越える大型土器。北西壁寄りから出土。口縁部に肥厚帯をつくり、そこに二条、頸部に三条のそれぞれ平行する擬縄貼付浮文が付けられる。粘土紐に直交する刻みの間隔は6,7mm。刻みを入れる施文具による施文痕跡は土器胎土にも及んでいる。火熱を受けたため、部分的に歪みが大きく、復元に当たってかなりのズレを生じた。

図16-1は、貼付浮文の大型土器片。口縁から胴部にかけて2段の肥厚帯がある。擬縄貼付文、

波線貼付浮文、ボタン状貼付浮文を伴う。2は口縁部に三条の平行する沈線文を伴う大型土器片。3, 4は同一個体。やや内傾した口縁に注口が伴うと思われる土器。口縁部から胴部上半部まで貼付浮文が密集して施文される。太い粘土紐の上にさらに細かい粘土紐による貼り付けがある。この土器の胴部下半から底部にかけては、図17-11がそれである。5は口縁部の貼り付けが頸部とは強くびれを示す土器。擬縄貼付文を伴う肥厚帯の直下にはボタン状の貼り付けがある。13の口唇は外側に斜めにそがれている。頸部には二本の沈線文があり、沈線上には等間隔に斜めの刻文を伴う。胎土には小砂粒が多く混じっていることに特徴がある。

図17-6~10は統縄文時代の土器である。

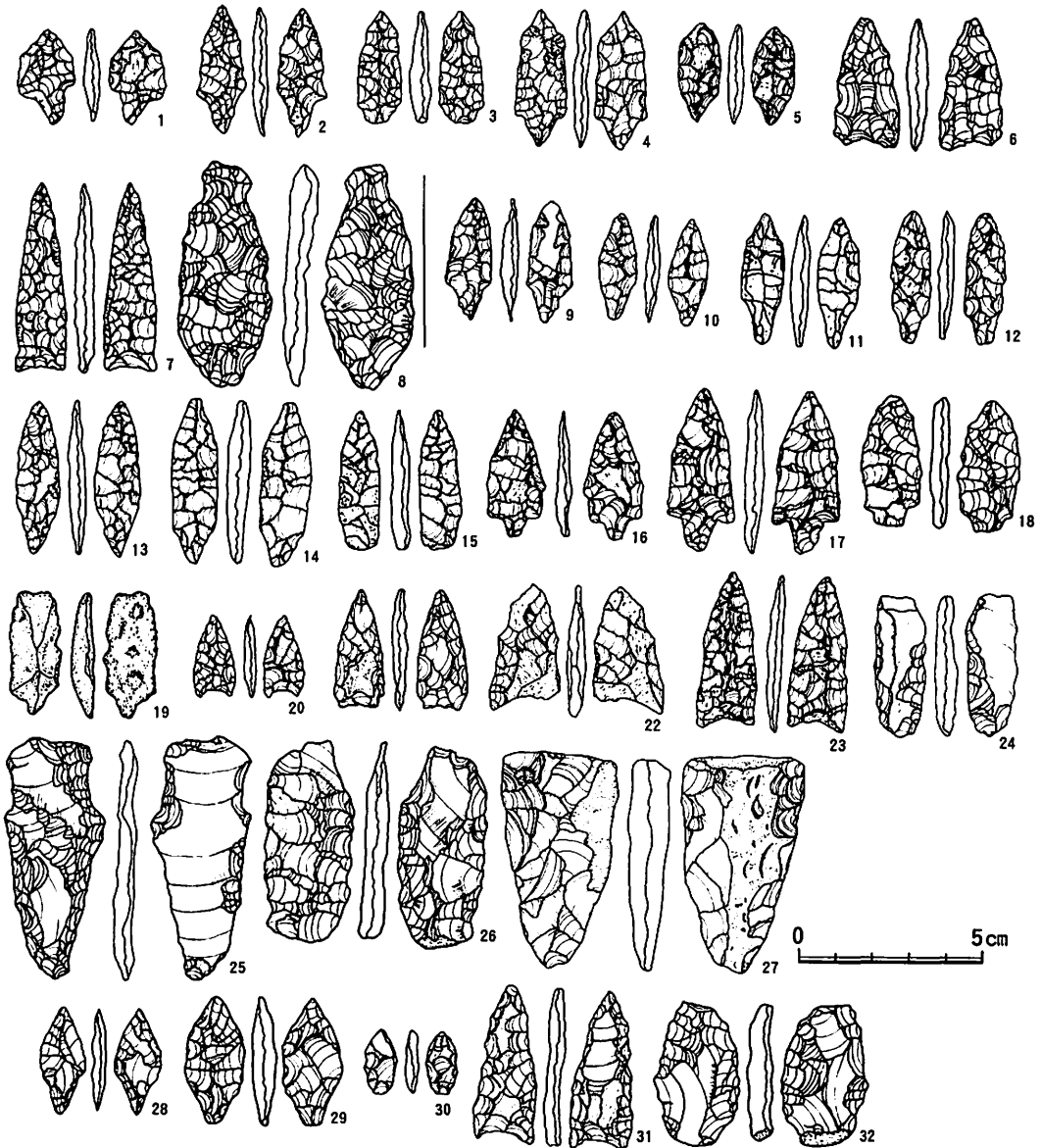


図18 2号竪穴出土石器

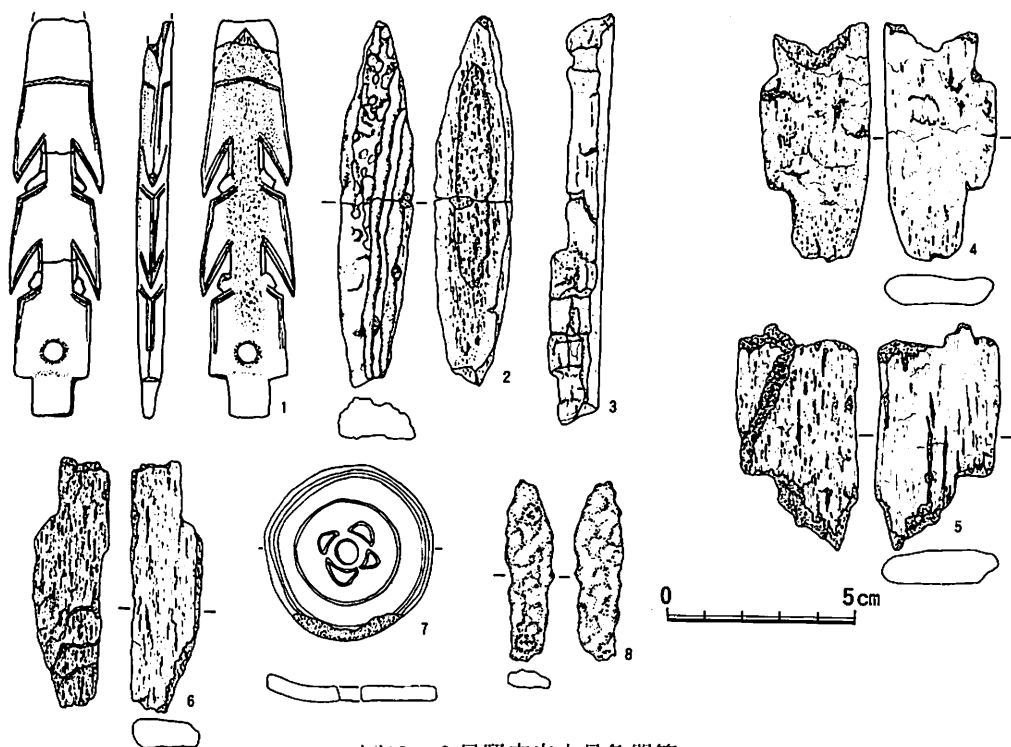


図19 2号竖穴出土骨角器等

石器 (図18- 1 ~ 8 : 底面。9 ~ 27 : 覆土。28 ~ 32 : 盛土。)

石鏃には有茎と無茎がある。有茎鏃のうち1, 4の身部は五角形を呈する。5, 12~14, 29は身と基部の境が明瞭でなく、全体が柳葉形を呈する。6, 7, 20~23, 31は無茎鏃で、基部が内湾するタイプが一般的である。大は7, 23, 31、中は6, 21, 22、小は20、と大きさによって分けられる。これらは銚先の鏃として使われた可能性がある。8, 24~27~32は削器で、25は片面から刃を作り出している。これ以外は剝片の両面に刃部がある。

骨角製品 (図19- 1 ~ 3, 7 : 底面。図19- 4 ~ 6 : 覆土。)

図19- 1は逆刺のついた銚先である。竖穴底面から出土したものであるが、一部は覆土(攪乱土)から発見された。先端の一部と鏃を欠いている。表裏の体部周囲には、1mmほどの二本の並行する刻線間に鋸歯文風の刻みが施されている。鏃は基部にえぐりが入ったものが用意されたと思われるようなスリット部の形である。この鏃が装着される部分に、暗褐色の付着があったことから、後に報告するとおり分析を依頼した。基部は丸味を帯び、索孔もかなりの磨り減りがあることから、相当な期間使い込まれた感じのするものである。トナカイ角製。2は回転式銚先を作るために用意した素材であろう。鹿角製。図6- 3は骨塚から出土したもので、縦に割れている

ため全体像はとらえられない。図の上端に、4 mm幅の溝が一周すると思われる。釣針の軸とも思われるが、図下部にも作り出しがあることから特定できない。鯨骨製と思われる。4～6は、骨刀、骨篋等の破片である。7は有孔円盤で、片面のみに同心円状の浮き文様と、線刻文様が施されている。火熱で文様が施された面が歪んでいる。鯨骨製。

鉄製品（図19-8：覆土。）

錆による膨らみで製品であるかその破片であるか特定できない。

木製品（図版11：底面。）

いずれも炭化し、部分的なものであることから、全体の形状を復元することはできない。図版11（上）の接合し得た部分の木製品は次のようである。浅皿状の木器の一部と思われるが、接合復元した部分の口縁は直線的である。体部の器壁の厚みは5 mm、口縁部に向かって厚みを増し、最大厚さは2 cm。口唇には、口縁部と同じ厚みと幅をもった透かしを入れた取っ手状のものが付く。図版11（下）左は、器台の付いた木製品の底部の破片で、台は円形をなすと思われ高さは14 mm、器本体の底部の厚さは6 mm。同右は口縁部の破片で厚さは10 mm。口唇はわずかに肥厚する。縦にひも通しの穴がある。

放射性炭素法による年代測定結果

2号竪穴底面の柱穴にあった炭化材を分析資料として放射性炭素法による年代測定を行なったところ、次のような結果が得られた。

$1,270 \pm 80$ y B. P. ($1,230 \pm 80$ y B. P.) (N-6538)

半減期5,730年（カッコ内はリビーの半減期の値である5,568年）に基づく年代で、西暦1950年よりさかのぼる年数を示している。

2) 4号竪穴（図版8）

調査の経過

窪みとその周囲の土手状の高まりの形状から判断して、オホーツク文化期の竪穴であると思われた。掘り進めたところ、一辺が5.4 mほどの、平面が方形の竪穴であった。旧地表面を40 cmほど掘り下げた底面には、掘り返された跡はあるものの、遺物、柱穴、カマドなどは確認することはできなかった。擦文文化期の竪穴と思われるが、確証は得られなかった。覆土中からは礫、黒曜石剝片、続縄文土器が数点出土した。

しかしながらオホーツク文化期の竪穴覆土中にレンズ状に入る火山灰は、この竪穴では竪穴構築時に形成された盛土下に存在することが明らかになった。同一の火山灰とすれば4号竪穴はオホーツク文化の竪穴廃棄後に構築されたものと判断される。

遺構

旧表土を約40cm掘り下げて黄褐色粘土層中に底面をつくっている。壁の立上がりはほぼ垂直である。覆土は竪穴中央付近では10cmにも満たない厚さであることから、筐のある表土を取り去ると竪穴底面となる。規模は、一辺が約5.5mの平面正方形である。

盛土は竪穴全周にあり、火山灰は旧表土直上にありそのうえに間層を挟まずに本竪穴の揚げ土が載っているので最近のものではないと思われる。

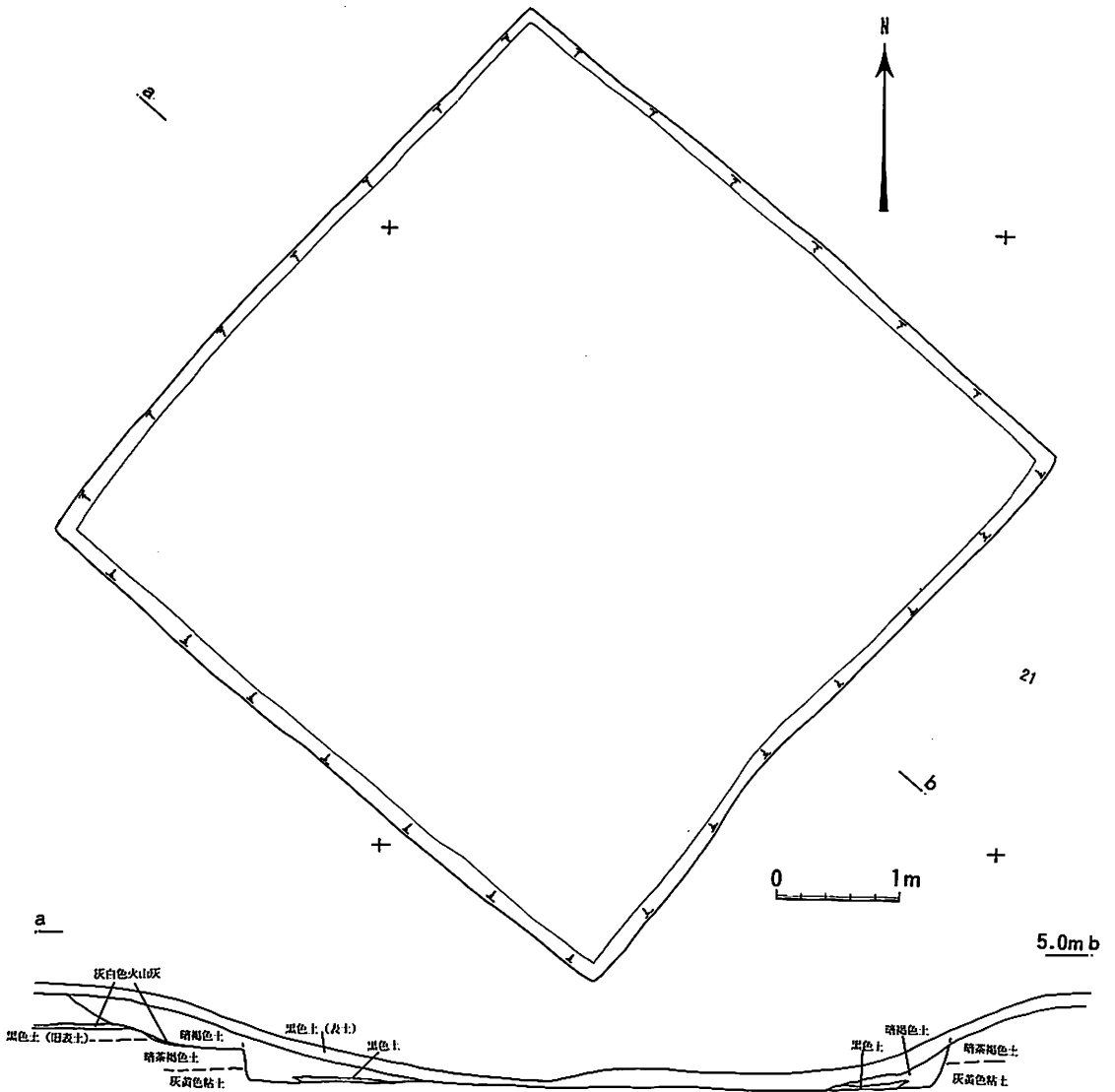


图20 4号竪穴

3) 6号竖穴 (図版11)

調査の経過

2号、3号及び8号竖穴に挟まれたところに位置する(図5)。2号及び8号竖穴の構築時の盛土に取り囲まれているが、これらと直接関係のない西側でも地表面の盛り上がりがあることから竖穴の存在を予想した。3号竖穴側から土層観察用の溝(トレンチ)を延長し、また2号竖穴の北西-南東方向の土層観察用のトレンチを延長してこの位置を試掘したところ、地表下0.12mの黒色土中に炉跡と、壁の立上がりと思われる付近から僅かな焼土の広がりを発見した。

遺構(図13)

黒色土中に竖穴底面があることから覆土との境界が明瞭ではないが、壁際に存在する焼土と炉跡との高さを手掛かりにした規模は一边がおよそ6m、方形あるいは東側壁が張り出すプランの竖穴である。北西壁寄りからは焼けた動物の骨がまとまって出土した。ミニチュアのオホーツク土器、骨製の有孔円盤が南東壁側から出土した。これら遺物は出土位置を底面とみなしたが、その位置が黒色土中であることから微妙なところがある。掘り込みは浅いが、この窪みは間違いなくオホーツク文化期の竖穴である。なお2号竖穴の底面との比高は約80cmである。本竖穴の北東壁の向きは、3号及び8号竖穴のそれとほとんど平行関係にあるとよい。

遺物

土器(図21-1:底面。)

高さ5cm、口径6.7cmの深鉢形のミニチュア土器で、作りは粗雑である。口縁部に粘土紐の貼り付けがボタン状の貼付と組みあわされている。その直下には3個一単位のボタン状貼り付けが1cmほどの間隔をおいて器面を巡る。

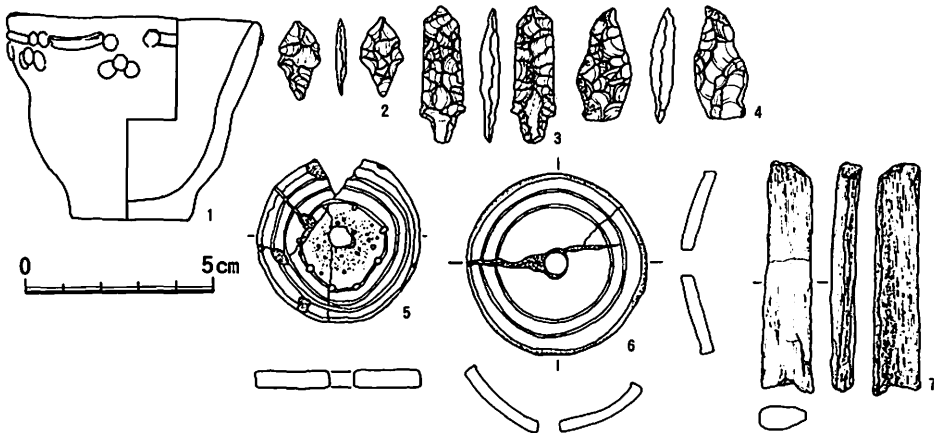


図21 6号竖穴出土遺物

石器（図21-2～4：底面。）

2,3は有茎の鏃で、とくに3は身の部分が五角形である。4は無茎鏃。この他に、黒曜石のコア、剥片が出土している。それらは転石であり一部に自然面を残しているものが多い。

骨角製品（図20-5～7：底面。）

5、6はいずれも有孔円盤。5はシカ角の角座に近い部分を輪切りにしたものを素材にしている。片面に文様がある。同心円状の浮き文様とその内側にはいくつかの穿孔をつなぐような浮き文様をつけられる。6はトナカイ角を素材にしていると思われる。やはり同心円状の浮き文様をつけられる。歪んでいるのは火熱によるものと考えられる。5、6とも白色を呈する。7は骨髄の破片か。

4) 7号竪穴

調査の経過

2号竪穴の北側の盛土に接するようにして方形プランを示す小規模の僅かな窪みが認められた。オホーツク文化期の2号竪穴と新旧関係がとらえられる擦文時代の遺構であることが予測されたことからトレンチによる試掘を行なった。その結果、窪み中央付近で平面円形の焼土が認められた。

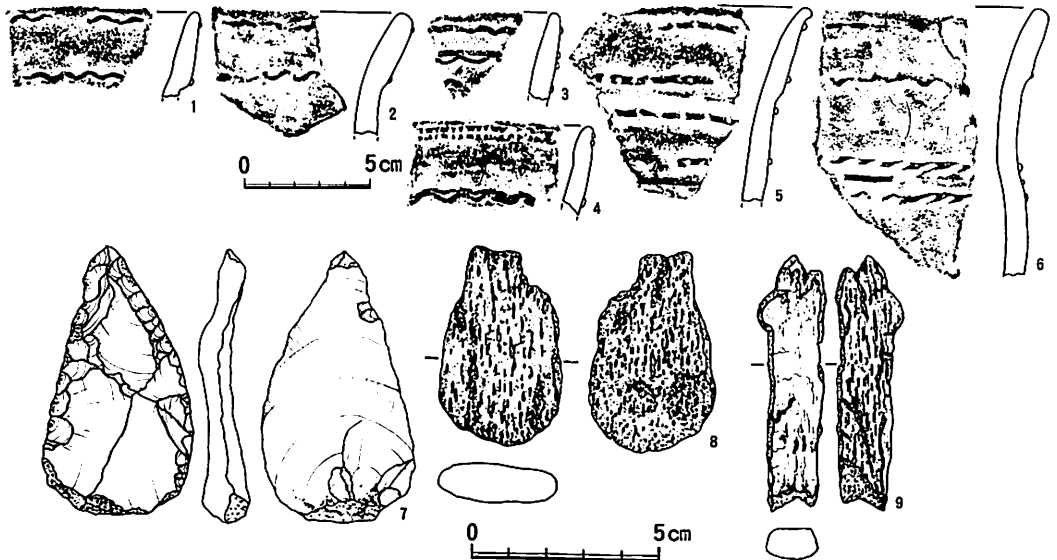


図22 7号竪穴出土遺物

遺構 (図13)

2号竪穴からは、一番近い所で約3mの距離がある。旧表土(黒色土)から10~20cm掘り込み、黄褐色粘土層の上面を竪穴底面にしている。覆土は黒色土を主体にしていることから、底面から壁面への立上がりが見えではないが一辺が約3.5m、窪みの形からトレンチに直行する辺も同じ規模と見られる。平面形は方形を呈する。トレンチにかかる窪みの中央付近には、円形の焼土があり竪穴の炉跡と思われる。ここからはクルミ、ドングリが出土した。同じくこの焼土からは後に報告するように栽培植物の種子も検出されている。遺物は大きく2つの出土傾向がある。一つは表土上面からの出土物で、これは2号竪穴の盛土中に入っていたものと考えられる。もう一つは本竪穴に伴う遺物である。しかし覆土と底面との境が見えではなかったことから遺物が混乱して取り上げる状態になってしまった。図示したものは少なくとも7号竪穴に伴うものである。これ以外に、握り拳大の黒曜石の原石が数個出土している。本竪穴はオホーツク文化期の遺構である。

遺物

土器 (図22-1~6:底面)

1,2は口縁部の破片、肥厚帯の上端と下端に波状に粘土紐を貼り付けている。3も口縁部破片であるが、肥厚帯を形成するかどうかは不明。波線と直線の粘土紐が組み合わされて貼付される。4は口縁部破片。上端の2条の直状に貼り付けられた粘土紐上には、縦に密に刻みが入られる。5は僅かに肥厚帯をもつ口縁部破片で3mmの太めの粘土紐を直状に貼り付けその上を一定の間隔を保って押し付けている。6の肥厚帯に付けられた貼付浮文は肥厚帯自体の整形時にナデ付けられている。胴部には直状に貼り付けた粘土紐を斜めに押し付け擬縄としている。

石器 (図20-7:底面。)

削器。

骨器 (図20-8、9:底面。)

鯨骨製で、それぞれ骨刀の一部と見られる。8はその先端部、9は柄部と思われる。

(4) 平成5 (1993) 年度の調査

1) 8号竪穴 (図版13、14、16、18)

調査の経過

2号竪穴の南西部に隣接する深い窪みが8号竪穴である。このボウル状の深い窪みは、表面の凹凸が少ないことから、後世の攪乱も及んでいないと思われたが、覆土を除去する段階であちこちに小規模な掘り返された場所があった。しかし2号、3号竪穴よりは保存は良い方と思われた。窪みの周囲には竪穴構築時の揚げ土(盛土)が認められるが、とくに東側で顕著であった。この場所の盛土には、8号竪穴だけではなく1号、2号、9号竪穴構築時の揚げ土も含まれるものとみられる。南西側は、3号と6号竪穴の関係と同様に、揚げ土は顕著には認められない(図6)。

まず、窪みの中央を通る南東～北西のラインを設定し、さらにこれに直交するようなラインを設け調査を開始した。これで区切られる4区画を北側から時計回りに1～4区とした。この竪穴も火災に遭ったとみられ、壁に近い底面直上には焼土が一定の厚みを持って堆積している。オホーツク土器、骨角器、石器などの遺物はこの焼土層中と焼土下から発見した。

遺構 (図23)

旧地表面を90cmほど掘り下げたところを底面としている。竪穴長軸の方向は北西から南東である。北東側と南西側の向かい合う壁面はほぼ平行関係にあり、距離は約6.5mである。これに対し南東側と北西側の壁面はやや外側へ張り出し、その距離は最大で6.8mを計る。

一部攪乱されているが、北西壁寄りの底面には動物骨の集積場所、いわゆる骨塚がみられた。骨自体は火熱を受けたため、白色と化し脆弱な状態を示している。底面中央には、平たい礫を巡らせた石組を伴う平面楕円形を呈する炉跡がある。これを囲むように黒味がかかった硬化した面がとらえられた。硬化した面は移植ゴテで削り取るとぼろぼろと焼けた粘土粒となって剥がれてくるが、この面の厚さは1、2cm程度でこれを取り除くと地山である黄褐色粘土の堅い面となる。炉跡と動物骨の集積場所の間が部分的に大きく攪乱されているが、炉を取巻いて「コ」の字形になるような粘土貼りがなされたと思われる。このコの字形粘土貼りの周囲、壁立ち上がりまでの底面についてであるが、骨塚がある北西側は底面から壁へとほぼ垂直に立ち上がり底面中央部と同じレベルを保っているが、これ以外のところでは少なからず凹凸があり立ち上がりも緩い。

底面で捉えることができた溝は規則的に巡るものではない。溝と溝の連続性もとらえることが困難であるが、底面からの深さ10～15cm、断面はV字形である。柱穴は主に溝や壁の立ち上がる場所や長軸方向に沿ってある。50～70cmの深さのものが主柱穴であろうと思われる。

底面からは土器や石器、骨角器などが出土した。これらは特定の場所に集中しているという訳ではないが、どちらかというとなら北西、南東壁寄りということができる。北西側では土器、有孔円盤、炭化木製品、骨牙製垂飾、南東側では大型土器、骨斧、炭化した木製品などである。これらはコの字形粘土貼り部分と壁までの間で発見されている。炉跡近くの粘土貼り底面上からは、8

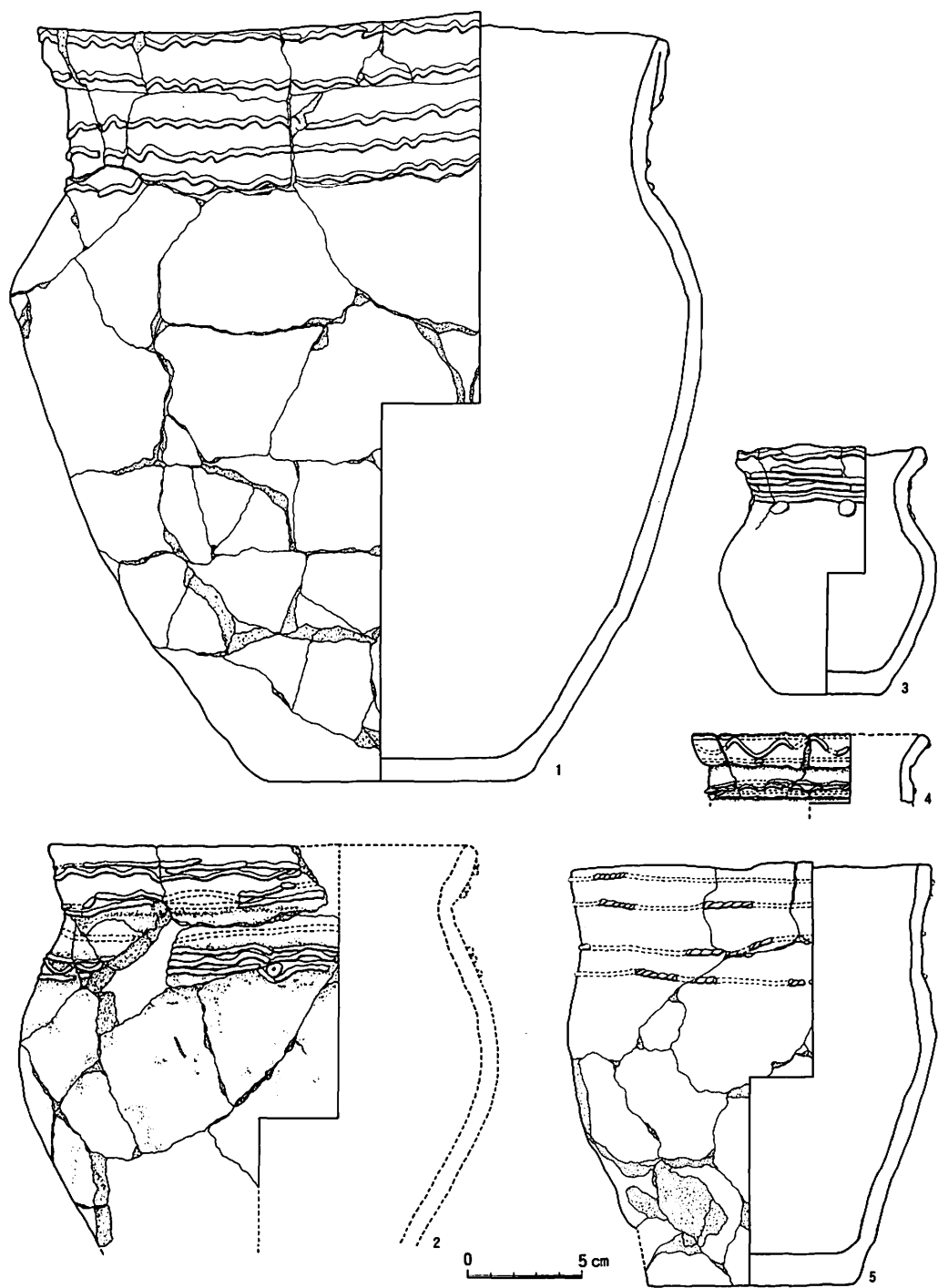


图24 8号竖穴出土土器

本の石鏃がまとまった状態で出土した。

遺物

土器（図24-4：骨塚、図24-1～3、5、図25-1：底面。）

図24-1は高さ34cmと、大型の土器である。火熱によって破片に歪みが生じていることから、接合し得ない部分がある。口縁肥厚帯に2条、頸部に3条の波状粘土紐の貼付がある。それより下部は無文。2は僅かに肥厚する口縁に丸味を示す胴部がつづく土器。直線と波線の粘土紐が、肥厚する口縁と頸部に貼付される。粘土紐は太く、それが随所であつなげられていたり、波状の描き方が一定でないなど施文自体は粗雑である。炭化物が施文された部分に付着し覆っている。3は小型の壺形土器で、3区底面から出土。口唇には一本の波状の粘土紐が、頸部には直線の粘土紐とボタン状の貼付がなされている。頸部の貼付の一部はひとつながりの粘土紐で巻き付けられている。4は骨塚から出土したもので、口縁部だけの破片。直線と波線の細い粘土紐の貼付がなされる。5はいくぶん胴部が張出し、肥厚帯を伴わない深鉢形の土器。口縁から頸部にかけて4条の直状粘土紐の貼付がなされる。それぞれの粘土紐の貼り付け時に、その上から規則的に斜め方向に刻みがつけられている。いわゆる擬縄貼付浮文である。器面には炭化物が厚く付着しているところがある。粘土紐が剥落しているところにも炭化物が付着していることから、使用中にもすでに文様が取れていたことを示している。

図25-1は、骨塚が位置する北西壁側から出土した。張り出した胴部から口縁にかけて縮約をみせ、そこには2段の肥厚帯が作られている。口唇には2か所の吊耳状の突起が付されるが、吊り耳として機能していたものではなく単なる装飾である。貼付された粘土紐の大部分は剥落しているが、径1.5mmほどの細い粘土紐によって口縁と頸部が飾られている。とくに頸部には、ブタの鼻先を連想するようなボタン状粘土が2個一単位で4か所に貼付されている。

石器（図26-1～24：底面。）

1～20は有茎鏃で、これらは身の部分が五角形となることを基本としている。3、4、6は火熱により一部あるいは全体が発泡している。7～12、15、20の8点の鏃は、刃を取り囲む粘土貼りの面からまとまって出土した。20以外はほぼ同じ大きさを示している。21は無茎の鏃である。22、23は削器で、22は両面加工ナイフである。24は長軸長7cmほどの礫表皮を残した黒曜石のコアで、これに剥離したフレイク1点が接合できたもの。これによると、原石の長軸の両端から打撃を加えて剥離していることが分かる。

骨角器（図27-1～5：底面、6：覆土。）

1は鯨骨製の篋で、中間で折れているがほぼ完全な姿で取り上げることができた唯一のもの。全長36cm、幅7cm。本堅穴からは他に腐蝕した状態の骨篋が数点あったが取り上げることは出来なかった。2はオットセイの陰茎骨製の垂飾。3、4はオットセイの雄の上顎犬歯製の垂飾。いずれも一端に穿孔されている。2～4は堅穴西側のコーナーからまとまった状態で出土した。5はシ

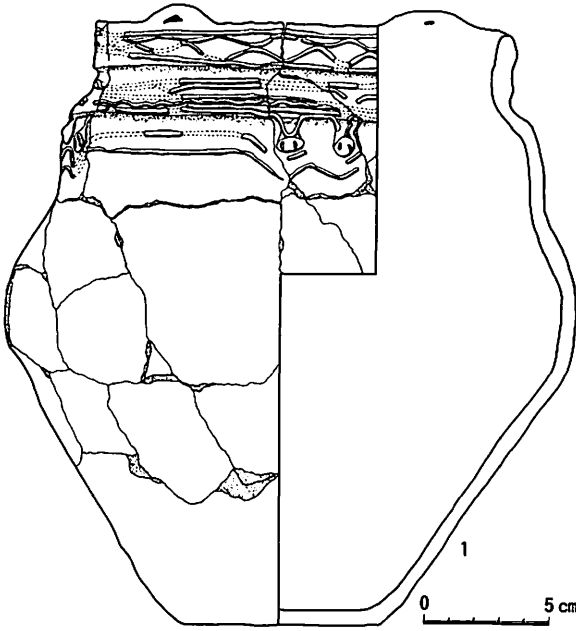


図25 8号竪穴出土土器

カ角の角座の部分を輪切りにしたものを素材にした有孔円盤である。片面に文様がある。6個の張出し線刻文に亀甲形の線刻がそれを取巻いている。6はトナカイ角を素材にした製品の破片で、一本の曲線の浮き文様が施されている。

木製品（図版18：底面。）

現長約15cm。一方はバットの握りの部分のように、下端に向かうにしたがって細くなり、末端には男根状の作りだしがある。断面は丸棒状ではなく、カマボコ形であり裏面に加工はない。もともと丸棒状であったものが表面の炭化した部分のみが残り、炭化しなかった土に接する

部分は腐ってしまった可能性は考えられる。他端はとくに加工らしいものはないが、枝分かれした部分を利用して本製品つくっていることが分かる。

2) 1号竪穴（図版15）

調査の経過

8号竪穴の長軸方向南東側に隣接している窪みがあり、8号竪穴とは揚げ土を狭む関係にあることからこれらの新旧関係をとらえることを目的として部分的に調査を行なった。土地所有者の記憶によると、この窪みを示す場所はかつての調査の対象となったとのことであったことから1号竪穴とした。調査では竪穴の西側の一部を対象とした。

遺溝（図23）

旧地表から30～40cm掘り込んだところを底面としている。北西側の壁面は直線的であり、それに沿って浅い溝と柱穴が認められる。これと平行して竪穴底面内部にも小規模な溝と柱穴がはられる。底面はきれいにさらわれており、遺物は存在していない。当初の予測どおり一度調査の手が加わったものと判断される。底面の状況からオホーツク文化期の竪穴であろう。また揚げ土の状況から8号竪穴との新旧関係をとらえようとしたが、判断はつかなかった。

3) 9号竪穴（図版14、17）

調査の経過

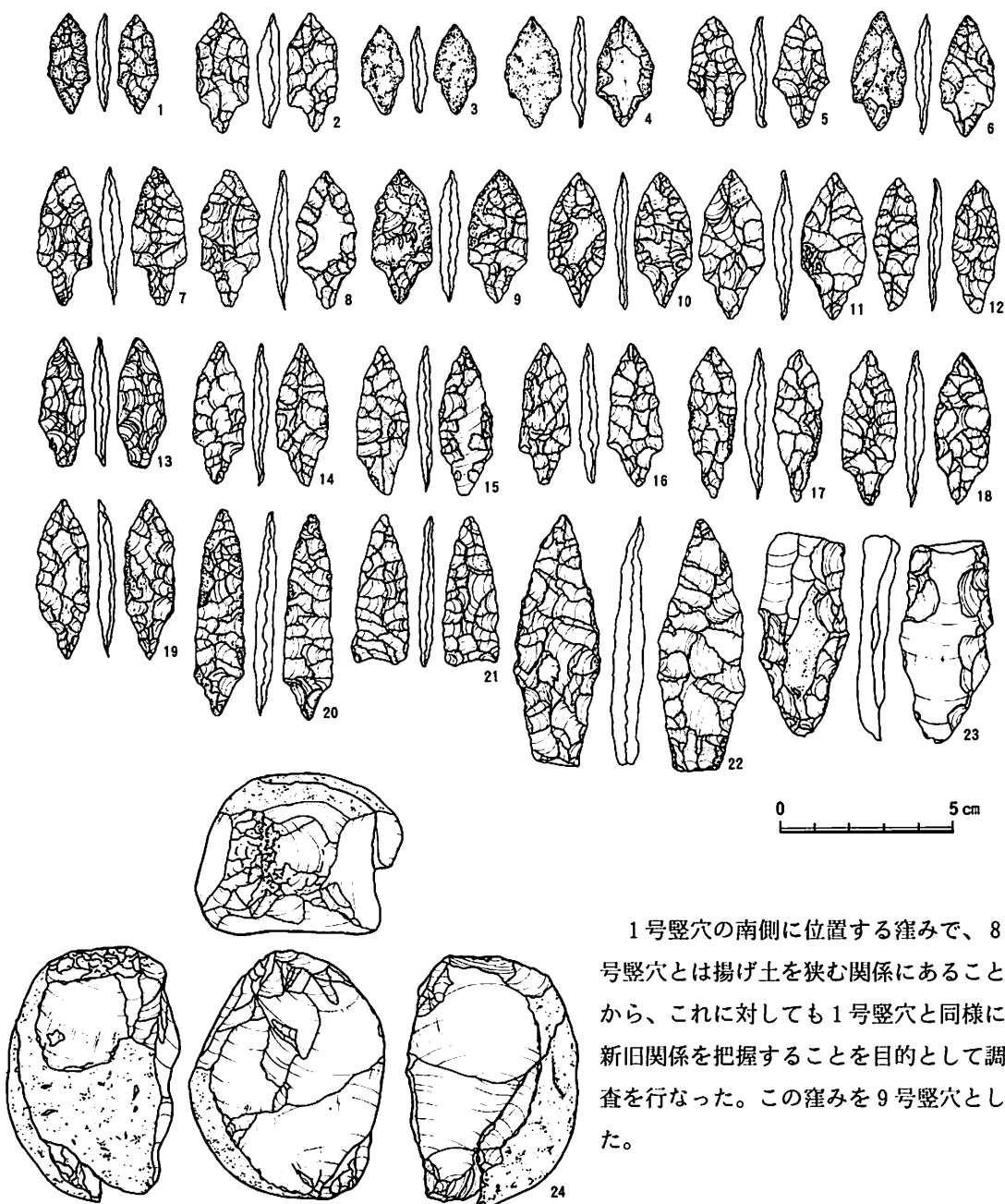


図26 8号竪穴出土石器

1号竪穴の南側に位置する窪みで、8号竪穴とは揚げ土を狭む関係にあることから、これに対しても1号竪穴と同様に新旧関係を把握することを目的として調査を行なった。この窪みを9号竪穴とした。

遺溝 (図29)

竪穴の北西部を部分的に調査することとした。その結果、底面直上からは面的に広がりを見せる焼土がありその下部からオホーツク土器、骨の集中か所、粘土が板状に硬化した所が現れた。このことから火災に遭ったオホーツク文化期の竪穴と判断された。

遺物 (図28: 底面。)

1は胴部がやや張り出した鉢形土器で、ほぼ直立した口縁部に直線と波状の組み合わせ貼付があ

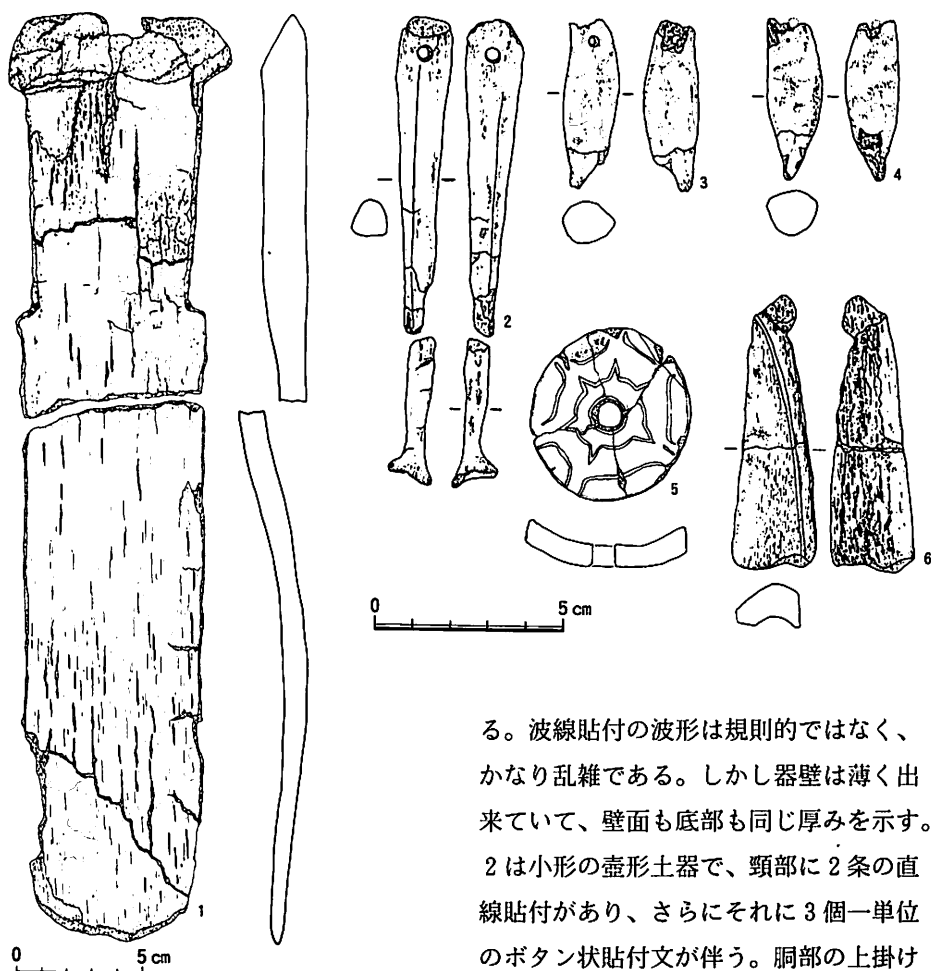


図27 8号竪穴出土骨角器

る。波線貼付の波形は規則的ではなく、かなり乱雑である。しかし器壁は薄く出来ていて、壁面も底部も同じ厚みを示す。2は小形の壺形土器で、頸部に2条の直線貼付があり、さらにそれに3個一単位のボタン状貼付文が伴う。胴部の上掛けした粘土が一部剥落している。3は口縁にボタン状の貼付文、口縁から頸部にかけて直線と波状の貼付がある口縁部の破片。4はいくぶん肥厚する口縁部下に、ボタン状貼付文が伴う破片。

4) 10号竪穴 (図版14、15、17、19)

調査の経過

8号竪穴の南西側の隣接地では8号竪穴溝築時の揚げ土は明瞭ではなく、僅かに窪みを呈する状況であった。立木や廃車等があることで全体を把握できなかったが、平面が方形を示すようなことから何等かの遺溝の存在の可能性を持ちながらトレンチにより確認することとした。

8号竪穴から延長したトレンチ内では2か所の焼土を表土直下から発見し、また8号竪穴に近い窪みの北側では、表土下の黒色土中に僅かな焼土の広がり認められたことなどから、この位置に遺溝が存在することを予測してトレンチに隣接する部分の拡張を行なった。

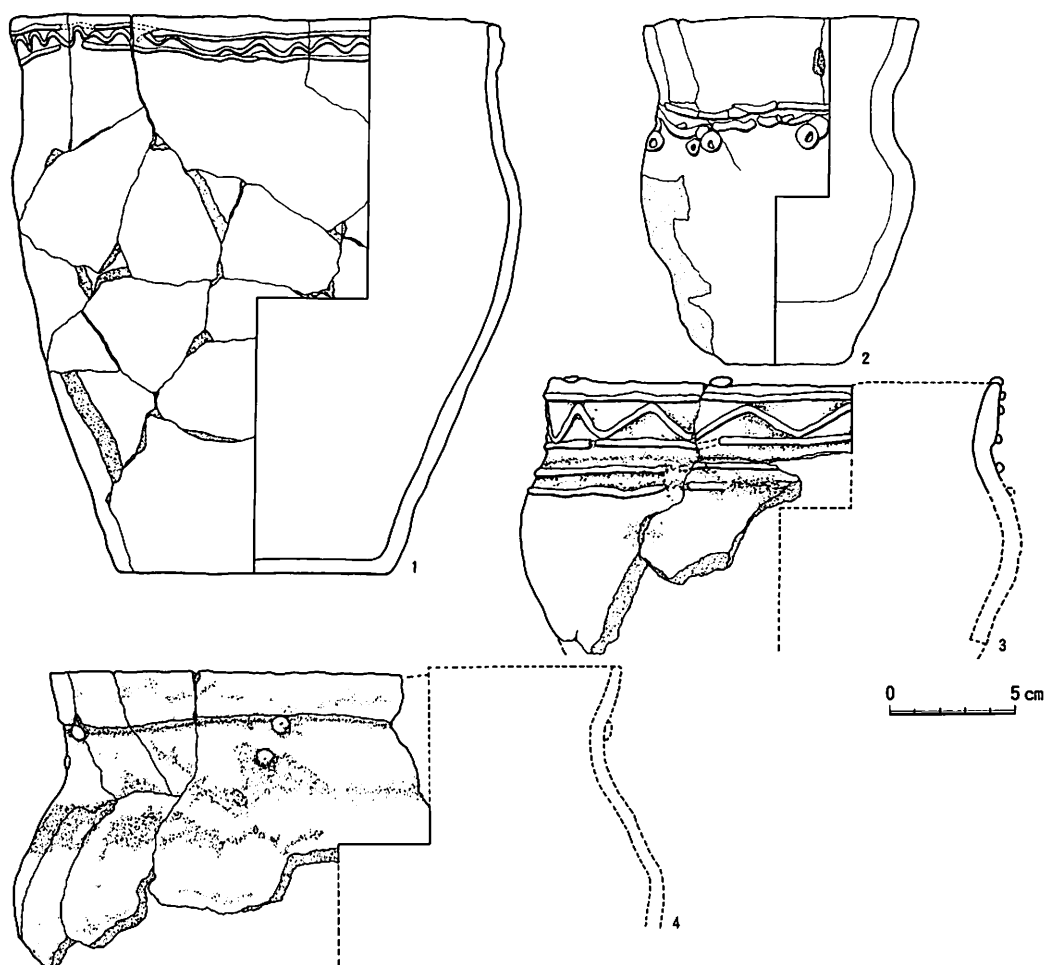


図28 9号竪穴出土遺物

黒色土中から見付かった2か所の焼土のレベルを基準にしてトレンチに続く部分を拡張したところ、それとほぼ等しい高さから3個体分のオホーツク土器と土玉、骨篋などを発見した。また8号竪穴に近い窪み北側の焼土を辿ってゆくと、2、3、8号竪穴のような掘り込みの深い竪穴の底面直上にあった焼土が壁面に沿って広がるのと同じような状況がとらえられた（同じ状況は南西側でもとらえられた）。このような状況から、この位置は黒色土中に底面を持ち、平面が方形の極めて掘り込みの浅い竪穴であると判断した。

遺溝（図29）

8号竪穴の南西側に隣接し、平面形はすみ丸の正方形を示すと思われるが、北西側は不明である。8号竪穴の長軸方向とほとんど平行関係にあり、8号と本竪穴との間隔は約1.2mである。北東と南西側壁間は、約5.5mである。壁面近くからは深さ40cm前後の柱穴と思われるものを3か所とらえた。底面は黒色土ないし暗茶褐色漸移層にあり旧地表からの掘り込みは10～15cmほど

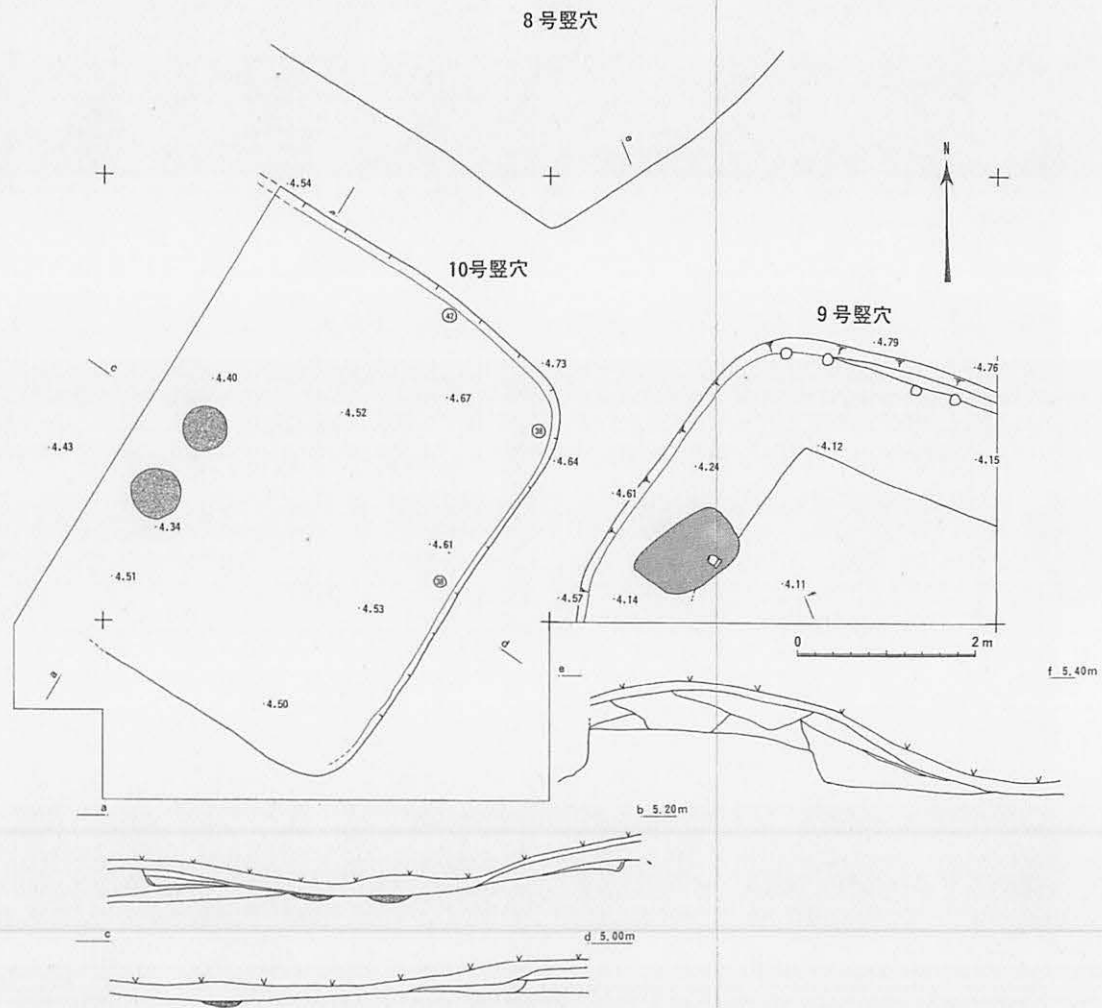


图29 9号、10号竖穴

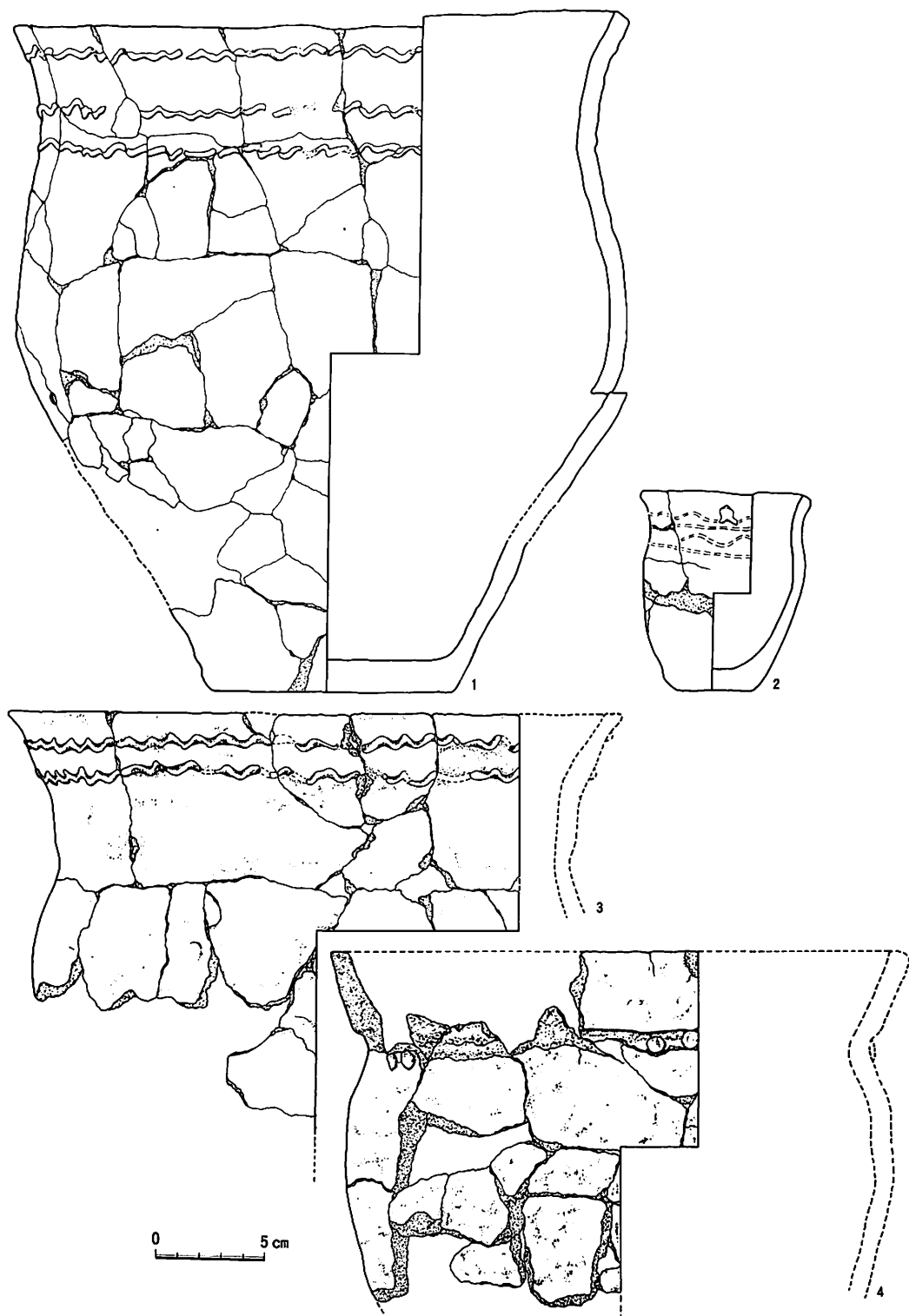


图30 10号竖穴出土土器

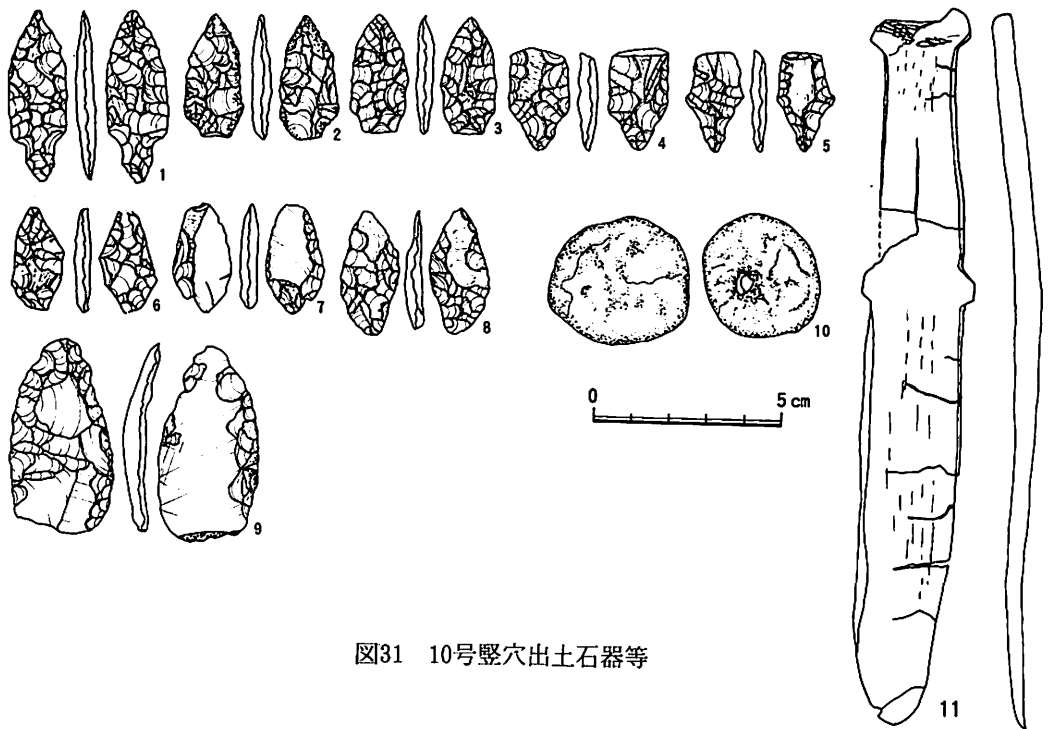


図31 10号竪穴出土石器等

である。底面中央附近に2か所の平面が円形を示す焼土がある。この付近から発見した土器は現在の地表面に近いことから、まとまった状態であったがかなり細かく割れていた。また焼土の北西側からは焼けて白色になった動物骨がややまとまって出土する傾向があったが、上物があったので十分な確認は出来なかった。

遺物

土器 (図30-1~4:底面)

1は口縁部に肥厚帯をもたない土器で、器高31cm。3本の波線貼付浮文は、施文時に粘土紐を指の爪先でひねりを加えていったことが、器面に残る爪痕から分かる。胴部径と口径がほぼ等しい。この土器もまた火熱によって破片が部分的に変形している。2は鉢形的小型土器。口縁に肥厚帯はなく、いくぶん外反する。文様は大半剥落してしまっているがその痕跡から、間隔をおいて直線と波線の貼付浮文があったようだ。3は口縁部のみの復元土器である。底部まで一個体分の破片が出土しているものの細かく割れていることから、全体を把握できるまでには復元できなかった。1の土器とほぼ同じ大きさになると思われる。口縁は僅かに肥厚するが、なだらかに頸部に移行するため目立たない。口縁部の2本の波状貼付浮文は、爪先を使った1の施文と同様な特徴をもっている。4は1、3と同様の大きさになると思われる土器。肥厚帯の下に、2個一組のボタン状の貼付文がある。

石器・土製品・骨器 (図31-1~11:底面)

1~8は石鏃で、茎を明瞭に作り出すもの(1~5)と、柳葉形のもの(6~8)とがある。9は削器。10は土玉。11は骨筥で、火熱を受けたことにより変形している。

(5) 分析と同定

銛先先端部に残された赤色系付着物

北海道開拓記念館 小林幸雄

はじめに

本遺跡では、オホーツク文化にともなう銛先2点が出土した。ともにほぼ完形の逸品である。1点は十分に使い込まれた外観を有し、他方は完成直前の未調整品である。前者の銛先先端部には赤色系付着物が残されており、その分布範囲は銛先鏃の付着状況を想定した時に、銛先本体と鏃とが接触する部分にはほぼ一致する。つまり赤色系付着物には、①銛先鏃そのもの、②銛先鏃の装着方法などに由来する情報が含まれているものと思われる。

今回は、銛先先端部に残された赤色系付着物について、SEM（走査顕微鏡）やEDS（エネルギー分散型X線分析装置）などを用いて調査した。この間、銛先鏃として石鏃や猪牙鏃が用いられていたのか、あるいは鉄鏃・銅鏃などの金属製鏃が導入されていたのかなどを具体的な課題としながら検討を進めた。以下にその結果を報告する。

1 調査資料

調査対象としたのは、湧別町川西遺跡における平成4年度（第2次）発掘調査の過程で、2号竪穴に出土した銛先（図19-1）である^{注1)}。

現存寸法は最大幅25×最大厚9×最大長105mmである。先端はごく細い溝が擦り込まれており、銛先鏃はこのスリット状の二又部分に嵌入するように装着されていたと思われる。現状ではスリットを構成する一方の大半は失われているが、わずかに根元に近い部分が残っており、ここでの現存スリット最大幅は0.8~1.0mmである。今回の主な調査対象としたのは、スリットを構成していた二又のうち現存する側の内面に残された赤色系付着物である。

2 調査方法

①目視・実体顕微鏡によって、資料の外観、赤色系付着物の分布状況・基礎的性状などを観察した。

②JEOL社製走査顕微鏡（SEM）JSM-5200を用いて、微細組織を観察した。次のEDS分析との並行した観察であるため、加速電圧は20kVに設定した。

③JEOL社製エネルギー分散型X線分析装置（EDS）JED-2001を用いて、SEM観察による微細組織に対応させながら分析をおこなった。

3 結果と考察

3-1 赤色系付着物の分布状況

銚先先端は、鍬を付着していたであろうスリット状に溝切りされた部分のうちの一方をほとんど失っている。この結果、現状に残された一方の内側には容易に赤色系付着物を観察できる。

図32-1は、銚先先端において、赤色系付着物を観察することができる側の内面での実体顕微鏡写真である。これに対応する形で模式図(図32-2)を示した。まず最初に、赤色系付着物が分布する範囲の概況について、模式図(図32-2)中の記号にそって説明しておきたい。A～Eは次のような領域を示す。

領域Aには赤色系付着物がほとんどみられない。ただし、Bに近い部分などにごく小さく点状に数箇所分布がみられる。図中では、AとともにBとDがほぼ平坦な面を構成している。しかし、B・Dにあるような赤色系付着物や風化物の類などがなく、Aにおいては相対的にも平滑性は極めて高い。製作当時におけるスリット溝の作り出し調整の雰囲気がそのまま残っているように見える。

領域Bの表面には灰白色系で粉末状の物質が薄く広がり、その下には調査対象となっている赤色系付着物が存在する。表面の灰白色系物質は土壌などに由来する不純物のように見えるが、そのほかの特定物質の風化物などの可能性もあるため、ここでは残したままの状態にして次の検討に備えた。

領域Cはスリット溝が止まる場所である。図に示される構造から、この部分では無柄鍬の基部を受けたものと想像する。この領域においてもごく小さな範囲に染み状に侵入するように赤色系物質が存在するが、B・Dにある赤色系付着物と同一のものかは不明である。

領域Dにおける赤色系付着物の分布状況についても、調査をはじめの当初は基本的にBと同じであった。しかし、ここでは下層の赤色系付着物に忠実な分析結果を得るために、上層にある灰白色系物質を取り除いてから、この後の検討などに備えた。

領域Eは銚先の折損部分である。銚先の長軸方向をほぼ直交するように折れており、本来の資料は先端方向にもう少し長い。Cにみられるのと同様に、ごく小さな範囲での染み状の赤色系物質がみられる。

以上のように、赤色系付着物は領域B・Dを中心に分布している。これに対して、領域A・C・Eにおいても、それぞれごく小さな点状の範囲で赤色系物質が存在している。ただし、これが領域B・Dと同一のものに由来するかどうかは不明ではある。

3-2 赤色系付着物の基礎性状

赤色系付着物の基礎性状について、実体顕微鏡下で確認した。領域B・Dの平坦面ではほぼ全体にわたって赤色系付着物を確認できるが、これを覆うように灰白色系の薄い層がある。赤色系付着物の本体がこの灰白色系の薄層と混在しているのか、あるいは別個にその下に存在するのか、当初は今少し判然としなかった。そこで実体顕微鏡下で様子を確認しながら、灰白色系薄層を除去した。この間の観察から両者の関連などについては、次のとおりである。

①灰白色系物質は、赤色系付着物を覆うように存在する。

②灰白色系物質は、不均一であり、かつ緻密さを有しないため、小刷毛などを用いることによって簡単に剝離・除去できる。

③この灰白色系薄層中に、赤色系付着物に由来すると思われる痕跡は見出せない。つまり、赤色系付着物と灰白色系薄層とが混在した状況にあるとは認められない。

これらの観察結果から、赤色系付着物と灰白色系薄層とは、もともと一体のものではなく、灰白色系薄層は主に埋土環境中に付着した土砂類の汚れなどに由来する可能性が高い。

これに対して、赤色系付着物は、灰白色系薄層を除去した下に層をなして存在する。目視や実体顕微鏡観察の範囲では、①色調・組織ともに安定かつ緻密であり、②堅固であり、③刷毛はもちろんのこと、竹串の先端を軽く押し付けるなどしても容易には剝離しない。灰白色系薄層との一体性はなく、むしろ基盤となっている骨あるいは牙からなる組織（ここでは以下、骨牙組織と仮称する）との一体性を感じさせる。よってこの赤色系付着物は、骨牙組織に対して塗り込んだり、接着させたりすることによって存在するものではなく、ほぼ骨牙組織と一体となった沈着物あるいは固着物としての性格を有している。また実体顕微鏡レベルの観察では、通常の赤色系顔料にみられるような粒子状あるいは塊状の状態を確認できない。以上の観察結果からその生成の問題を考えると、塗料や接着剤などが物理的に残留したとみるよりも、なんらかの供給源があって、そこから溶液などの形で骨牙組織に対して時間をかけて徐々に浸透したものが蒸発-乾燥-湿潤などの行程を繰り返すことによって沈着あるいは固着したと想像できるのではなからうか。この場合の供給源としては、①銛先本体、②銼、③接着用材料などが想定される。また、安定かつ緻密質であることと、骨牙組織との一体性などの起因については、銛先表面の状況からみて一定時期に火熱による高温雰囲気下にあったこととの関連性も考えられる。

3-3 SEM観察とEDS分析

銛先先端部のうち、領域A・B・D(図32-2)などの平坦面を中心にして、SEM観察とEDS分析とをおこなった。SEM像は写真1-1、EDS分析結果は図32-3(a、b、c、d)、写真1-2~5に示した。

模式図(図32-2)中の各分析点(a、b、c、d)に対応するEDS分析によるX線チャートは図32-3(a、b、c、d)、同時に表1にはEDSによる自動定量分析結果をそれぞれ示した。まず、主成分元素の動向をみると、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、P(りん)、Ca(カルシウム)の4元素は4点全てに検出されている。これに対して、Fe(鉄)はb・c・dの3点ではやや主成分的な動向を見せるが、a点においては極めて微弱であり不純物的な存在である。

表1 EDS分析結果

(各元素の数値はwt%)

	Al	Si	P	Cl	K	Ca	Ti	Fe	Al/Ca	Si/Ca	P/Ca	Fe/Ca
a	57.93	14.36	19.14	0.80	0.30	7.15	0.01	0.30	8.10	2.01	2.68	0.04
b	25.07	38.71	7.06	0.70	2.07	9.45	0.91	16.05	2.65	4.10	0.75	1.70
c	18.03	24.42	19.63	0.63	1.05	28.56	0.39	7.29	0.63	0.86	0.69	0.26
d	22.53	21.82	14.00	1.04	1.04	16.60	0.85	22.13	1.36	1.31	0.84	1.33

最初に4点ともに共通して主成分に検出される元素のうち、CaとPの2元素は、骨牙組織の主成分であるリン灰石 $\langle 3\text{Ca}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot \text{CaCO}_3 \rangle$ に由来するものである^{注2)}。P/Caの比をみると、 $b \cdot c \cdot d$ が0.69~0.84とやや安定した範囲にあるのに対して、 a のみが2.68と比較的高い値を示す^{注3)}。この2元素のEDS面分析結果をみるとほぼ全体に分布するが、特に平坦面の縁辺部や折損部(領域E)において濃密である。これらの部分が新鮮な骨牙組織を残し、その主成分であるCaやPの溶出を免れていたと想定することで、この結果は理解できる。また、平坦面縁辺部や折損部ほどではないが、領域AにおいてもCaとPの比較的均質で安定した分布がみられる。SEM像などと合わせて考えると、スリット溝調整時からの清浄性を保っていることとして理解できる。しかし、あらためてP/Ca比の問題に戻ると、点aにおいては、Ca量が相対的に低下している。骨牙の構成成分(P)の濃縮は想像し難いので、Caの選択的な溶出を想定しなければならない。そうすると、後述する“詰め物”が形状や構造を保存するには役割を果たしているものの、Caのやや選択的な溶出には大きな障害物にはならなかったであろう。

次に、AlとSiについてみると、2元素ともに不純物系の成分に由来するものと思われる。Al/CaとSi/Caの比をみると、いずれも点cで最も低く、点dがこれに次ぐ。これに対して、点aと点bにおいては、いずれも値は高く、Al/Caの比では点aが8.10で点bが2.65、Si/Caの比では点aが2.01で点bが4.10を示す。実体顕微鏡やSEM観察と合わせて考えると、領域Bを中心に残っている灰白色系薄層はSiを主成分とするのに対して、領域AではAlに富む。あるいは、領域Aと領域Bとでは、不純物系元素のAlとSiとを供給する物質、あるいはその供給メカニズムなどが異なることも考えられる。

Feについては、骨牙組織に伴う基礎的な元素ではない。b・dの2点では、明らかに主成分的な動向を示し、cにおいてもいくらか低い割合ではあるが無視できる値ではない。aでは明らかに不純物的な存在である。EDSによる面分析結果をみると(写真1-5)、FeのX線像は、CaやPおよびSiのX線像における傾向と大きく異なっている。結果的には、ほぼ赤色系付着物の分布に一致する部分に元素分布している。とくに、領域Dにおいては、クリーニングによって最表面にあった灰白色系薄層をはぎ取って、赤色系付着物の面を出したところでFeが最も濃密に分布している。この結果から、赤色系付着物を構成する化合物中にはFeが主成分的に存在することが明らかである。

そうだとすると、気になるのは領域Aにおける観察・分析の結果である。目視・実体顕微鏡・SEMの観察では、いずれもその平滑性は高く、不純物などの付着もなく面としての清浄性もよく保たれている。また、EDS分析では、骨牙組織の主成分であるCaとPの安定した分布が保持され、赤色系付着物の主成分であるFeの分布はない。つまり、領域Aでは銼先の製作、より具体的には銼先鍍装着用スリットを調整した状態のままよく保存されている。ここでは、Feを含んだ赤色系付着物が形成し難い条件にあったとみることができる。

以上の検討結果を踏まえながら当初の調査目的に戻ると、銼先鍍には鉄製品が用いられていたと想定することによって、全体が素直に理解できそうに思われる。その場合の赤色系付着物は、鉄製銼先鍍が腐食することで生じた錆汁が、銼先との接触面を中心に浸透-固化を繰り返すこと

によって生成したものではなかろうか（領域B・D）。これに対して、必ずしも本体と鏃との接触が想定し難い領域C・E及びAにおける傾向をみると、明瞭な形で面的な広がりをもった赤色系付着物の存在は見られない。ところがこれらの領域のいずれにも点状のごく小範囲での赤色系物質の存在が求められる。このように赤色系付着物の形成を阻害しつつ、ごく小範囲での類似物質の存在を可能とさせるような状況を説明するためには、領域Aにおける銛先鏃固定のための何らかの詰め物的存在を想定する必要がある^{註4)}。つまり、鏃汁の一部は、骨牙組織や詰め物など微細な空隙部を通過して点状のごく小範囲において赤色系付着物に類似した物質を固着させたのではないかと（領域A・C・E）。この間には、火熱による影響も大きな役割を果たした可能性もありそうである。以上、やや仮定を多く含んではいるが、赤色系付着物の生成メカニズムなどに関連した推定を述べた。

3-4 銛先加工の状況

漁労用具としての銛先にどのような銛先鏃を用いたのかという問題は、当時の骨角器製作加工具の状況などとも深く関わることと思われる。

今回も銛先の整形や彫刻の状況について、実体顕微鏡下で大まかな観察をした。分析対象とする赤色系付着物とは直接的な関連性をもたないが、装着されていた銛先鏃を推定する上での、基礎的な手掛りが含まれるのではなかろうか。本稿では、本格的に問題を追及するまではできないので、ごく一部を紹介するだけで止めたい（写真2）。この写真にも表現されているように、骨牙の面取りや、彫刻文様の作出などいずれも力強くかつ精緻である。この銛先を製作した人の技術力もさることながら、手にしていた道具の切削能力も極めて高い。定量的なデータに基づくものではなく、やや感覚的な印象からすると、かなり完成度の高い鉄製利器が用いられていたと推定する。

4 まとめ

銛先先端に残っていた赤色系付着物を検討して、次の知見を得た。

- 1) 赤色系付着物は、一部を残して、銛先と銛先鏃とが接触する部分にほぼ一致して分布する。
- 2) 赤色系付着物は、緻密で、堅固であり、基盤の骨牙組織とはほぼ一体をなしている。
- 3) EDS分析により、主成分的な元素としてCa・P・Al・Si・Feなどが検出された。①Ca・Pは骨牙組織の主成分、②Al・Siはなんらかの汚れなど、③Feは赤色系付着物にそれぞれ由来すると考えられる。
- 4) 銛先の製作には、鉄製利器が用いられていたと考えられる。

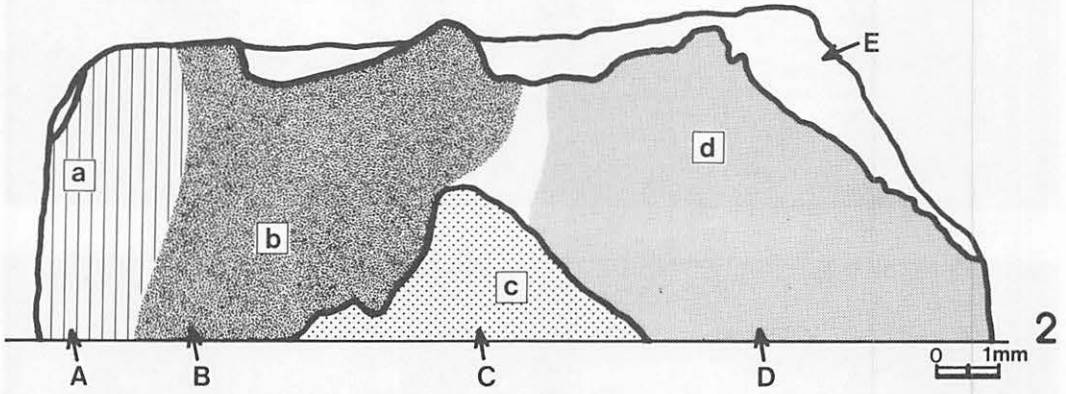
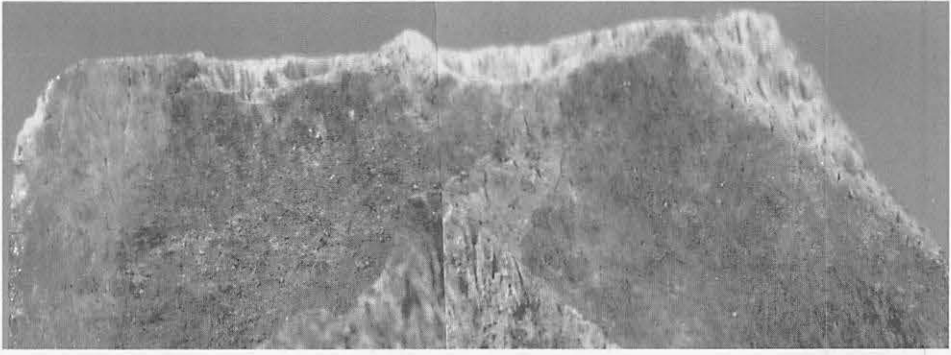
さらにこの間の検討経過に基づきながら、次のような推定に立脚して、赤色系付着物の形成に関わる全体像の理解に努めた。

- イ) 赤色系付着物は、鉄製銛先鏃から生じた鏃汁に由来する。
- ロ) 鉄製銛先鏃を固定するために、スリット内の一部（この場合には領域A）には、何らかの詰め物が充填されていた。

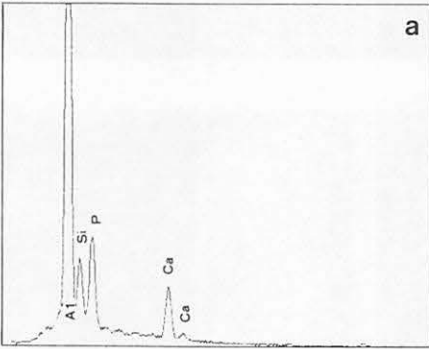
今回は、オホーツク文化の漁労用具=銚先における銚先鏝の問題について、資料のごく一部に残されていた赤色系付着物を検討することで、いくらかを明らかにしようとした。まだこの他にもチェックする事柄が残されている中で、やや瑣末な議論に立ち入り過ぎたかとの反省も多いが、本稿ではこの段階に止め今後二期したい。

注

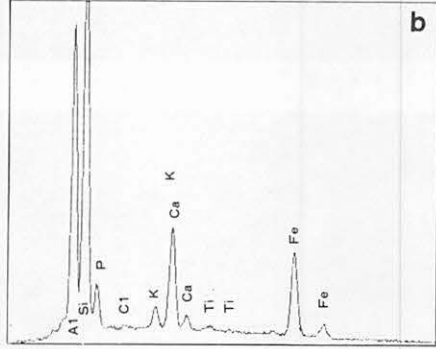
- 1) 青柳文吉 (1994) : 湧別町川西遺跡発掘調査概報(2). 北海道立北方民族博物館研究紀要第3号, 83-92
- 2) 児玉桂三・吉川春寿 (1977) : 無機質の代謝. 生物科学ハンドブック編集委員会編, 生物化学ハンドブック2版, 461-473
上代皓三・清水久太郎 (1977) : 組織の化学. 生物化学ハンドブック編集委員会編, 生物化学ハンドブック2版, 553-568
- 3) 上代・清水 (1977) によると、『骨でも歯でもその無機成分はほぼ同じで、リン灰石の構成、 $3\text{Ca}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot \text{CaCO}_3$ とだいたい一致している。純粋のリン灰石であれば、 $\text{Ca} : \text{P} = 2.15$ ($\text{P}/\text{Ca} = 0.465$)。骨・歯では少量のリン酸マグネシウムが混じるので、 $\text{Ca} : \text{P} = 1.99 \sim 2.04$ ($\text{P}/\text{Ca} = 0.490 \sim 0.503$)。』
- 4) このことに関連して、右代啓視氏 (北海道開拓記念館) からは次のような教示を得た。『詰め物材にはコケ類が用いられていたのではないか。乾燥したコケ類をスリット端に詰めておくと、水に濡れた時には膨潤するので銚先鏝の脱落が防止される。』



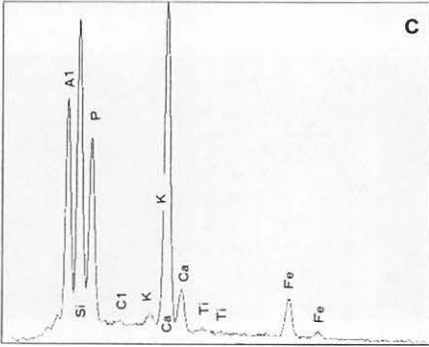
フルスケール4K



フルスケール4K



フルスケール4K



フルスケール4K

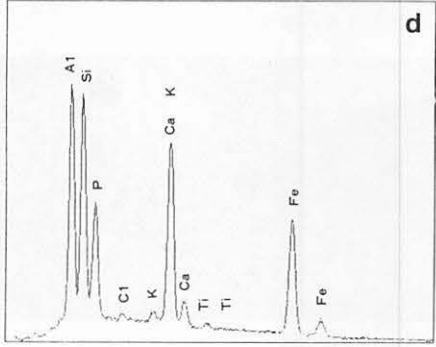
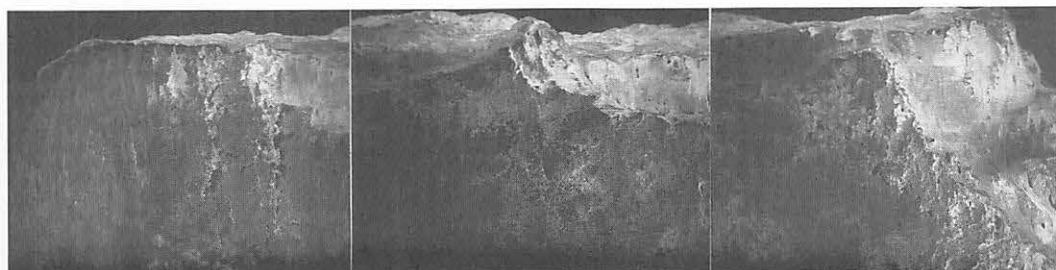
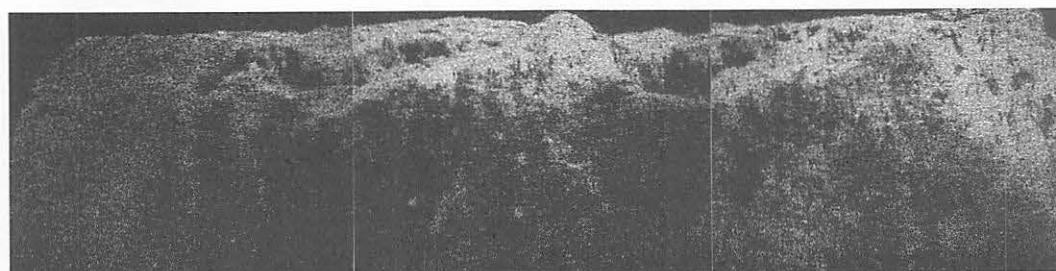


図32 赤色系付着物の分布状況とEDS分析結果



1. 鉛先先端のSEM像



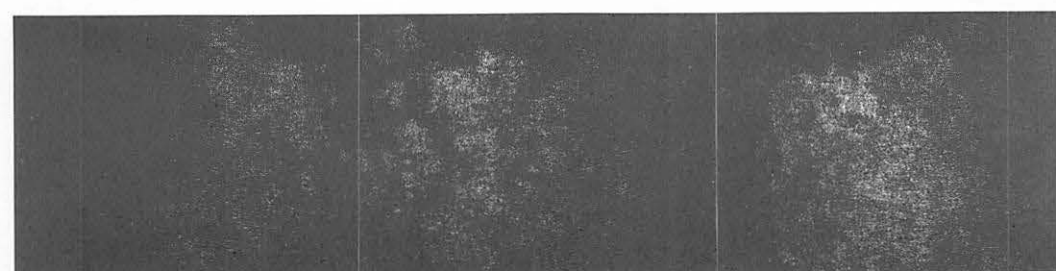
2. 同上Ca K α像



3. 同上P K α像

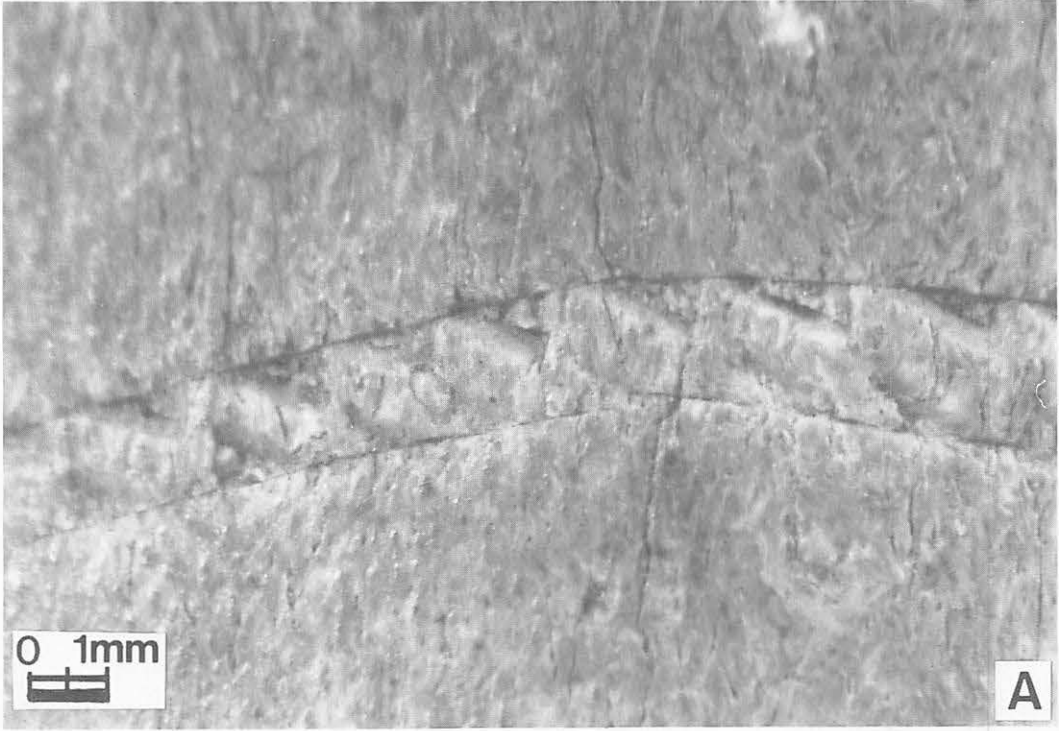


4. 同上Si K α像



5. 同上Fe K α像

写真1 鉛先先端の走査電子顕微鏡 (SEM) 像とX線像



川西遺跡出土の動物遺体

国立歴史民俗博物館 西本豊弘

はじめに

川西遺跡出土の動物遺体は、すべて堅穴から出土したもので、大部分は焼けていた。そのため、小さな骨片になっているものが多く、完形品は指骨などの小さい部位だけであった。頭蓋骨も小さく割れており、上顎骨・切歯骨・側頭骨下顎関節窩（側頭骨と記載）・後頭顆などの部位を選択して表示した。出土した動物遺体は、種名を表2に示し、出土量は堅穴ごとに表3にまとめた。堅穴内の出土内容は、まず発掘区（1～4区）ごとに、次に包含層（表土・覆土・底面・骨塚）ごとに集計した。それらを骨塚とそれ以外の場所に分けて、出土内容を簡潔に示したものが第4表である。

動物の内容は、魚類・鳥類は少なく哺乳類が主体であった。特に、ヒグマ・エゾシカ・アザラシ類が多かった。鳥類では、大型のフクロウ（シマフクロウ？）が出土したことが注目される。

1 堅穴ごとの出土内容

2号堅穴

堅穴の奥の骨塚部分がよく残されていたので、出土した骨も多かった。骨塚は、ヒグマとエゾシカの頭蓋骨をはじめとした全身の部位で構成されており、それにアザラシとアシカ類がごく少量混じていた。骨塚以外では、エゾシカは頭蓋骨を含む全身の骨が出土しており、タヌキ・キツネ・カワウソ・アザラシ類・アシカ類など多くの種が見られた。ただし、ヒグマは四肢骨だけで頭蓋骨は見られなかった。

3号堅穴

この堅穴も骨塚があったが、覆土から多くの骨が出土した。まず、骨塚の内容であるが、ヒグマは頭蓋骨を伴わず四肢骨だけである。エゾシカは頭蓋骨と四肢骨の両方が含まれていた。タヌキとテンの頭蓋骨もあり、アシカ類・シマフクロウ・サケも含まれていた。これに対して、骨塚以外ではシカの頭蓋骨が10個以上出土しており、ヒグマの頭蓋骨も1個見られた。この堅穴では、骨塚付近が攪乱を受けているようであり、骨塚以外で出土したヒグマやエゾシカなども、本来は骨塚に属している可能性が高い。

6号堅穴

シカの頭蓋骨3個を含む骨塚があったが、骨の出土量は少ない。骨塚にはヒグマの頭蓋骨はなく、四肢骨のみであった。タヌキとアザラシ類の四肢骨も含まれていた。

7号堅穴

骨塚の部分が発掘されておらず、獣骨の出土量は少ない。覆土からファイリ（ワモン）アザラシの下顎骨が1個体分出土している。また、底面からマッコウクジラと思われる大きな歯が1点採

集されている。この歯は未加工であった。

8号竪穴

この竪穴からも多くの骨が出土したが、一部分攪乱されていた。それでも骨塚は比較的よく残っていたようで、ヒグマ・エゾシカ・アザラシの頭蓋骨・四肢骨が骨塚に多量に含まれていた。骨塚以外でもこれらの種の頭蓋骨が出土しており、骨塚との差異は見られなかった。本来はすべて骨塚に伴うものかもしれない。

9号竪穴

骨塚が残っており、骨の出土量もかなり多い。しかも、骨塚ではヒグマとエゾシカの頭蓋骨が主体であり、四肢骨はほとんど含まれていない。覆土や底面でもヒグマとエゾシカの頭蓋骨が主体であり、タヌキ・テン・フィリアザラシの頭蓋骨・四肢骨なども少量見られた。出土内容から見て、底面出土としたものも骨塚の一部ではないかと推測される。

10号竪穴

骨塚部分が発掘されていないので、骨の出土量は少ない。それでも、ヒグマ・エゾシカ・タヌキ・フィリアザラシなど、この遺跡で出土している主な種が見られた。

2 動物の内容

竪穴ごとの動物遺体の内容をみてきたが、多く出土したヒグマ・エゾシカ・アザラシなどについて、その内容を簡単に説明しておきたい。まずヒグマについては、四肢骨の関節部分の形状からみて、成獣・若獣・幼獣のすべてがみられた。その中では成獣が多いが、焼けた骨では成獣の方が残りやすいとも言えるので、数量的に示すことは困難であった。エゾシカについても同様である。焼骨の場合、歯は消失しやすいので、歯から年齢を推定することができない。シカの雌雄についても、雄の頭蓋骨が出土していることは明らかであるが、雌が含まれていないとは言えない。アザラシ類では、フィリアザラシが多いようにみえるが、この種がもっとも小さく、下顎骨が薄いことなどから、焼骨でも同定しやすいという事情がある。ゴマフアザラシと思われるものもかなり多く見られた。クラカケアザラシとアゴヒゲアザラシは少ないであろう。アシカ科の動物については、オットセイとアシカの両方が含まれていることは明かであるが、どちらが多いかは分からない。また、トドも含まれている可能性が大きいが確認できなかった。

鳥類では、オジロワシまたオオワシと思われる大きなワシ類の他に、シマフクロウと推定される大きなフクロウが見られた。エゾフクロウの現生標本と比較して同定したために、シマフクロウ?として、最終的な種名同定を保留したものである。

3 骨塚の特徴

次に骨塚の内容や動物遺体全体としての特徴を考えてみたい。骨塚とそれ以外の場所で出土した動物遺体の内容を比較したものが表4である。この表では、頭蓋骨のみは個体数で示し、その他の部位は、出土しているかどうかのみを記載した。しかし、すでに述べて来たように、後世の攪乱の影響があり、骨塚以外の出土品も本来は骨塚に伴うものが多いかもしれない。その点を考

表2 川西遺跡出土動物遺体種名表

a.魚綱 Class Pisces		
1	イトウ	<i>Hucho perryi</i>
2	サケ (シロザケ)	<i>Oncorhynchus keta</i>
3	ウグイ	<i>Tribolodon</i> sp.
b.鳥綱 Class Aves		
1	シマフクロウ?	<i>Bubo blakistoni blakistoni</i>
2	ワシ類	<i>Haliaeetus</i> sp.
3	カモ類	<i>Anas</i> sp.
4	アホウドリ類	<i>Diomedea</i> sp.
5	カモメ類	<i>Larus</i> sp.
6	ウミガラス類	<i>Uria</i> sp.
c.哺乳綱 Class Mammalia		
1	エゾユキウサギ	<i>Lepus timidus ainu</i>
2	エゾヒグマ	<i>Ursus arctos yesoensis</i>
3	エゾタヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides albus</i>
4	キタキツネ	<i>Vulpes vulpes schrencki</i>
5	エゾクロテン	<i>Martes zibellina</i>
6	ニホンカワウソ	<i>Lutra lutrawhiteleyi</i>
7	ラッコ	<i>Enhydra lutris</i>
8	エゾシカ	<i>Cervus nippon yesoensis</i>
9	ニッポンアシカ	<i>Zalophus californianus japonicus</i>
10	アシカ類	Otariidae gen.
11	オットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>
12	ゴマフアザラシ	<i>Phoca vitulina</i>
13	フイリアザラシ	<i>Pusa hispida</i>
14	クラカケアザラシ	<i>Histriophoca fasciata</i>
15	アゴヒゲアザラシ	<i>Erignathus barbatus</i>
16	イルカ類	Delphinidae or phocaenidae gen.
17	マッコウクジラ	<i>Physeter catodon</i>
18	クジラ類	CETACEA fam.

慮しながら、表4を見てみると、まず第1に、この遺跡では、骨塚を構成するものは、ヒグマとエゾシカとアザラシ類が主体であることである。第2に、骨塚には頭蓋骨だけではなく、四肢骨も含まれることである。もっとも、頭蓋骨は本来は骨塚に多く、その他の場所では少ないのではと思っているが、この資料では、骨塚とそれ以外の地区ではあまり差異がないと言わざるを得ない。むしろ3号と6号竪穴のように、ヒグマの頭蓋骨を伴わない骨塚があることが第3の特徴として挙げられる。3号竪穴では、攪乱されていたとしても、エゾシカは12個体分の頭蓋骨が含まれていたのに対して、ヒグマは1個体分の頭蓋骨である。第4として、タヌキ・キツネ・テンなどの陸生の中・小形獣が少ないことである。オットセイ・アシカ・イルカ・クジラなどの海獣については、よく分からない。鳥類では、大きなフクロウ類の、おそらくシマフクロウと思われる資料が、オホーツク文化の遺跡で初めて確認されたことが注目される。アイヌ文化の「フクロウ送り」につながる儀礼が行われていたのかもしれない。骨塚にサケやイトウの骨が伴うことも、第5の特徴である。椎骨であるが、それらの骨も偶然に混じたものではなく、意図的に骨塚に置かれたものであろう。魚類と鳥類が少ない点は、すこし気になるが、竪穴内の底面と骨塚を中心とした資料であるので、本来、それらの骨が少なかったのかもしれない。

おわりに

骨塚の内容を中心に、この遺跡の動物遺体の特徴をみてきたが、ヒグマに加えて、エゾシカとアザラシが多い点で、道東部のオホーツク文化の特徴をよく示していると言える。焼失住居のため、骨が小さく変形しており、十分に分類できなかった点もあるが、内容の特徴を一応お知らせできたと思う。

最後に、この資料を分類させていただいた北海道立北方民族博物館・青柳文吉氏に深く感謝いたします。

表 3-1 2号竪穴出土の動物遺体

竪 穴	種 名	部 位
2号竪穴-1(表土)	タヌキ?	椎骨1
	その他	陸獣仙骨破片1, その他骨片25
2号竪穴-1(覆土)	ヒグマ	基節骨1
	エゾシカ	側頭骨左右各1, 脛骨右上1
	キツネ?	下顎骨右, 大腿骨右下(成), 脛骨左上(成), 椎骨1
	サケ	椎骨1
	その他	陸獣肋骨破片5, その他骨片約80(陸獣主体)
2号竪穴-1(底面)	ヒグマ	腕骨左上1(成)
	エゾシカ	側頭骨左, 下顎関節突起左1
	クジラ	骨片12(本来2個の骨) No.7
	その他	海獣骨片2 No.7
2号竪穴-1(骨塚)	アシカ類	肩甲骨右(成)
	その他	骨片15, 木皮1(焼けたもの)
2号竪穴-2(覆土)	クジラ?	椎骨1(焼けていない), 椎骨1個分(床, 柱穴 焼骨), 骨片4
	カモ?	上腕骨左下(焼けて変形している)
	その他	海獣骨片5, その他骨片3
2号竪穴-2(底面)	エゾシカ	中手骨または中足骨下破片1
	クジラ?	骨片4
	イトウ	椎骨1(焼けていない)
	その他	小型陸獣? 肋骨破片1, 海獣椎骨1, 陸獣骨片4, その他骨片20
2号竪穴-3 (表土攪乱)	エゾシカ	上顎右第1後臼歯, 右第2後臼歯, 後頭顆左2(2個体分), 頭蓋骨片3, 頰骨左右各1, 角破片1
	タヌキ	尺骨左1(成)
	カワウソ	尺骨左1(成)
	ゴマファザラシ?	下顎骨左右各1
	フィリアザラシ	腕骨右上2(うち一つは成)
	オットセイ	距骨右(若♀?)
	アシカ類	距骨左右?(小型若♀)
	その他	陸獣, 海獣骨片約50, 海獣椎骨1, その他骨片約20
	エゾシカ	下顎右第3後臼歯(成)
	タヌキ?	上腕骨右下(成), 脛骨左下(成)
2号竪穴-3(覆土) (焼骨)	アザラシ	骨片1
	貝	破片1(周辺摩耗)
	その他	陸獣肋骨破片1(焼土下サンプル), 陸獣海獣骨片約30
	エゾシカ	後頭顆左1
	アザラシ	踵骨破片1
2号竪穴-4(表土)	クジラ	骨片1
	その他	海獣骨片2
	クジラ	加工品1(破片の為器種不明)
	小型陸獣	椎骨1, 大腿骨右上(タヌキまたはキツネ)
2号竪穴-4(覆土)	その他	海獣骨片約50(もとは一点), 骨片約10
	エゾシカ	上顎歯破片1(焼けていない)
	タヌキ?	大腿骨左下1
	フィリアザラシ?	肩甲骨左右各1, 尺骨左1, 腕骨破片上1, 指骨3, 趾骨1
	ゴマファザラシ?	肩甲骨右1, 上顎骨右1
	アザラシ	椎骨4, 趾骨破片2
	クジラ	骨片20
	その他	陸獣海獣骨片150
	ヒグマ	大腿骨上(成), 中節骨2
	エゾシカ	側頭骨右1, 後頭顆右1, 角破片2, 下顎関節突起左1右1, 椎骨1, 仙骨1, 肋骨3, 上顎右第1後臼歯骨片6, 岩臼骨左右各2(2個体分),
2号竪穴-4(覆土) (焼骨)	アシカ類	肩甲骨左? 破片1
	クジラ	頭蓋骨破片1, 骨片3(焼骨), 骨片1(焼けていない), 骨片19(焼骨もとは一個の骨),
	ワシ類	中足骨右1(大型種類不明)
	その他	陸獣肋骨1破片3, 骨片約50(頭蓋骨, 四肢骨), 海獣骨片3, クジラ加工品破片(中柄?)
	タヌキ?	第2頸椎1(焼骨)
2号竪穴-4(底面)	アシカ類	犬歯破片1, 踵骨右1左右不明1(?),
	トリ	焼骨片1
	その他	海獣肋骨破片1(大型焼けていない), 焼骨片1
	ヒグマ	腕骨1, 腕骨左上下各1, 四肢骨片1, 腕骨中間部? 左右不明, 下顎骨左(成小型)
	エゾシカ	頭蓋骨破片少々, 後頭顆右1, 下顎骨左1左破片1, 下顎関節突起左右各1, 角破片2, 上顎歯2, 上顎歯(第2前臼歯)4, 下顎第2後臼歯? 破片1, 切歯骨, 基節骨1, 肋軟骨片4, 頰骨左2右2,
2号竪穴-4(底面)	ゴマファザラシ?	頰骨右1
	サケ	椎骨1
	その他	海獣四肢破片1(焼骨?), 中手骨または中足骨1, 骨片1(大型), 陸獣四肢骨片少々, 骨片90, 焼骨片約2000(陸獣主体), 骨片約100(エゾシカ主体)

表3-2 3号竪穴出土の動物遺体

竪 穴	種 名	部 位
3号竪穴-1(表土)		骨片20
3号竪穴-1(覆土) (すべて焼骨)	ヒグマ	尺骨右(幼)、橈骨左上(成)、寛骨左(成)2破片1、中手骨または中足骨4、椎骨1、基節骨5、中節骨2、末節骨1
	エゾシカ	頭蓋骨角座部分左1右1(♂)破片2、頭蓋骨破片少々、側頭骨左4右7、後頭顆左7右9、脳下底1、上顎骨右2(成)、下顎骨左4右2、下顎関節突起左4右4、上顎右第2後臼歯(成)、第1頸椎2、岩臼歯11、上顎左第3後臼歯、上顎右第2、第3後臼歯、切歯片左2右3、頬骨左2、角右1破片1、
	タヌキ	頭蓋骨左1、脛骨右上(成)、下顎骨左1右1、大腿骨左下(成)
	カワウソ	尺骨左上(成)
	ノウサギ	寛骨左(成)1、上腕骨左上1
	フィリアザラシ	後頭顆右、上腕骨左下(成)、右(若)、鼓骨1、寛骨右(成)、尺骨左(成)、距骨左2
	ゴマファザラシ?	寛骨右、上腕骨右(若)、尺骨左(成)、
	アゴヒゲアザラシ?	第1頸椎1(成)
	オットセイ	上腕骨左中間(成♀)
	アシカ類	第2頸椎1
	イルカ	肩甲骨破片1
	その他	小型獣側頭骨左1、海獣第2頸椎2、椎骨5、第1頸椎?破片1(大型)、その他骨片約1050(海獣少々有り)、焼骨片7
	3号竪穴-1(底面)	ヒグマ?
エゾシカ		頸椎1、胸椎1、角(焼かれたもの)
テン		下顎骨左2(犬歯4本あり)、下顎骨右2、上顎犬歯左2右1
ノウサギ		上顎骨左
アザラシ?		側頭骨右1(焼骨)、頭蓋骨焼骨破片約100(頭一個分?)
オットセイ		上腕骨右中間部(♀?)、脛骨左1(♀?)
アシカ類		指1(大型)
サケ		椎骨1
その他		小型陸獣脛骨右上、海獣椎骨4、肋骨2(うち一つは大型)、骨片40
3号竪穴-1(骨塚)	ヒグマ	大腿骨右下1(成♀)、尺骨左1、末節骨1
	エゾシカ	左第1、第2、第3後臼歯(萌出途中)、切歯骨左1
	タヌキ	下顎骨右1、上顎犬歯左1、上顎骨右
	テン	下顎骨右2、脛骨左上
	シマフクロウ?	肩甲骨右1、烏口骨右1
	カモメ類?	下顎骨破片1
	ウミガラス	尺骨左上1
	トリ	仙椎1
	サケ	椎骨5
	その他	小骨片500
3号竪穴-2(表土)	ヒグマ	寛骨左破片1、中手骨または中足骨1、
	エゾシカ	頭蓋骨破片1
	タヌキ	上腕骨右上左上各1
	ゴマファザラシ	下顎骨右
	アシカ	大腿骨右(若♂?)
	イルカ	椎骨1
	その他	骨片50
3号竪穴-2(覆土)	フィリアザラシ?	橈骨左上2(成1若1)
	アザラシ	尺骨右破片1
	クジラ	骨片約20(もとは2個の骨)
	その他	海獣骨片10
	3号竪穴-2(底面)	タヌキ
3号竪穴-2(底面中央)	ゴマファザラシ?	尺骨左(成)、橈骨左上(成)
	アザラシ?	第2頸椎1
	クジラ	骨片1
	カモメ類	上腕骨左上
	サケ	椎骨1
	その他	海獣骨片40(焼骨)、寛骨破片?(大型)、石鱗1、焼骨片19
	3号竪穴-2 (底面中央)	タヌキ?
3号竪穴-3(覆土)	アザラシ	上腕骨左中間部、第1頸椎破片1、基節骨1(全て焼骨)
	ヒグマ	後頭顆右
	クジラ	骨片1
	その他	陸獣骨片1、海獣陸獣骨片20

表 3 - 3 3, 6, 7 号竖穴出土の動物遺体

竖 穴	種 名	部 位
3号竖穴-4(攪乱)	エゾシカ	切歯骨右1, 下顎骨左1(連合部あり), 後頭骨1, 後頭顆右1, 角片1, 側頭骨右1, 岩操骨1, 上顎左第2, 第3前臼歯, 第1, 第2後臼歯, 下顎後臼歯破片1
	タヌキ?	尺骨右上1(成)
	ラッコ	大腿骨左下
	テン?	大腿骨右上
	アザラシ	脛骨右中間
	ワシ	脛骨右下(大型)(オジロワシまたはオオワシ)
	その他	骨片600
3号竖穴-4(覆土)	エゾシカ	椎骨3, 角片1
	タヌキ	第1頸椎1, 第2頸椎1, 大腿骨左下2, 脛骨左下1右下2, 尺骨右, 踵骨右
	キツネ	踵骨右1
	テン	脛骨右下
	ノウサギ	橈骨左上
	フィリアザラシ	橈骨左上1左(大型)(完存), 尺骨右上1左上2, 肩甲骨右1左1, 上腕骨左1右中間部1右下1
	オットセイ	踵骨右(若小型?)
	クジラ	骨片6
	アホドリ	中手骨左上2
	その他	小型陸獣中手骨または中足骨2, 椎骨6, 頭蓋骨破片2, 下顎骨破片2, 脛骨上破片1 海獣椎骨4, 上顎骨破片2, 鼓骨破片2, その他骨片350
3号竖穴-4(底面)	ヒグマ	上腕骨右中間部(若)
	エゾシカ	骨片1, 角(焼骨), 脛骨左下(成), 角1(破片20), 椎骨2
	タヌキ	橈骨下左1右1
	カワウソ	下顎骨右
	テン	下顎骨左1(成)
	ゴマフアザラシ?	下顎骨右1(焼骨), 肩甲骨右(成)
	アザラシ	橈骨左1(若), 鼓骨破片1, 側頭骨左
	クジラ	骨片1(焼骨)
	サケ	椎骨1(焼骨)
	その他	小型陸獣椎骨6, 陸獣肋骨2, 椎骨2, 海獣肋骨1, 骨片2(うち焼骨1), 陸, 海獣骨片12, 焼骨28, 骨片約100
3号竖穴-4(骨塚)	ヒグマ	上腕骨左中間(若?), 尺骨右, 寛骨左
	エゾシカ	角座(落角), 下顎関節?右, 下顎連合部右, 後頭果+頭蓋骨片6(頭1頭分), 切歯骨2(2個体分)
	タヌキ?	上顎骨右
	トリ	骨片少々
	サケ	椎骨2
その他	海獣椎骨2, 骨片10(焼けていない), その他焼骨片約500(シカ頭 シカ角 海獣骨片)	
6号竖穴-1(覆土)	エゾシカ	後頭顆右1, 下顎関節突起右1
	その他	骨片30(陸獣主体)
6号竖穴-1(底面)	クジラ	焼骨片約20(もとは一つの骨)
	その他	海獣焼骨片1
6号竖穴-2(覆土) (全て焼骨)	フィリアザラシ	第一頸椎1, 寛骨左1(成), 橈骨上左右各1, 脛骨右中間
	アザラシ	下顎骨右1
	クジラ	骨片10
	トリ	骨片2
	その他	海獣骨片30
6号竖穴(骨塚) (全て焼骨)	ヒグマ	上腕骨左中間部(大型成), 中手骨または中足骨1, 寛骨左右?破片1, 大腿骨左右?上破片1(若)
	エゾシカ	頭蓋骨破片5+a, 後頭顆左3右2, 下顎骨連合部右
	タヌキ	上腕骨右下, 肩甲骨左, 椎骨1
	フィリアザラシ	尺骨左1右1(成), 下顎骨左1右1(成), 橈骨左上(成), 側頭骨左1(成), 骨片1
	ゴマフアザラシ?	肩甲骨左(成)
その他	骨片420(陸獣肋骨, 椎骨, 海獣あり)	
7号竖穴(覆土) (全て焼骨)	フィリアザラシ	下顎骨左右各1(成)
	アザラシ	指骨3
	クジラ	骨片5
	サケ	椎骨1
	トリ	骨片2
	その他	海獣椎骨1, 骨片約30
7号竖穴(底面)	マッコウクジラ	歯1(未加工)

表3-4 8号竪穴出土の動物遺体

竪穴	種名	部位	
8号竪穴-1(攪乱)	ヒグマ	下顎骨右1, 基節骨1, 橈骨左上下各1(同一の骨)	
	エゾシカ	後頭顆左2右1, 頭蓋骨2(一つには角の切断痕あり)	
	フィリアザラシ	上腕骨左1(成), 上腕骨右中間1, 上腕骨右1(幼)	
	アザラシ	下顎関節突起1	
	アシカ類	第2頸椎1	
	クジラ	骨片2	
	その他	海獣後頭顆左1, 陸獣骨片200	
8号竪穴-1(覆土)	フィリアザラシ?	上腕骨左下1, 橈骨右上1(焼けていない)	
8号竪穴-1(底面)	ヒグマ	尺骨左中間1	
	エゾシカ	角破片10(切断痕あり)	
	タヌキ?	上腕骨右上1	
	クジラ	骨斧破片1	
	その他	海獣指1, 骨片15	
	8号竪穴-1(骨塚)	ヒグマ	後頭顆右2(小型), 切歯骨左1, 下顎骨左1, 肩甲骨右1, 上腕骨左下1(成), 上腕骨右中間部破片1, 椎骨1, 尺骨左1(若), 寛骨左2(うち1は大型), 中手骨または中足骨3, 基節骨8, 中節骨5, 末節骨1, 大腿骨右中間部
エゾシカ		後頭顆右6左7, 頭蓋骨左2(♂一つは若), 頭蓋骨片多数, 側頭骨左3右1, 後頭骨左1, 頬骨左1, 岩臼骨12左右?, 下顎関節突起左2右1, 下顎連合部左1右1, 下顎骨左上1右1(第1後臼歯), 下顎骨右3後臼歯1, 切歯骨左1右1, 第1頸椎破片1, 第2頸椎1, 中手骨1, 末節骨1, 上腕骨破片1, 中足骨破片1	
アゴヒゲアザラシ		下顎骨左1右1, 上顎骨右1, 側頭骨左1	
アザラシ		後頭顆左1, 上顎骨左1	
アザラシ		下顎関節突起右1	
アシカ?		肩甲骨右1(♂成)	
ウミガラス?		大腿骨破片1	
サケ		椎骨11	
その他		小型獣骨片1, 海獣骨片5, 陸獣肋骨片20, 骨片約2000	
8号竪穴-2(攪乱)		ヒグマ	中手骨または中足骨1
		アゴヒゲアザラシ	上腕骨右下(成)
		フィリアザラシ	鼓骨左1右1, 脛骨右破片1
	クジラ	骨片4	
	その他	海獣破片2, 小型獣大腿骨左上1	
8号竪穴-2(覆土)	ヒグマ	中手骨または中足骨1, 基節骨1	
	ゴマフアザラシ	上腕骨右下1(成)	
	フィリアザラシ	橈骨右上1(成), 上腕骨右1(成)	
	アシカ	上腕骨左1(若♂?), 肩甲骨左1(若♂?)	
	アシカ類	寛骨右上1(若)	
	クジラ	椎骨1(大型), 骨片5(大型)	
	その他	海獣骨片18, 陸獣骨片2	
	8号竪穴-2(底面)	エゾシカ	下顎骨左(成)
ゴマフアザラシ?		下顎骨左1(成), 上腕骨左下1, 鼓骨右1	
アザラシ		側頭骨右1	
クジラ		骨片2	
その他		海獣骨片15	
8号竪穴-3(覆土)	フィリアザラシ	距骨左	
	クジラ	骨片4	
	その他	陸獣肋骨1, 骨片6	
8号竪穴-3(底面)	クジラ	骨片5	
	その他	海獣指4, 骨片10	
8号竪穴-4(覆土)	ヒグマ	上腕骨左下2(成), 中手骨または中足骨破片2, 基節骨1	
	エゾシカ	中節骨1	
	タヌキ?	大腿骨左下, 椎骨1	
	テン?	脛骨右下	
	フィリアザラシ	下顎骨左	
	アザラシ	上腕骨左下(成), 大腿骨右上(成), 大腿骨左下(成), 脛骨左1右1	
	クジラ	骨片2	
	その他	小型陸獣大腿骨左下, 陸獣骨片50, 海獣骨片10	
	8号竪穴-4(底面)	エゾシカ	角破片2
		シマフクロウ?	上腕骨左上1
トリ		仙椎1	
その他		陸獣椎骨1(大型), 骨片1, 海獣第1頸椎破片1(幼), 銚先1(オープンソケット鹿角製)	
8号竪穴-4(骨塚)	ヒグマ	基節骨1, 中節骨1, 末節骨1, 中手骨または中足骨1, 寛骨右下(幼獣)	
	エゾシカ	下顎右第3後臼歯, 上顎左第3前臼歯, 上顎左第1, 第2後臼歯(成), 第2頸椎1, 脛骨左上下各1(同一の骨), 橈骨左上,	
	オットセイ	肩甲骨右(♀?)	
	トリ	椎骨1, 仙椎1	
	その他	海獣椎骨1, 骨片100(うち焼骨約20), 木片1, 土器片1, 鳥骨鏝 完成品1 半欠品2	

表3-5 8~10号竪穴出土の動物遺体

竪 穴	種 名	部 位
8号竪穴(覆土)	ヒグマ	中手足または中足骨1
	エゾシカ	後頭類左1右1, 下顎骨左1, 下顎関節突起左1右1, 岩楯骨1, 第2頸椎1
	クジラ	骨片1
	その他	骨片8
8号竪穴(底面)	フィリアザラシ	肩甲骨右(成)
	ゴマフアザラシ	上顎骨左(成), 下顎骨左(成),
	アザラシ	下顎関節突起左(成)
	その他	骨片10
8号竪穴(骨塚)	ヒグマ	尺骨左1右1, 第1頸椎1(成), 椎骨2(大型), 上腕骨右下(成大型), 上腕骨左下(成), 上腕骨右下1, 基節骨2, 中節骨1, 末節骨2, 橈骨右上1左上1, 橈骨左(成完在), 膝蓋骨1脛骨左上(成)寛骨左下2(うち1は幼獣?)右下1
	エゾシカ	頭蓋骨破片1, 頭蓋骨一個分(若?), 後頭類左4右2, 側頭骨右1, 第1頸椎1, 下顎関節突起左1右2, 下顎左第2, 第3後臼歯(成), 岩楯骨5, 歯破片2, 大腿骨左上(成), 大腿骨左中間1
	テン	下顎骨左1
	アザラシ	第1頸椎1, 尺骨右1, 肩甲骨破片1, 橈骨右上1(成)
	オットセイ	橈骨左1(??)
	アシカ類	肩甲骨左(若?), 脛骨右中間破片1, 肩甲骨 右(若)
	ウグイ	椎骨1(大型)
	ウミガラス	上腕骨右上
	その他	大型陸獣椎骨7, 海獣腓骨1(大型), 肋骨1(大型), 骨片50, その他骨片50
	9号竪穴(表土擾乱) (南北トレンチ)	フィリアザラシ?
その他		海獣肋骨破片2, 骨片2, 椎骨1
9号竪穴(覆土)	エゾシカ	頭蓋骨破片1(角座あり), 側頭骨左右各1, 下顎骨左(連合部のみ成), 下顎骨左(連合部~第2前臼歯成), 切歯骨左1
	タヌキ	後頭類右1
	フィリアザラシ?	下顎骨左破片1
	クジラ	破片3
	サケ	椎骨1
	その他	陸獣?椎骨1, 海獣椎骨1, 焼骨100(陸獣, 海獣肋骨あり)
9号竪穴(底面) (全て焼骨)	ヒグマ	頭蓋骨破片1, 後頭類左3右3(頭蓋骨3個分), 側頭骨右, 下顎骨左右各1(同一個体), 下顎骨右破片1, 上顎骨右破片1, 犬歯破片1, 切歯骨右, 歯根破片6, 中手足または中足骨1, 基節骨2, 末節骨2
	テン	下顎骨右1
	フィリアザラシ	尺骨左1
	アザラシ	寛骨右下1
	その他	焼骨片150
9号竪穴(骨塚) (全て焼骨)	ヒグマ	頭蓋骨, 下顎骨左右各1(成), 下顎骨関節突起左1右(2個体分), 切歯骨左右各1, 中手足または中足骨2, 基節骨1
	エゾシカ	
	その他	骨片約2500(ヒグマとシカの頭蓋骨主体)
10号竪穴-1(覆土)	アザラシ?	大腿骨左上1幼獣
	その他	骨片7
10号竪穴-2(覆土)	ヒグマ	基節骨1
	エゾシカ	歯破片1
	タヌキ?	肩甲骨左1
	フィリアザラシ	橈骨左上1
	トリ	尺骨左下
	その他	骨片15, 鹿角加工品1
10号竪穴-2(底面)	その他	骨片12, 角片1
10号竪穴-3(覆土)	クラカケアザラシ	下顎骨右1
	その他	骨片4
10号竪穴-3(底面)	その他	骨片5(もとは1片)
10号竪穴(覆土)	ヒグマ	下顎関節突起左1
	タヌキ?	脛骨右下
	ゴマフアザラシ?	鼓骨右1
	アザラシ?	上腕骨?破片1
	クジラ	骨片2
	その他	海獣骨片3, 骨片1

表4 各堅穴の骨塚とそれ以外の場所の出土動物遺体

種名	2号		3号		6号		7号		8号		9号		10号		頭蓋骨数										
	骨塚		その他		骨塚		その他		骨塚		その他		骨塚			その他									
	頭	他	頭	他	頭	他	頭	他	頭	他	頭	他	頭	他		頭	他								
ヒグマ	1	○		○		○	1	○									1	+	13						
エゾシカ	2	◎	3	○	2	○	10	○	3	○	1	○							1	+	40				
タヌキ				○	1			○													+	2			
キツネ			1	+				+														1			
カワウソ				+			1	+		1												2			
ラッコ								+																	
ノウサギ								○																	
テン					2	+	3							1			1					7			
アザラシ	1			○			2	○	1	○	1	○		1	◎	1	○		○	1	○		2	○	12
オットセイ								○							○									0	
アシカ類		+		○		+		○						○			○							0	
イルカ・クジラ				○				○									○						○	0	
シマフクロウ						+										+								0	
トリ				+		○		+						○									+	0	
サケ・イトウ				+		+		+						+										0	

注 (1) 頭とは、頭蓋骨の意味で、頭蓋または下顎骨の出土量から、最小個体数を示した。
 (2) 他とは、頭蓋骨以外の部位の出土内容を示す。◎は多量、○は2点以上、+は1点のみの出土。
 ただし、サケ・イトウ類はすべて+とした。

湧別町川西遺跡出土の植物種子

北海道大学 吉崎 昌一

1 遺跡の性格と年代

湧別町川西遺跡は、北海道立北方民族博物館の青柳文吉を担当者として、1991年から1993年にかけて発掘調査された擦文文化とオホーツク文化の竪穴住居で構成される集落である。これらの中から、火災を受けたオホーツク文化の竪穴底面を選び土壌を採取、フローテーションが実施された。これを光学顕微鏡などで観察し、植物種実を取り出して分析同定に回されてきた。調査者によれば、サンプルが採取された竪穴はオホーツク文化の後半期のもので、西暦8世紀から9世紀のものという。

2 検出された植物種実と遺構（表5）

出土した炭化植物種実は、栽培植物3種を含む10種が同定された。このほかに保存部位の関係でイネ科としてしか分類できなかったものがある。これについては不明ミレットとしてカウントしておいた。また、同定が出来なかったものは、不明種子として扱っておいた。これら植物種子資料の出土した竪穴番号と検出された位置は表5に示しておいた。

3 出土した植物種実（図版Ⅰ～Ⅲ）

栽培植物種子：7号竪穴の炉周辺からオオムギ *Hordeum* sp. が11粒、破片が9片検出されている。形態はほぼ同一であるが、加熱のために若干の変形が認められるものもある。いわゆる太ったタイプのオオムギで、かつて擦文オオムギと仮称したものに類似する（吉崎・椿坂：1990, p.27）。オオムギの保存の良いものの背面、正面、腹面観を図版Ⅰ-1 a～1 cに示しておく。図示した資料は長さ4.2ミリ、巾2.7ミリ、厚さ2.5ミリ。

前述のオオムギと同じ地点からアワ *Setaria italica* (L.) P.Beauv とキビ *Panicum miliaceum* L. が各5粒ずつ検出されている（図版Ⅰ-2 a, 3 a）。前者は長さ1.1ミリ、巾1.0ミリ、厚さ0.8ミリ。後者は長さ1.7ミリ、巾1.3ミリ、厚さ1.1ミリ。2 b、3 bはそれぞれの拡大。表皮細胞の一部が観察される。アワは3号竪穴からも1粒検出されている。

雑草種子：図版Ⅱ-4、-5に示したようなタデ属 POLYGONUM L. (-4) とアカザ属 CHENOPODIUM L. (-5) が検出されている。タデ属瘦果は長さ2.1ミリ、巾1.2ミリ、アカザ属は側面からの撮影であるが、上面にヘソ条が観察できる。長さ1.2ミリ、巾1.15ミリ、厚さ0.8ミリ、タデ属は2号、3号、8号竪穴から散漫に、アカザ属種子は2号竪穴のNo.1土器の下で採取された土壌から64粒とまとまって出土している。また、3号竪穴の底面の一括土器の上面からもアカザ属種子が同様に29粒とまとまって検出されている。

表5 湧別町川西遺跡出土炭化種子表

遺構名	サンプル採取区	オオムギ (粒)	(片)	アワ (粒)	キビ (粒)	タデ属 (粒)	アカザ属 (粒)	ニワトコ属 (粒)	マタタビ属 (粒)	ブドウ属 (粒)	(片)	クルミ属 (g)	ブナ科 (g)	不明ミレット (粒)	不明種子 (粒)	
2号壜穴2	底面ビットの中											0.04				1
2号壜穴3	焼土下						1									
2号壜穴1	No 1 土器の下の土					1	64			1			0.45			
2号壜穴	底面 骨塚-4											<0.01				
計						1	65			1		0.04	0.45			1
3号壜穴1	底面							2				0.56				
3号壜穴2	底面					1		5		2		0.36				
3号壜穴3	底面									3	3	1.70				2
3号壜穴4	底面					2		6		1	2					1
3号壜穴	底面 骨塚			1				8				0.22				1
3号壜穴	炉							1				<0.01	0.03			
計				1		3		22		6	5	2.84	0.03			4
7号壜穴	炉	11	9	5	5				1	6		2.10	2.12			3
7号壜穴	底面											0.26	2.83			
7号壜穴	覆土 東						1	1								
計		11	9	5	5		1	1	1	6		2.36	4.95			3
8号壜穴	底面焼土下											0.48				
8号壜穴	底面			1												
8号壜穴	底面 骨塚							1	2							
8号壜穴	底面一括土器の上					1	29	2								9
計				1		1	29	3	2			0.48				9

木本種子：3号、7号、8号堅穴の底面や骨塚からニワトコ属SAMBUCUSの種子が検出された。図版Ⅱ-6がその代表例である。図示したものは長さ1.7ミリ、巾1.1ミリ、厚さ0.6ミリ。

7号、8号堅穴からはごく少量のマタビ属ACTINIDIA Lindl 種子が出土している。図版Ⅱ-7に示したものは、長さ2.1ミリ、巾1.2ミリ、厚さ0.5ミリ。

2号、3号、6号堅穴からブドウ属 VITIS L. 種子が検出された。図版Ⅲ-9 a、9 bに図示しておく。おそらくヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat であろう。

クルミ属 JUGLANS L. 堅果破片は各堅穴から検出された。加熱された痕跡が認められ、きわめて細かく砕かれている。したがって、表5には出土したクルミ堅果破片を重量で示しておいた。

2号、3号堅穴からはブナ科 FAGACEAE、おそらくはコナラ属 QUERCUS L. とみられる堅果が出土している（図版Ⅲ-11、-12）。モンゴリナラ *Quercus mongolica* Fischer かもしれない。そのうち計測に耐える30資料について、長さおよび巾を計測し表6に示しておいた。

不明種子：図版Ⅱ-7、-8に同定できなかった種子を2例示しておく。

表6 コナラ属計測表

No.	L(mm)	W(mm)
1	14.10	9.80
2	11.64	9.52
3	11.73	9.18
4	11.10	9.43
5	13.81	12.19
6	15.58	10.79
7	12.83	9.09
8	12.52	7.90
9	15.88	9.70
10	15.51	12.21
11	15.28	10.19
12	13.64	11.30
13	12.50	9.94
14	14.47	8.52
15	13.56	10.18
16	14.75	10.38
17	14.01	10.01
18	14.57	9.83
19	13.00	9.69
20	13.83	8.60
21	13.41	10.75
22	12.39	9.32
23	11.64	9.49
24	12.06	9.56
25	14.05	10.41
26	12.87	8.88
27	13.25	9.29
28	11.63	9.02
29	12.40	10.07
30	14.45	10.33
平均	13.42	9.85
分散	1.65	0.90
標準偏差	1.31	0.96

4 若干のコメント

オホーツク文化に属する遺構から植物種子が確認されたのは、網走管内網走市二ツ岩遺跡（山田・椿坂：1989）、北見管内枝幸町目梨泊遺跡（吉崎：1994）、北見管内雄武町雄武遺跡（山田：1995）に次いでこの遺跡が4例目になる。これらの遺跡で共通して検出される栽培植物としては、オオムギ、キビがある。なかでも、出土したオオムギは、すべて短粒形の、かって「擦文オオムギ」（吉崎・椿坂：1990）¹⁾とした形態を示すものばかりである事も注目される。このタイプのオオムギはオホーツク海に面した地域を含む北海道東部に多く見られ、北海道中央部になると出土例が減少し、札幌市のサクシュコトニ川遺跡の擦文文化層準には長粒形のものが主体をしめる。そして、今のところ検出例が少ないにしろ短粒形のオオムギは北海道南西部には見られない。ところが、本州では両タイプとも出土しており、問題が複雑になる。つまり、オオムギは、遺跡は地域によって異なったタイプや出土組成を見せる可能性があるらしい（吉崎・椿坂：

1990)。したがって、山田らの言うように（山田・椿坂：1955）、この2種類のタイプのオオムギが、大陸側から日本列島に伝播してきたときの当初の流入路の相違を反映しているとは必ずしも解釈できない。いいかえれば、特定品種が種々の環境適応の結果生じた変異の範囲内として理解出来るのかも知れない。この点、まだ資料が不足していて筆者には決定しかねている。

注

1) このタイプのオオムギは、「擦文オオムギ」が話題となった1990年以前には不明であった。そしてしばしばコムギ?として記録されていた。

《引用文献》

山田悟郎・椿坂恭代

1989：オホーツク文化の遺跡にともなった雑穀 Project Seeds News No.1

山田悟郎

1995：擦文文化の農耕について 『雄武竪穴群遺跡』 北海道開拓記念館研究報告 14号

吉崎昌一・椿坂恭代

1990：北海道における初期農耕関連資料 北海道大学文学部基礎文化論講座人類学研究室

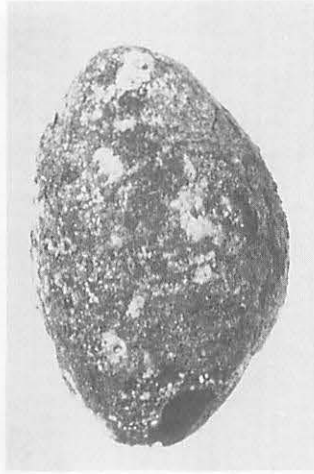
吉崎昌一

1994：目梨泊遺跡出土のオホーツク文化の植物種子 『目梨泊遺跡』 枝幸町教育委員会

図版 I



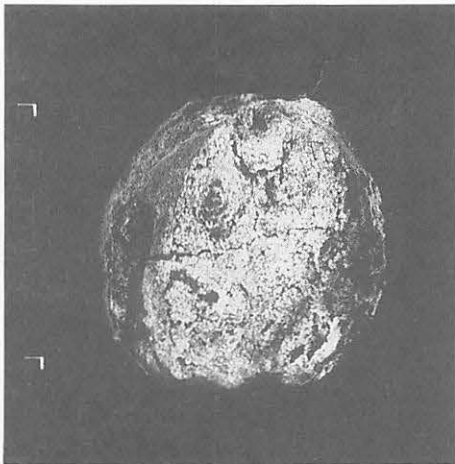
1 a オオムギ 背面



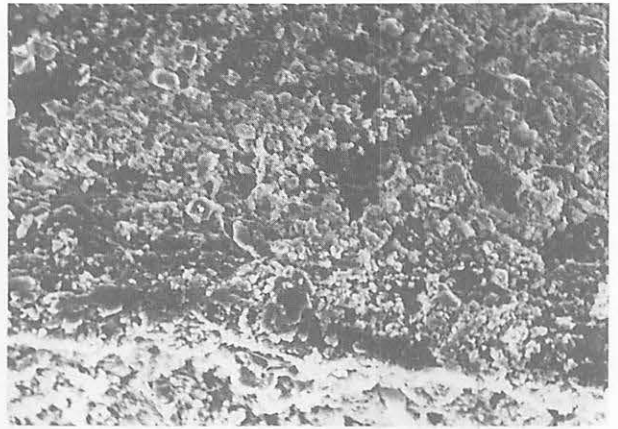
1 b 側面



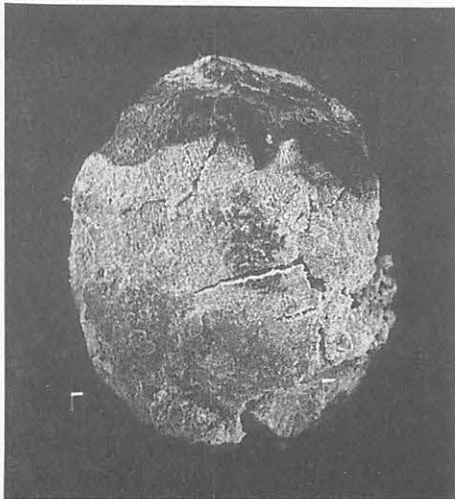
1 c 腹面



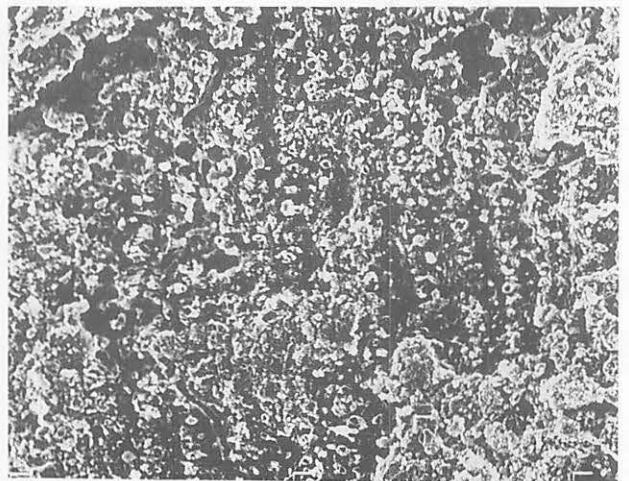
2 a アワ ×35



2 b 2 a の拡大 ×1000

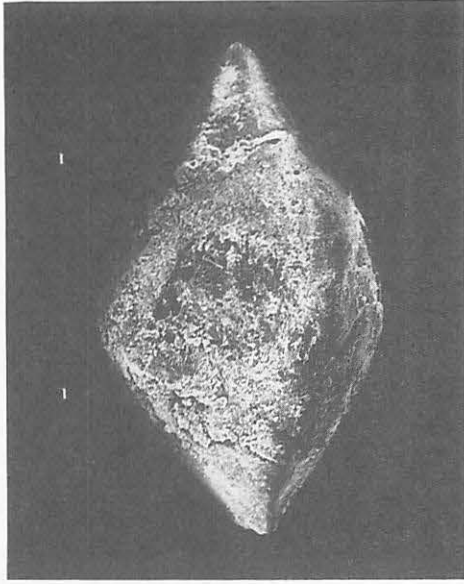


3 a キビ ×35

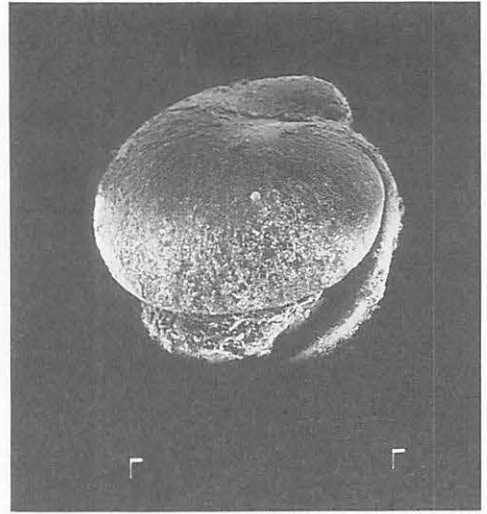


3 b 3 a の拡大 ×500

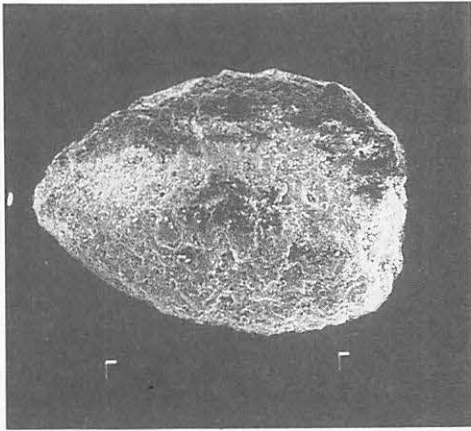
×000は撮影時の倍率。35倍で撮影のスケール「」の間隔1.0mm。



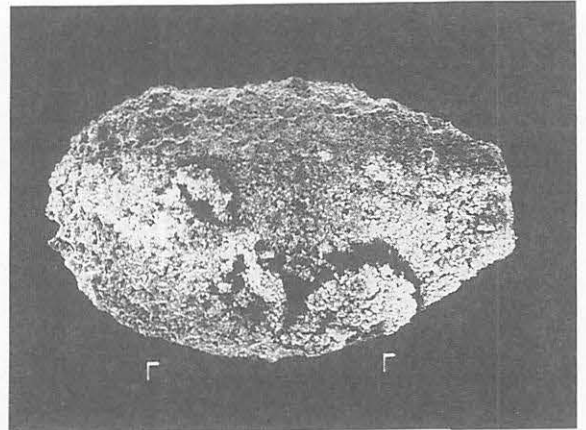
4 タデ属 ×35



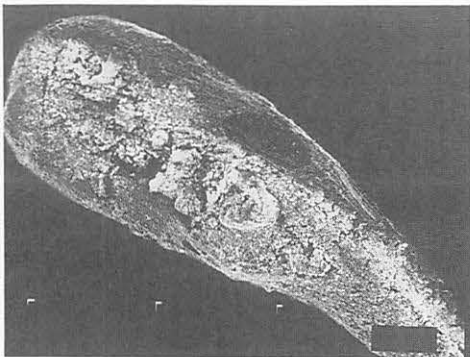
5 アカザ属 ×35



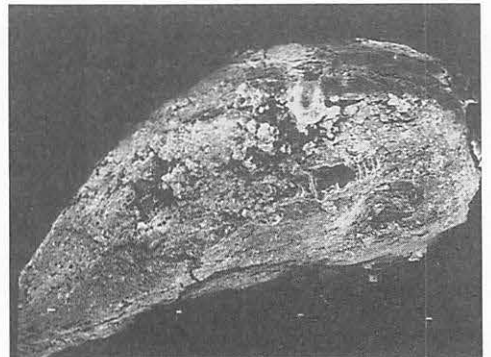
6 ニワトコ属 ×35



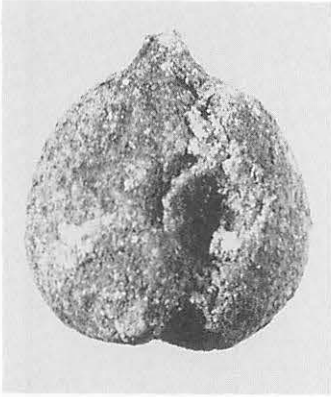
7 マタタビ属 ×35



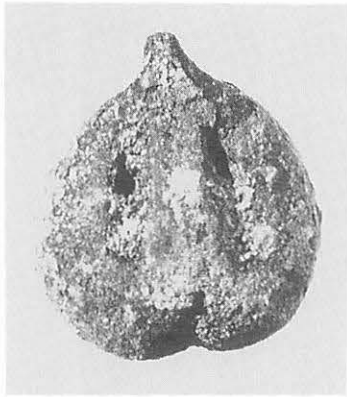
7 不明種子 ×35



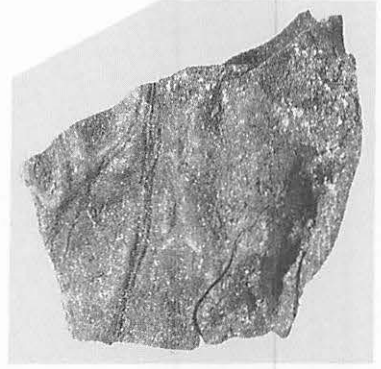
8 不明種子 ×35



9a ブドウ属 腹面



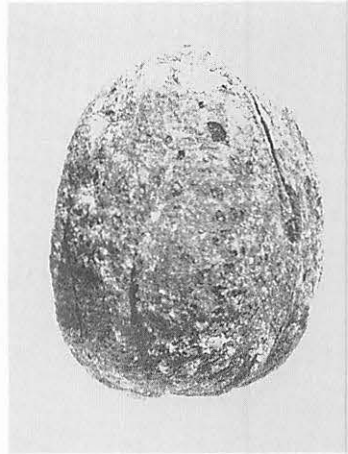
9b 背面



10 クルミ属 核片



11 コナラ属



12 コナラ属

(6) 小結

当館の川西遺跡における調査では、これまで報告したように竪穴を対象に調査を行なった。初年次の調査では3号竪穴、2年次の調査では2、4号竪穴、3年次では8号竪穴を調査した。時期を特定する決め手のない4号竪穴以外は、いずれも貼付浮文土器を伴うオホーツク文化期の竪穴であった。調査の状況から判断して、これらは竪穴住居跡である。

さらにこれら全面調査した竪穴の新旧関係確認のために、周囲に置かれた竪穴構築時の揚げ土とそれに続く周囲の調査を行なった。全面発掘した竪穴の周囲は僅かにとらえることができる浅い窪みがあった。当初、その浅い窪みは平面四角に見えたことから擦文時代の竪穴住居跡が隣接する竪穴同士の構築時の揚げ土の作用で形成された窪みと予想したため、トレンチによる確認で状況を把握することに止めるとした。ところがその調査を進める過程で部分的に面的に広げていったところ、結果的には僅かな掘り込みしか持たないオホーツク文化期の竪穴であることがとらえられた。それらは6、7、10号としたものである。

また1号、9号とした竪穴は、全面調査した竪穴住居跡との関連と竪穴の長軸方向を確認するため一部調査したところ、1号は調査部分全面が以前に掘り返されていることが分かった。このことから、1号竪穴は2号竪穴住居跡とともに、かつて米村喜男衛氏らが実施した調査の対象になった竪穴であると判断した。9号竪穴では粘土を貼った底面と骨塚を確認することができた。貼付浮文土器を伴うオホーツク文化期の竪穴住居跡である。

以下に、これらオホーツク文化期の竪穴とそれに伴って発見された遺物について、いくつかの特徴を記すことにする。

1) 遺構

a 竪穴の重複について

竪穴の壁際に認められる溝は、明瞭に立上がり部分を全周するものではないが基本的には壁際に柱穴とともに存在する。このことから類推すると、竪穴の底面に見られる柱穴を伴い壁際の溝と平行して存在する溝には、それぞれに壁が立っていたと判断される。このことと長軸方向の柱穴から判断して、2号竪穴では少なくとも2回、3号竪穴では1ないし2回、8号竪穴では1ないし2回それが重複して作られることがあったことを示している。それらはいずれも先にあった竪穴を拡張するように重複している。そういった根拠は、いわゆる骨塚や土器などが竪穴の壁際付近から底面の溝を覆うようにあったことである。

重複の特徴としては、以前あった竪穴の壁の一边を生かしているということ、炉跡と思われるものは調査ではそれぞれの竪穴で1か所ずつであることから、炉の位置も変えなかった可能性があること、また底面をも共有していることなどである。意図的な「改築（建て替え）」を示すものであろう。改築を重ねた結果として、われわれは一番外側のプランを「竪穴住居跡」として捉えられたにすぎない。また、そこから出土する遺物の大半は、やはり一番大きな竪穴に伴うものである。

このようなオホーツク文化期の竪穴の重複を示す例は、枝幸町目梨泊、常呂町トコロチャシ、根室市オンネモトの各遺跡で報告されている^{注1)}。

目梨泊遺跡の第4号住居址では、床面にとらえられた溝と柱穴から、炉を中心として隅丸方形プランから五角形プランの竪穴住居へと、1回の増築が想定されている^{注2)}。また、オンネモト遺跡Ⅱ号竪穴住居址では、六角形プランの床面にある貼り床を取り除いたところ、その下からさらに床面がとらえられている。下層床面長軸長13mに対し、上層のそれは14.6mと、ひとまわり大きい。床面に上下二層があることが分かり床面積の増大が確認されている。炉だけは上層の時期にも、下層のが引き続き使用されている。これら2例は川西遺跡と同様に床面積を拡張すると判断されているが、トコロチャシのオホーツク文化期の竪穴はこれとは逆である。二重に巡る炭化木材列の存在から、これを壁ぎわと判断し、外側六角形プランの竪穴が放棄されたあと内側に一まわり小さな竪穴が作られたと判断されている。

以上のような事例から、オホーツク文化期、特に貼付浮文土器を伴う時期の竪穴に見られる重複は単なる偶然ではなく、同じ場所での竪穴づくりにこだわらなければならないといった何らかの社会規制の反映と考えてもよいだろう。ただ、今のところどのような集団がそれぞれの竪穴の造り替えに関与していたかは分からない。

b 竪穴の重複と竪穴間の新旧関係

竪穴同士が近接した状況であることから、竪穴構築時に形成された周囲の揚げ土の重なり合いによって竪穴間の新旧関係を把握しようと試みた。しかし明確な新旧関係はこれから捉えられなかった。川西遺跡の調査では、掘り込みが深いいずれの竪穴でも、底面の規模を拡張しながら「改築（建て替え）」を行なっていることが捉えられたことを先述したが、その都度、周囲にあった揚げ土を切り取りながら、さらにその上に盛土してゆくといった工程がとられたであろう。だがそれぞれの改築行為が、揚げ土のどの部分と対応するのかといったことを捉えることは極めて困難である。

また、あくまでも後世の攪乱が現地表面に及んでいないということが前提であるが、揚げ土の表面状況つまり草が生えている現況の地形図から読み取れることは、2号の西側揚げ土の影響が3、6号側では少ない。逆にとくに6号では2号の揚げ土を取り除いているように思われる。このことが正しいとすれば、2号よりも3、6号が後に作られたということになる。

c 掘り込みの浅い竪穴について

掘り込みの浅い竪穴の底面は黒色腐蝕土中ないし茶褐色・漸移層中にある。いずれも貼付浮文土器を伴うオホーツク文化期のもので、底面付近に炉跡を示す焼土があるが、それらが果して住居として使用されていたかは不明である。平面形は四角ないし五角形を示すものと思われる。6、10号では深い竪穴と同じ位置に動物骨の集積の存在を予測できた。7号では栽培植物の炭化種子が確認されている。

伐採伐根、草刈りなどの後、整地程度を行ないそこに何等かの上屋を設けたと考えられる。

掘り込みの深い堅穴と浅い堅穴とが近接する状態で発見された事例として、常呂町栄浦第二遺跡の11号、12号堅穴がある^{注3)}。11号堅穴は平面が不整な五角形、12号堅穴は正方形である。川西遺跡での遺構のあり方に類似するといえよう。

d 堅穴の長軸方向によるグルーピング

3、8、6、10、1、7号では、堅穴平面の長軸方向はほとんど同じと考えても良いくらい揃っている。2号は僅かに長軸方向をこれらとは違えていることが全体の調査図からとらえることができる。9号はどちらかというとも2号の方向に近い。

e 火災と遺物

全体が攪乱されていた1号堅穴以外は全てが火災住居であった。それぞれの状態は似ており、壁近くでとくに顕著な火災時に形成されたと思われる焼土を取り除くと、部分的に堅い底面上に遺物と骨塚が捉えられる。骨塚を形成する動物骨は、西本氏の分析にもあるとおり大部分が焼けた状態を示していた。骨塚を構成する主体はヒグマ・エゾシカ・アザラシ類で、道東のオホーツク文化の特徴を示しているという。シマフクロウと推定される骨がオホーツク文化の遺跡調査では初めて同定されている。

また火災に遭ったことによって幸いにして残ったものとしては吉崎氏の分析で明らかになった炭化した栽培植物の種子、それと炭化木製品がある。3号、7号堅穴からクルミやドングリとともに検出されたキビ、アワ、オオムギの栽培植物種子は、オホーツク文化の遺跡では、網走市二ツ岩、枝幸町目梨泊、雄武町雄武遺跡に次いで川西が4例目である^{注4)}。偶然の作用で残った木製品破片からは、高度な加工技術による大型の木製品の存在を感じさせる。土器は火災時の強い熱で変色、変形するものがあり、これらは復元過程で接合しない。また黒曜石の石器は熱により発泡するものがある。

2) 遺物

a 貼付浮文土器について

これらの堅穴の全ては、オホーツク文化の貼付浮文土器を伴う堅穴である。その土器の特徴を示す。

・器形：大型土器は、頸部がやや窄まるものの胴部径と口縁径がほぼ同じで、深鉢形であることが特徴である。小型土器には胴部が球状になるものがあり、壺と称してもいいものもある。

・肥厚帯：口縁部の肥厚帯を形成するものが多いが、その作りだし方はいずれも同じである。底部から胴部にかけて成型しその上端を断面切り出し形にしたのち、用意したある一定の幅をもった粘土帯を貼り付けている。決して折り返しによって作られた肥厚帯ではない。またこの肥厚帯をさらに断面切り出し形にしてさらに同じように粘土帯を接着して2段の口縁を形成するものも見られる。このような貼付浮文土器の特徴についてはすでに根室市オンネモト遺跡の調査に

において指摘されている^{注5)}。

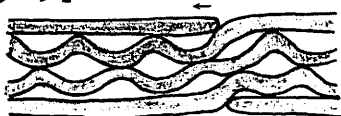
・施文：貼付浮文土器の文様帯は口縁部、頸部に限られる。直線、波線状に粘土紐を貼り付けた文様、粘土紐に刻みを連続する文様、ボタン状の円形粘土の貼り付け文様などが、それぞれ単独にあるいは組みあわさって一つの土器文様を構成している。ここではとくに直線、波線状に粘土紐を貼り付けた文様の特徴的な施文について記述する。

組み合わせには、主に次のような形態がある。〔直線・波線〕、〔直線・波線（重複）・直線〕、〔直線（波線）の重複〕である。このような組み合わせが器面に密に置かれている場合に限りに、ひとつながりの粘土紐によって施文されていることが分かった。この施文時の技法を、ここではらせん技法と仮称しておく。

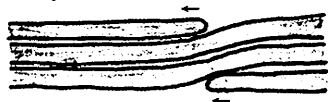
パターン1



パターン2



パターン3



川西遺跡出土の土器にみられるらせん技法を説明すると次のようである。

パターン1：口縁を一周した直線貼付の始点がつぎの波線貼付への変換点となり、波線で周回したのち変換点付近に結び付いて終わる。（図9-1、14-5）

パターン2：パターン1の波線貼付が口縁部や頸部を数周回し、直線貼付に変換して終わる。最初に周回した波線の谷に次の連続する波線の山が接するように施文されこれが繰り返されるため、網目状を呈する。（図9-3、10-14）

パターン3：ひとつながり粘土紐が、らせんを描くように頸部に巻き付けられる。（図24-3）

・系譜：今回の調査で出土した貼付浮文土器に見られる特徴的な施文技法は、オホーツク文化と擦文文化の融合を示すトビニタイ土器に受け継がれる。具体的には、羅臼町トビニタイ、オタフク岩、船見町高台の各遺跡出土の土器に見られる^{注6)}。

b その他

やじり、削器など剥片石器の素材は黒曜石である。ほとんど図示し得ていないが、各堅穴からは黒曜石の原石、コア、フレイクが出土している。木製品は炭化した状態で底面から出土しているが、部分的であって全体を把握できない。

骨角や歯牙を素材とした遺物の存在もオホーツク文化遺跡の特徴であるが、当遺跡は火災住居が占めているため、木製品と同様に骨角器も消失したものも多かったであろう。残存していても極めて保存が悪いものであった。銚先、骨鏃、骨刀、有孔円盤、骨飾などがその主なものである。川西遺跡では、石錘、釣針、大型の銚先など海洋狩猟・漁撈といった生業を積極的に示すような道具類が少ないことも特徴の一つである。

注)

- 1 佐藤隆広編著 1994『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会
八幡一郎他 1974『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部
東京大学文学部考古学研究室編 1964『オホーツク沿岸・知床半島の遺跡（下巻）』東京大学文学部
- 2 「改築、増築」という用語を用いてきたが、本来その行為はあくまでも建物が現に存在することが前提である（トコロチャシの例では、焼失した後に建て替えているのであるから、「新築」ということになるであろう）。今回の発掘調査では現存する住居を建て替えたという確証は得られないが、壁の一部を再利用する、炉や床面レベルと大きく変えることがないことから、かなりそれ以前の建物を意識していることから、その可能性ありとした。
- 3 東京大学文学部考古学研究室編 1972 『常呂』東京大学文学部
- 4 山田悟郎・椿坂恭代 1989「オホーツク文化の遺跡にともなった雑穀」『Project Seeds News No.1』
佐藤隆広編著 1994 『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会
- 5 八幡一郎他 1974 『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部
- 6 東京大学文学部考古学研究室編 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（下巻）』東京大学文学部
涌坂周一他 1980 『船見町高台遺跡』羅臼町教育委員会
涌坂周一他 1991 『オタフク岩遺跡』羅臼町教育委員会

(7) 普及事業（図版20）

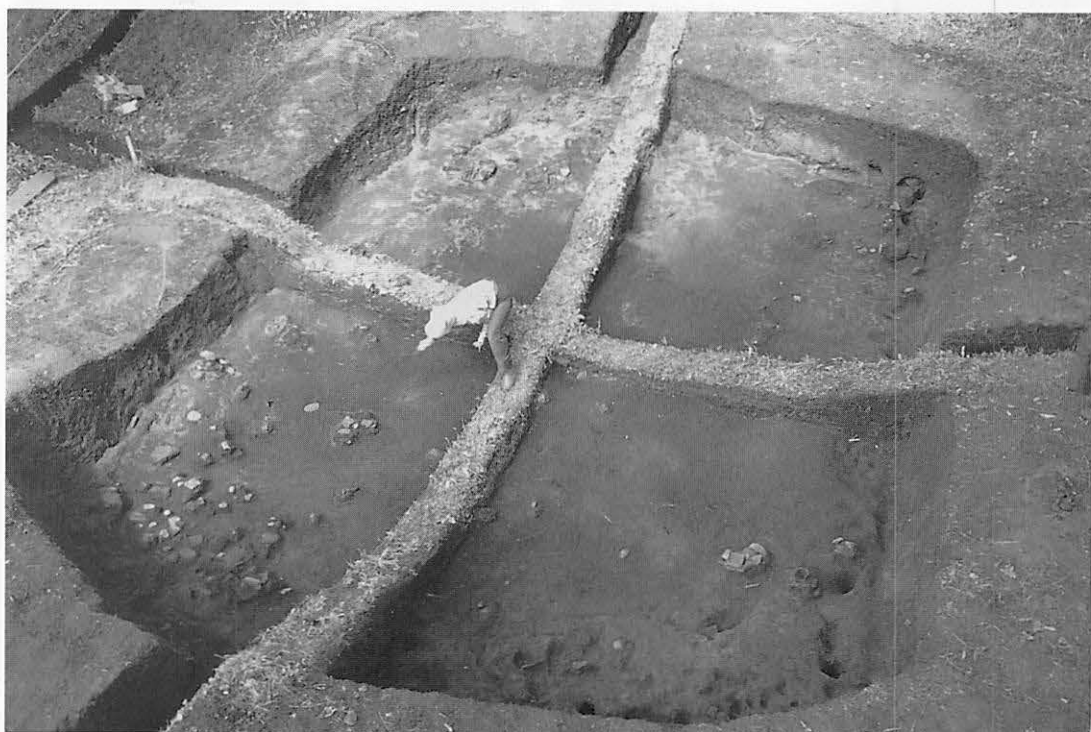
現地において、佐呂間町と地元湧別町の子ども会を対象に説明会を実施した。

また当博物館では、川西遺跡の出土遺物の近年話題をまいている枝幸町、常呂町のオホーツク文化の遺跡から発見された遺物を借用して企画展を開催した。開催期間は平成5年11月2日から14日であった。

圖 版



遺跡遠景



3号竪穴調査状況



3号竖穴完掘後



3号竖穴北西壁



3号竖穴銛先出土狀況



3号竖穴土器出土状况



3号竖穴出土土器



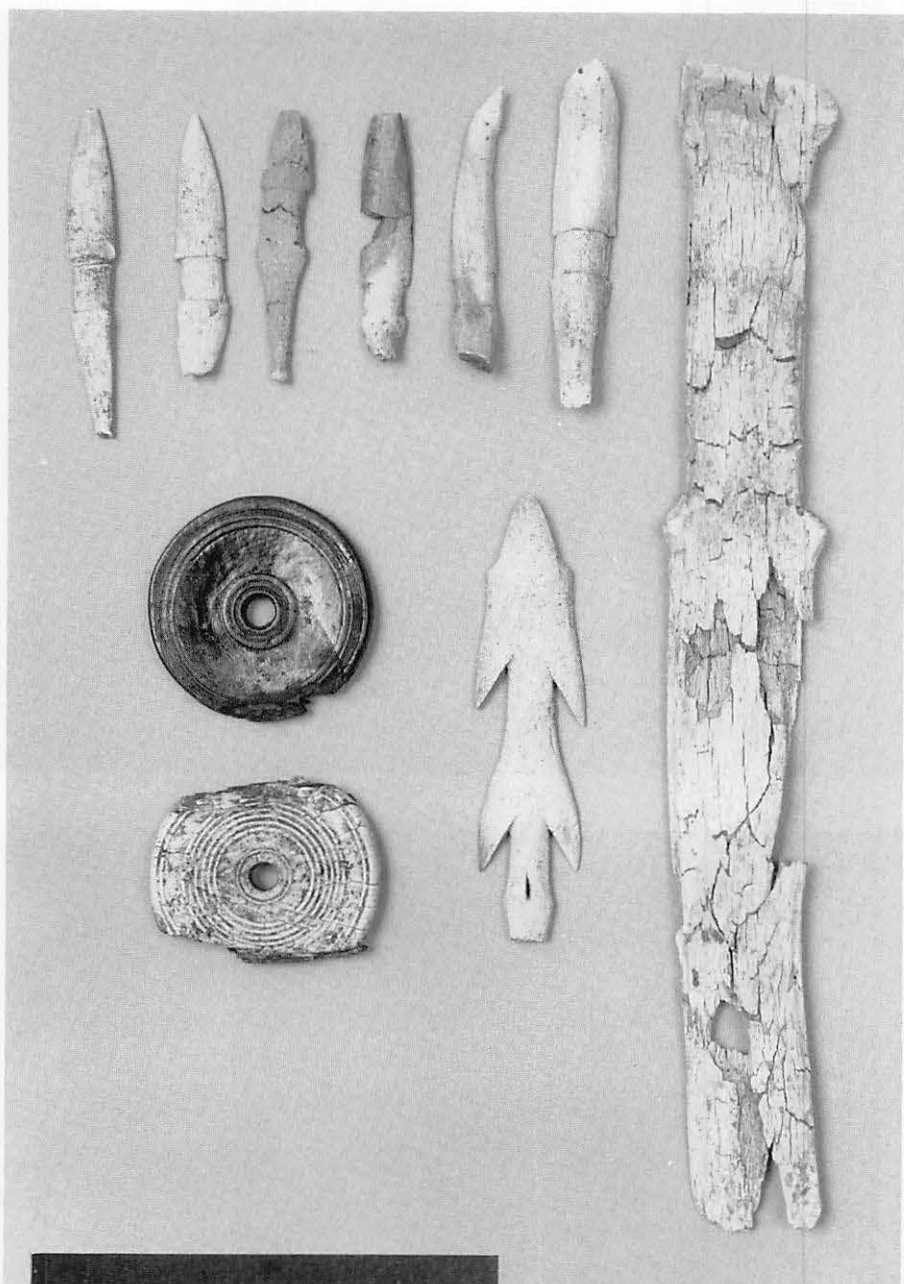
3号竖穴出土土器



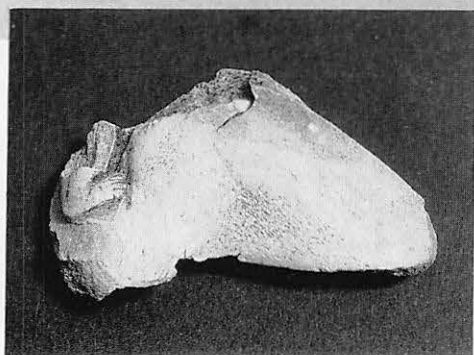
3号竖穴出土土器



3号竖穴出土石器

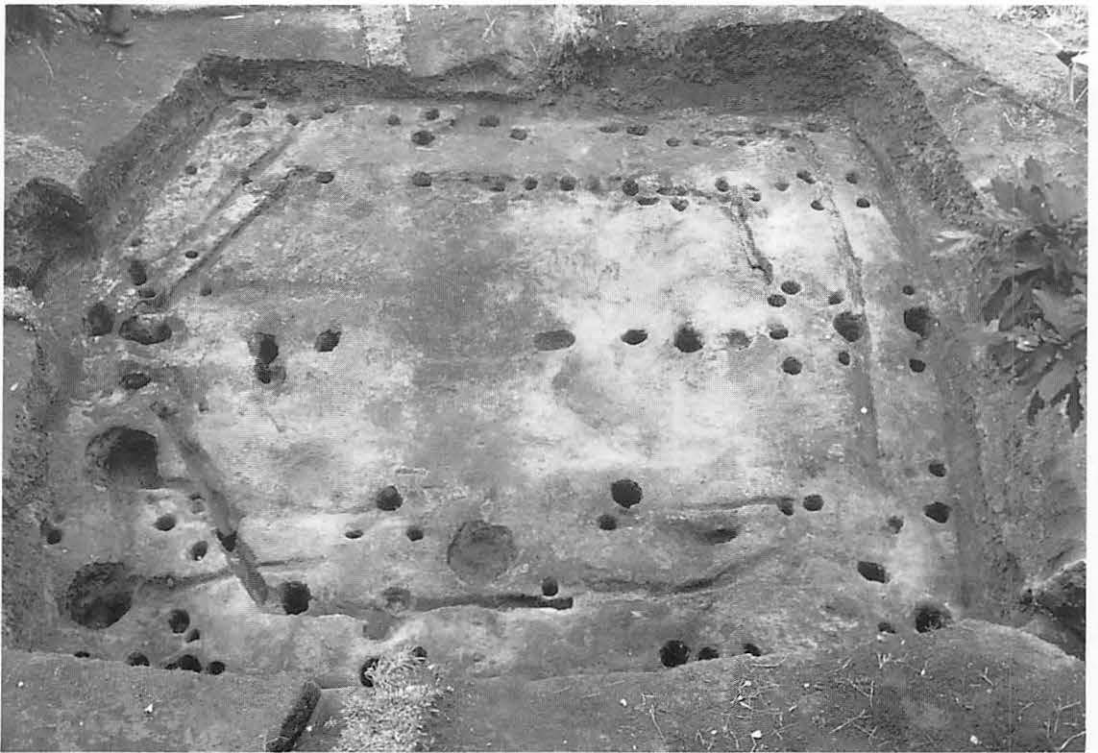


3号竖穴出土骨角器





2号竖穴調査状況



2号竖穴完掘後



2号竖穴北西側
骨塚と遺物出土状況



2号竖穴南東側
調査状況



2号竖穴南東側
底面のピット



2号竖穴南東壁側



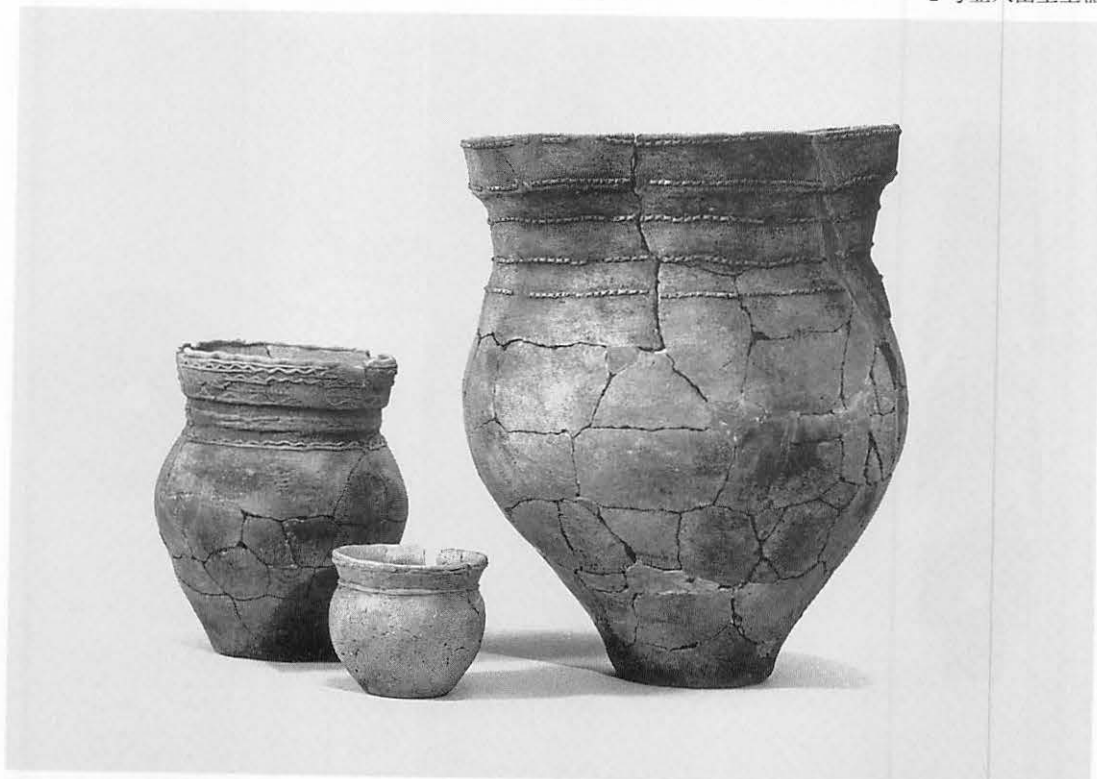
2号竖穴北西壁側

4号竖穴完掘後





2号竖穴出土土器



2号竖穴出土土器



2号竖穴に伴うピット出土土器

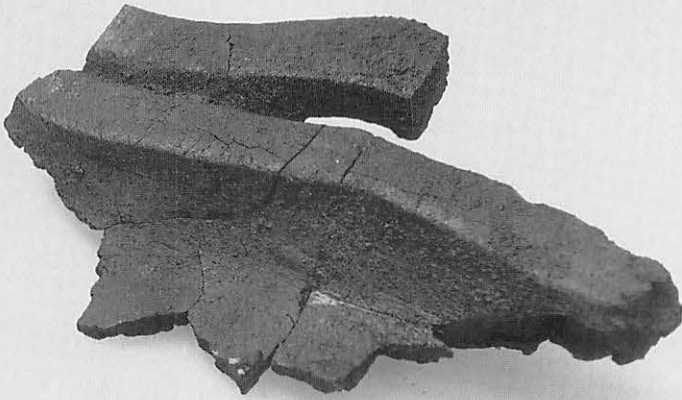


2号竖穴出土石器



2号竖穴出土骨角器

(上)



(下)



2号竖穴出土木製品



6号竖穴出土遺物



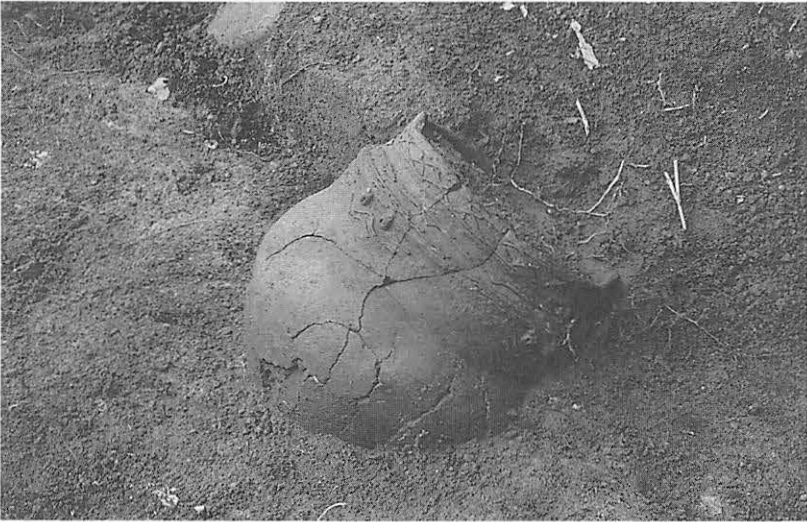
8号竪穴完掘後（南→北）



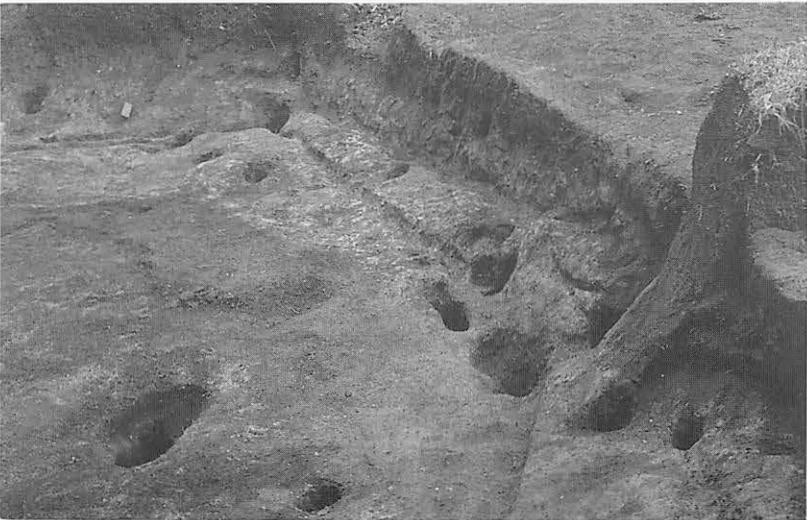
8号竪穴完掘後（西→東）



8号竖穴北西侧



8号竖穴土器出土状况



8号竖穴南东侧



8号竖穴石組み炉



8号竖穴北西底面



8~10号竖穴調査状況



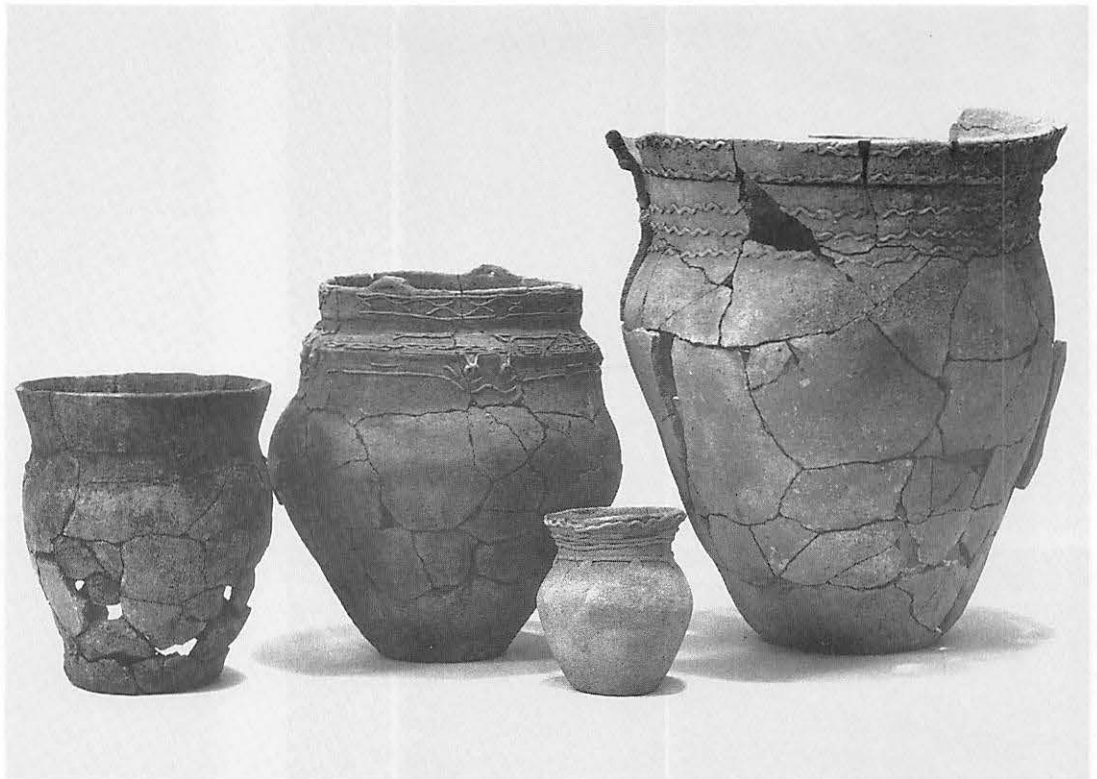
1号竪穴調査状況



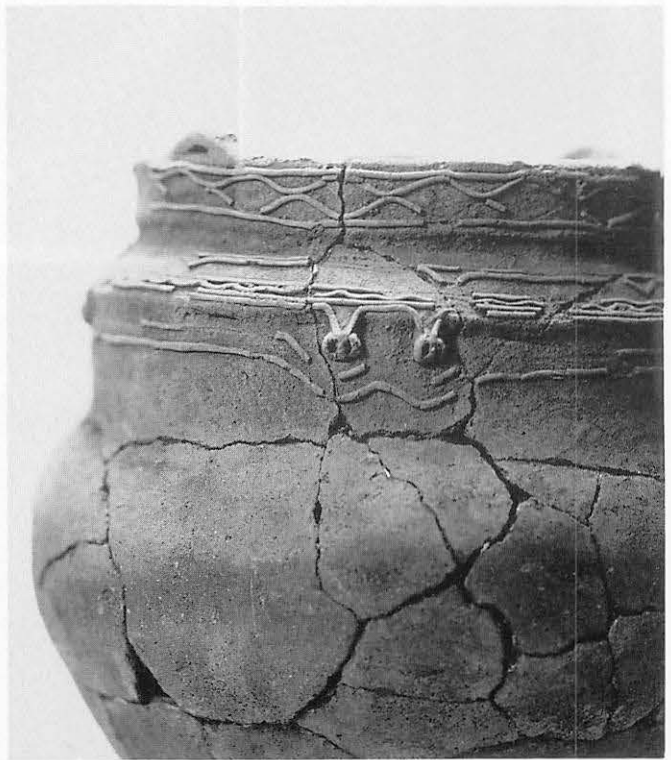
10号竪穴調査状況



10号竪穴遺物出土状況



8号竖穴出土土器



(拡大)



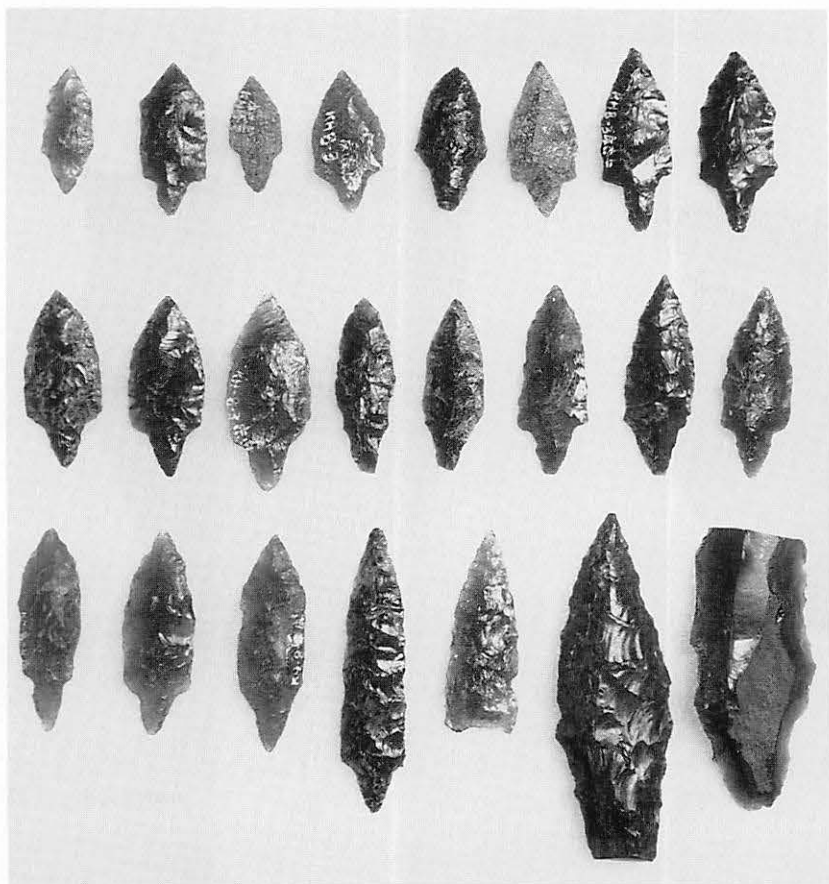
9号竖穴出土土器



9号竖穴出土土器

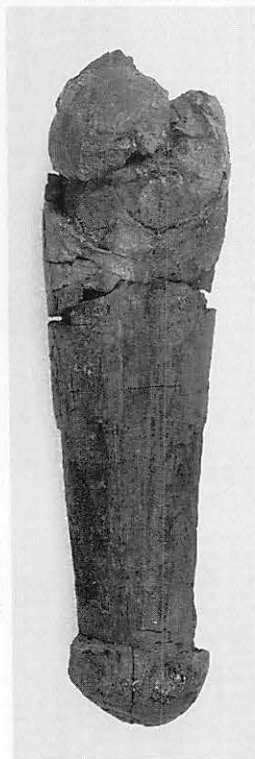


10号竖穴出土土器

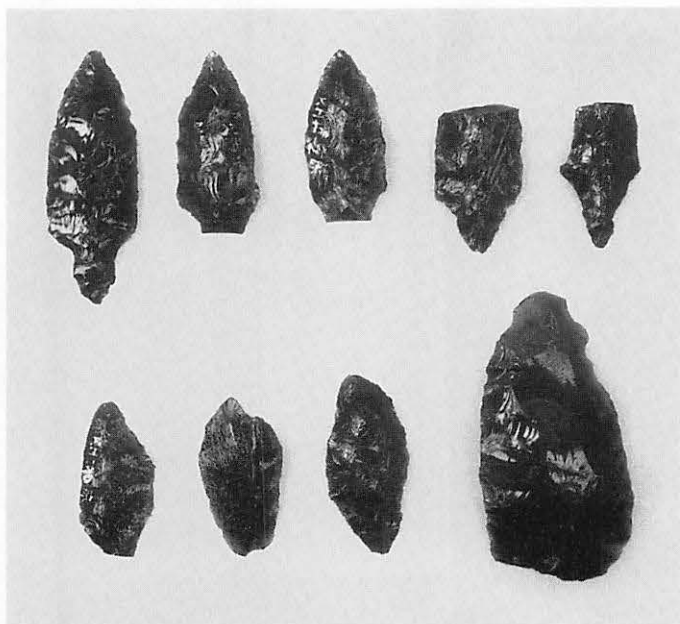


8号竖穴出土石器

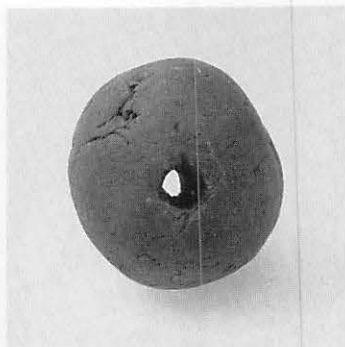
8号竖穴出土木製品



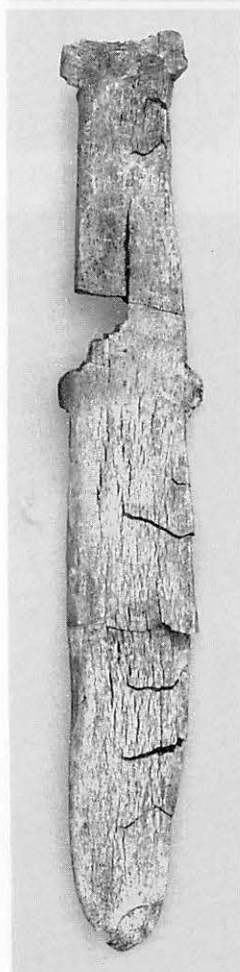
8号竖穴出土骨角器



10号竖穴出土石器



10号竖穴出土土玉



10号竖穴出土骨器



子ども会への説明会



企画展状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	ゆうべつちょうかわにしいせき							
書名	湧別町川西遺跡							
副書名	北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査							
巻次								
シリーズ名	北方民族博物館調査報告							
シリーズ番号								
編著者名	青柳文吉							
編集機関	北海道立北方民族博物館							
所在地	〒093 北海道網走市字潮見313-1							
発行年月日	1995年3月30日							
ふりがな 書収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市区町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
かわにしいせき 川西遺跡	もんべつぐんゆうべつちょうかわに し紋別郡湧別町川西	559	I-22-5	44度14分	143度36分	1991.7 ～1993.7	400	博物館の 調査研究 事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
川西遺跡	集落跡	オホーツク文化 期、擦文時代		竪穴	土器、石器、骨角牙 器、炭化木製品	オホーツク文化期 の焼失住居跡、栽 培植物の炭化種子 (オオムギ、アワ、 キビ)		

北方民族博物館調査報告

湧別町川西遺跡

－北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査－

1995(平成7)年3月30日

編集・発行：北海道立北方民族博物館

〒093 北海道網走市字潮見313-1 電話0152-45-3888

印 刷：株式会社 大成印刷
